

著刊目録

自昭和三年十一月
至昭和四年四月

昭和三年十一月より同四年十月までの一ケ年間に於ける文藝に關する著作の全部を、その著者(譯者・編者)別に示したものが、この著刊目録である。

一、配列は著者(譯者・編者)を五十音順とし、著作は發行の年月順に配列した。

一、著者(譯者・編者)は便宜上昭和四年十一月現在の文藝家協會々員及びその他の主なるものに限つた。

一、著者(譯者・編者)が三名以上にて一冊をなすものは煩雜を避けるために省略した場合がある。

一、所定の一年間に於ける出版物にして、この目録に洩れたものは、別項「出版一覽」A部B部によつて見出されたい。

- 有馬生馬
回想のセザンヌ(岩波文庫)
三〇 岩波書店 十月
- 飯島正
シネマのABC
一〇〇 厚生 九月
- 生田春月

- 抒情小曲集 一七〇 新潮社 六月
- 傳記メルケとヘルデルリン 三〇 行人社 七月
- 生田春月篇(現代詩人全集八) 三〇 新潮社 九月

生田長江

- 悲劇の出生・外一篇譯(ニイチエ全集一〇) 三〇〇 新潮社 一月
- 神曲・譯(世界文學全集二) 三〇 同 九月

生田蝶介

- 短歌用語小辭典 二〇三 立命館大學出版部 四月

生田花世

- 小説集・燃ゆる頭 一八〇 中西書房 四月

泉鏡花

泉鏡花集(豪華版)

- 昭和集 八〇 春陽堂 三月
- 大養健集(新進傑作小説全集一) 二〇〇 改造社 五月

犬養健

- 南京五月祭 二〇〇 改造社 五月

伊原青々園

- 豫約平凡社 九月

伊原青々園集(現代大衆文學全集二二五)

- 豫約平凡社 十月

伊良子清白

詩集・孔雀船 三〇 梓書房 四月

宇野浩二

戀愛合戦(新潮文庫)

- 一〇〇 新潮社 二月

宇野浩二篇(現代長篇小説全集二〇の内)

- 豫約同 十月

宇野千代

新選宇野千代集

- 一〇〇 改造社 九月

江戸川亂歩

陰 一五〇 博文館 十二月

ポー・ホフマン集・譯(世界大衆文學全集三〇)

- 豫約改造社 四月

江戸川亂歩集(探偵小説全集)

- 豫約春陽堂 六月

江戸川亂歩集(世界探偵小説全集二二)

- 豫約博文館 八月

江戸川亂歩集(日本探偵小説全集三)

- 豫約改造社 八月

シャイロック本 譯(世界探偵小説全集二)

- 豫約博文館 九月

大泉黒石

著刊目録

大泉黒石集(現代ユウモア全集一〇〇)

- 豫約現代ユウモア全集刊行會 一月

岡田三郎

岡田三郎集(新進傑作小説集一〇の内)

- 豫約平凡社 六月

岡本綺堂

岡本綺堂集(日本探偵小説全集六)

- 豫約改造社 八月

世界怪談名作集・譯(世界大衆文學全集三五)

- 豫約同 八月

岡本綺堂集(探偵小説全集六)

- 豫約春陽堂 九月

沖野岩三郎

沖野岩三郎篇(現代長篇小説全集二二の内)

- 豫約新潮社 五月

萩原井泉水

古人を説く 一八〇 春陽堂 一月

俳句趣味論(春秋文庫一三)

- 三〇 春秋社 五月

井泉水句集(改造文庫)

- 三〇 改造社 八月

尾崎士郎

尾崎士郎集(新進傑作小説全集一〇の内)

- 豫約平凡社 六月

長田幹彦

新選長田幹彦集

- 一〇〇 改造社 五月

長田幹彦篇(明治大正文學全集二三の内)

- 豫約春陽堂 五月

大佛次郎

赤穂浪士(中) 一五〇 改造社 五月

角兵衛獅子 一五〇 先進社 二月

幽霊傳奇船 一三〇 同 三月

ごろつき船(上) 一八〇 改造社 五月

夜の恐怖・譯(世界探偵小説全集一五)

- 豫約同 七月

赤穂浪士(下巻) 一五〇 同 八月

鞍馬天狗山獄奇談 一五〇 先進社 九月

尾山篤二郎

影繪双紙 一三〇 平凡社 八月

明治歌壇史 三〇 紅玉堂 八月

鑑賞長塚節歌集 一〇〇 素人社 十月

片岡鐵兵

片岡鐵兵集(新進傑作小説全集)

- 豫約平凡社 四月

新選片岡鐵兵集

- 一〇〇 改造社 九月

加藤武雄

長篇小説 川端康成集(新潮社九月)	宴 一・六 新潮社 九月	菊池寛全集(九)	豫約平凡社 七月	白秋國民歌謠集(改造文庫)	豫約改造社 十月
川端康成集(新進傑作全集)	豫約平凡社 八月	菊池寛全集(一)	豫約同 九月	北村喜八	シヨオ集・譯(世界戯曲全集・六)
上司小剣	七司小剣篇(現代長篇小説全集・一六)	長篇東京行進曲	一・五 春陽堂 十月	木下空太郎	えすばにや・ぼるとがる記
瀧原有明	有明詩抄(岩波文庫)	菊池寛全集(一〇)	豫約平凡社 十月	木下空太郎集(日本探偵小説全集・一七の内)	三・〇 岩波書店 八月
菊池寛	菊池寛全集(七)	北原白秋	一・〇〇 改造社 十月	楠山正雄	ジャン・クリストフ物語
菊池寛全集(五)	豫約平凡社 一月	新選北原白秋集(散文篇)	一・〇〇 改造社 十月	窪田空穂	自選歌集・榎の木(改造文庫)
放蕩息子・譯(世界大衆文學全集・七)	豫約同 三月	童話緑の觸角	二・五 同 三月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
菊池寛全集(六)	豫約平凡社 五月	日本童話集・編(日本兒童文庫・二)	豫約アルス 三月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
長篇小説 明 晴 禍(上巻)	一・二〇 文藝春秋社 六月	長歌集・篋	二・八〇 梓書房 五月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
菊池寛全集(三)	豫約平凡社 六月	北原白秋集(現代詩人全集五の内)	豫約新潮社 七月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
新選久米正雄集	一・〇〇 改造社 六月	世界童話集・譯(日本兒童文庫の内)	豫約アルス 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
蔵原惟人	七 南宋書院 三月	詩集・海豹と雲	四・八〇 同 九月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
壊滅・譯	一・二〇 改造社 九月	純情銀の花籠	一・五 寶文館 九月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
藝術と無産階級	一・二〇 改造社 九月	白秋全集(七)	豫約アルス 九月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
甲賀三郎	甲賀三郎集(現代大衆文學全集・二)	北原白秋集(現代短歌全集・九の内)	北原白秋集(現代短歌全集・九の内)	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
甲賀三郎集	豫約平凡社 二月	齋藤茂吉	三・五 神谷書店 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
甲賀三郎集(日本探偵小説全集・一四の内)	豫約改造社 十月	新訂金槐和歌集(岩波文庫)	四・〇 岩波書店 五月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
小島政二郎	一・七〇 金の星社 五月	佐々木邦	一・二〇 改造社 七月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
小林多喜二	七 職旗社 九月	佐々木邦集(現代ユウモア全集・一六)	一・五 資文堂 七月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
蟹工船(日本プロレタリア作家叢書・二)	七 職旗社 九月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
西條八十	一・五 交蘭社 七月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
鑑賞評釋・愛吟詩百篇	一・五 交蘭社 七月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
各篇批評特選抒情詩集	一・四〇 同 七月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
少年詩集	一・五 大日本雄辯會 四月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)
新選西條八十集	一・五 大日本雄辯會 四月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	久米正雄	久米正雄篇(日本戯曲全集四七の内)

新選久米正雄集	一・〇〇 改造社 六月	齋藤茂吉	三・五 神谷書店 八月	佐々木味津三	一・五 平凡社 六月
蔵原惟人	七 南宋書院 三月	新訂金槐和歌集(岩波文庫)	四・〇 岩波書店 五月	謎の人形師	一・五 平凡社 六月
壊滅・譯	一・二〇 改造社 九月	佐々木邦	一・二〇 改造社 七月	佐佐木茂索	アルセエヌ・リュバン・譯
藝術と無産階級	一・二〇 改造社 九月	佐々木邦集(現代ユウモア全集・一六)	一・五 資文堂 七月	新選佐佐木茂索集	一・五 改造社 五月
甲賀三郎	甲賀三郎集(現代大衆文學全集・二)	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	詩集・トランシット
甲賀三郎集	豫約平凡社 二月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
甲賀三郎集(日本探偵小説全集・一四の内)	豫約改造社 十月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
小島政二郎	一・七〇 金の星社 五月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
小林多喜二	七 職旗社 九月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
蟹工船(日本プロレタリア作家叢書・二)	七 職旗社 九月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
西條八十	一・五 交蘭社 七月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
鑑賞評釋・愛吟詩百篇	一・五 交蘭社 七月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
各篇批評特選抒情詩集	一・四〇 同 七月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
少年詩集	一・五 大日本雄辯會 四月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月
新選西條八十集	一・五 大日本雄辯會 四月	佛蘭西童話集・譯(世界童話全集)	三・五 神谷書店 八月	佐藤惣之助	一・八〇 素人社 十月

佐藤春夫篇(現代長篇小説全集・二〇の内)	九〇〇 改造社 九月
里見淳	豫約 新潮社 十月
里見淳篇(現代長篇小説全集・四三)	豫約 新潮社 十月
里見淳集(豪華版)	八・五〇 春陽堂 三月
新選里見淳集	一〇〇 改造社 八月
十一谷義三郎	唐入お吉 一・八〇 萬里閣 一月
あのだこの道	二〇〇 創元社 五月
志賀直哉	夜の光(新潮文庫)
志賀直哉篇(明治大正文學全集・四〇の内)	一〇〇 新潮社 二月
島崎藤村	豫約 春陽堂 六月
藤村傑作集・第一集(新潮文庫・二)	一〇〇 新潮社 一月
藤村傑作集・第二集(新潮文庫・二)	一〇〇 同 一月
藤村紀行文集(改造文庫)	二〇〇 改造社 二月
北村透谷選集(改造文庫)	
藤村感想集(新潮文庫・一一)	一〇〇 改造社 二月
長篇新小説	生 一・四〇 春陽堂 六月
新選島崎藤村集	一〇〇 改造社 六月
島崎藤村集(豪華版)	八・五〇 春陽堂 六月
櫻の實の熟する時(岩波文庫)	四〇 岩波書店 六月
島崎藤村篇(現代長篇小説全集・六)	豫約 新潮社 六月
下村悦夫	下村悦夫集(現代大衆文學全集・一六)
白鳥省吾	豫約 平凡社 六月
童話・カバン	七九 九段書房 六月
鈴木善太郎	モルナールお互に愛したら・譯 一・八〇 第一書房 四月
短篇集	モルナール芝居は眺向き 二〇〇 同 九月
鈴木三重吉	黒い騎士(世界童話集・一)
黒い騎士	三・五〇 春陽堂 五月
湖水の女(世界童話集・二)	三・五〇 同 六月
踊のたき火・編(世界童話集・三)	三・五〇 同 八月
かるたの王さま・編(世界童話集・四)	三・五〇 同 九月
千家元吉	長篇詩 情の家の二〇〇 木星社 七月
相馬泰三	新選相馬泰三集 一〇〇 改造社 五月
高垣眸	銀蛇の窟(少年冒險小説全集・九)
高桑義生	白蝶秘門 一・三〇 平凡社 五月
高桑義生集(現代大衆文學全集・二七)	豫約 同 七月
白蝶秘門(續篇)	一・五〇 同 八月
高田義一郎	高田義一郎集(現代ユウモア全集・一一)
高田義一郎	豫約 現代ユウモア全集刊行會 七月
高橋邦太郎	海の義賊・譯(世界大衆文學全集・二九)
海の義賊	豫約 改造社 十月

竹友遠風	世界童話集(譯上)	豫約 近代社 十月
谷籟次	テキサス無宿(他三十一篇)	一・五〇 改造社 三月
もだん・でかめろん	一・三〇 同 三月	
踊る地平線	二・五〇 中央公論社 十月	
谷崎潤一郎	近代情痴集(新潮文庫・八)	
潤一郎犯罪小説集(新潮文庫・二四)	一〇〇 新潮社 二月	
谷崎潤一郎集(日本探偵小説全集・五)	一〇〇 同 五月	
饒舌録	一・三〇 同 十月	
谷崎精二	谷崎精二篇(現代長篇小説全集・三二の内)	
田山花袋	田山花袋篇(明治大正文學全集・三二)	
田山花袋篇(現代長篇小説全集・一七)	豫約 新潮社 八月	
近松秋江	新選近松秋江集	
カチユウシヤ・譯(世界大衆文學全集・一六)	一〇〇 改造社 五月	
坪内逍遙	シエークスピア研究録 三〇〇 早稲田大學 五月	
坪内逍遙集(現代ユウモア全集)	出 版 部 五月	
良寛と子守その他	一・五〇 早稲田大學 出版部 六月	
新曲浦島・新蘇映姫(岩波文庫)	二〇 岩波書店 六月	
坪内逍遙篇(日本戯曲全集・三二)	豫約 春陽堂 六月	
坪内逍遙集(新日本少年文學全集・一の内)	株 式 會 社 七月	
戸川貞雄	長篇小説 女性の復讐 一・三〇 平凡社 七月	
戸川秋骨	戸川秋骨集(現代ユウモア全集・三)	
土岐善喜	豫約 現代ユウモア全集刊行會 四月	
自選歌集・空を仰ぐ(改造文庫)	二〇 改造社 四月	
德田秋聲	德田秋聲集(現代日本文學全集・一八)	
德田秋聲篇(現代長篇小説全集・一〇)	豫約 改造社 五月	
德田秋聲篇(明治大正文學全集・二五の内)	豫約 新潮社 二月	
新選德田秋聲集	一〇〇 改造社 十月	
豊島與志雄	新選豊島與志雄集 一〇〇 改造社 四月	
中内蝶二	劍豪近藤勇(續篇) 一・三〇 平凡社 三月	
中西伊之助	大菩薩峠(七) 豫約 春秋社 七月	
或る農夫の家	一・五〇 共生閣 七月	
中村白葉	罪と罰・三・譯(岩波文庫)	
復活・上・讀(岩波文庫)	六〇 岩波書店 七月	

復活・中・譯(岩波文庫)	・四〇同	五月	野村胡堂	豫約第一書房	四月	葵豐吉(丸木砂土)	・八五博	文館	八月	
復活・下・譯(岩波文庫)	・四〇同	五月	美男狩(前篇)一・三〇平	凡社	三月	メトロポリス他一篇・譯(世界大衆文學全集一五)	豫約改造	社	五月	
トルストイ全集(一)譯	・四〇同	五月	美男狩(續篇)一・三〇平	凡社	九月	青春獨逸男	一・九	文藝春秋社	六月	
中村武藏夫	豫約同	十月	萩原朔太郎	詩の原理	一・八	近代劇全集・八・譯	豫約第一書房	七月	七月	
長篇蒼白き薔薇	一・六	新潮社	長谷川時雨	小説處女時代	一・三〇平	西洋十夜・譯	一・七	文藝春秋社	八月	
長與善郎	一・六	新潮社	長谷川時雨	時雨脚本集(一)三・〇〇	女人藝術社	西部戦線異状なし・譯	一・五	中央公論社	十月	
一人旅する者二・〇〇	武藏野書院	六月	長谷川伸	日染月染(前後篇)	各・三〇平	馬場孤蝶	イリアード・譯(世界文學代表全集二)	豫約	世界文學代表全集刊行會	一月
野上彌生子	・四	岩波書店	長谷川誠也	股旅草鞋	一・三〇同	濱田廣介	ひろすけ童話讀本(四)	一・八	文教書院	二月
野上彌生子篇(明治大正文學全集二三の内)	豫約	春陽堂	文藝思潮論	長谷川伸集(日本探偵小説全集二七の内)	豫約	改造	社	九月	九月	
野口米次郎	ロマンス・譯(世界大衆文學全集三二)	・三	長谷川如是閑	長谷川如是閑集(現代ユウモア全集四)	豫約	現代ユウモア全集刊行會	三月	三月	三月	
芭蕉論(春秋文庫二四)	・五	春秋社	長谷川如是閑	長谷川如是閑集(現代ユウモア全集四)	豫約	現代ユウモア全集刊行會	三月	三月	三月	
昇曙夢	近代劇全集・二九・譯	五月	畑耕一	棘の樂園	二・五	博文館	三月	三月	三月	
			陽氣な喇叭卒(現代ユウモア叢書)	陽氣な喇叭卒(現代ユウモア叢書)	一・二〇	資文堂	五月	五月	五月	
			劍魔白藤幻之介	劍魔白藤幻之介	一・二〇	資文堂	五月	五月	五月	

葉山嘉樹集(新進傑作小説全集)	・三〇	改造社	光と闇(日本プロレタリア作家叢書一)	・七	戦旗社	九月	前田河廣一郎	新選前田河廣一郎集(續篇)	一・〇〇	改造社	五月	
日夏耿之介	明治大正詩史(卷上)	・三	細田民樹	細田民樹集(現代長篇小説全集二三の内)	豫約	新潮社	一月	前田河廣一郎集(現代日本文學全集五〇の内)	豫約	同	七月	
明治文學雜考	三・三〇	梓書房	堀口大聖	夜ひらく譯(新潮文庫七)	一・〇〇	新潮社	一月	隨筆・惡漢と風景	一・二〇	同	八月	
平林初之輔	文藝理論の諸問題	一・八〇	コクトオ詩抄・譯	二・八〇	第一書房	三月	正木不如丘	正木不如丘集(現代ユウモア全集)	豫約	現代ユウモア全集刊行會	二月	
平林初之輔集(日本探偵小説全集一四の内)	豫約	改造社	戯曲・オルフェ・譯	一・八〇	同	四月	正宗白鳥	正宗白鳥集(現代日本文學全集二二)	豫約	改造社	二月	
平山蘆江	平山蘆江集(現代大衆文學全集三二)	・二	近代劇全集・二〇・譯	豫約	同	五月	現代文藝評論	一・五	同	七月		
唐人船	・一	吾同	歌集・男ごころ	一・五	同	六月	松居松翁	松翁戯曲集・高野長英	二・四	新潮社	十月	
廣津和郎	長篇薄暮の都會二・〇〇	大森書房	詩人のナブキン(佛蘭西短篇集)	一・八〇	同	九月	松岡讓	憂鬱な愛人(上)一・五	第一書房	五月		
福田正夫	自由詩講座	一・四	前田晁	クオレ・上卷・譯(岩波文庫)	・四	岩波書店	二月	松本泰	紅葉裏・譯(世界大衆文學全集三三)	豫約	改造社	五月
藤森成吉	藤森成吉集(現代日本文學全集四七の内)	豫約	クオレ・下卷・譯(岩波文庫)	・四	同	三月	前田夕暮	原生林(改造文庫)	・一	吾同	九月	
			前田夕暮	原生林(改造文庫)	・一	吾同	九月					

眞山青果

戯曲・乃木將軍

一・八 萬里閣 六月

三上於菟吉

激流(三上於菟吉長篇小説集一)

一・七 新潮社 三月

三銃士・譯(世界大衆文學全集・六)

豫約 改造社 三月

長篇春は謎れり

一・三 平凡社 四月

小説情熱時代

一・三 同 四月

悪魔の戀(三上於菟吉長篇小説集二)

二・〇 新潮社 五月

落花劍光録

一・三 平凡社 七月

淀君

一・五 同 九月

長篇火刑

一・五 同 九月

小説シャロツクホ・譯

豫約 同 十月

水瀧太郎

短篇集・果樹 二・四 改造社 五月

第四貝殼追放

一・八 大岡山書店 七月

三宅やす子

三宅やす子篇(現代長篇小説全集二・三の内)

豫約 新潮社 一月

宮島新三郎

テス・譯(世界文學全集二・九の内)

豫約 新潮社 二月

文藝批評史(春秋文庫)

・吾 春秋社 四月

武者小路實篤

戯曲・日蓮

一・二 改造社 六月

村上瀨六

浪六全集(一四)豫約 玉井清文堂 二月

浪六全集(二四)豫約 同 五月

浪六全集(二五)豫約 同 六月

浪六全集(二六)豫約 同 七月

村上浪六集(現代大衆文學全集二・八)

豫約 平凡社 九月

蜂須賀小六

一・四 明文館 十月

浪六全集(二九)

豫約 玉井清文堂 十月

村松精風

村松精風集(現代大衆文學全集三・四)

豫約 平凡社 五月

室生犀星

天馬の脚 二・五 改造社 二月

魚眠洞發句集 二・〇 武藏野書院 四月

新選室生犀星集

室生犀星篇

室生犀星篇(明治大正文學全集四・五の内)

豫約 春陽堂 十月

本山萩舟

本山萩舟集(現代大衆文學全集一・七)

豫約 平凡社 五月

百田宗治

詩の鑑賞 一・六 厚生閣 五月

鑑賞 吾 金星堂 二月

暮鳥詩選 吾 同 二月

透谷詩選 吾 同 二月

獨歩詩選 吾 同 二月

啄木詩選 吾 同 二月

新しい詩の解釋とつくり方 一・三 厚生閣 四月

現代詩講座編・四 豫約 金星堂 十月

森岩雄

ステラダラス・譯(世界大衆文學全集)

ラボエーム 豫約 改造社 五月

森田章平

クリスマス・カロール・譯(岩波文庫)

クリスマス 二・三 岩波書店 五月

山崎斌

藤村田園讀本(卷二)編

藤村田園讀本(卷二)編 一・八 同 九月

山田清三郎

五月祭前後(日本プロレタリア作家叢書三)

・七 戦旗社 九月

山本有三

新選山本有三集 一・〇 改造社 十月

長篇小説・波 一・〇 東京朝日新聞社 二月

行友幸風

行友幸風集(現代大衆文學全集二・八)

豫約 平凡社 三月

横瀬夜雨

詩集・雪燈籠 三・三 梓書房 四月

横光利一

日輪(改造文庫) 二・〇 改造社 二月

横光利一集(新進傑作小説全集四)

豫約 平凡社 七月

與謝野晶子

自選歌集・人間往來(改造文庫)

二・三 改造社 四月

晶子短歌全集(新潮文庫二六)

上 演 目 録

吉井勇 一・〇 新潮社 六月

吉井勇篇(現代長篇小説全集一・五)

豫約 新潮社 八月

吉井勇集(現代短歌全集九の内)

豫約 改造社 十月

吉江露松 二・三 早稻田大學 一月

南歐の空 出 版 部

吉川英治 一・五 平凡社 三月

江戶三國志(中篇)

神州天馬峽(三)・吾 大日本雄辯會 二月

江戶三國志(後篇)

一・三 平凡社 四月

萬花地獄 一・五 同 六月

龍虎八天狗 八・五 博文館 八月

吉田紘二郎 一・五 早稻田大學 十月

わが詩わが旅 一・五 出版 部

吉田紘二郎篇(現代長篇小説全集二・二)

豫約 新潮社 五月

吉田紘二郎傑作集(新潮文庫六)

一・〇 同 三月

吉田紘二郎詩・感想集(新潮文庫)

一・〇 同 二月

吉田紘二郎集(現代日本文學全集四七の内)

豫約 改造社 五月

ダゴールの詩と言葉 一・七 文藝春秋社 六月

長篇詩夜曲 一・八 新潮社 六月

青鳩 一・三 同 九月

米川正夫 戦争と平和・四ノ下・譯(岩波文庫)

カラマーゾフの兄弟・四・譯(岩波文庫)

カラマーゾフの兄弟・四 一・八 同 十月

カラマーゾフ兄弟物語 一・五 婦人之友社 四月

カラマーゾフ兄弟・二・三・譯(普及版)

各・七 新潮社 十月

アルタモーンフの一家・譯(ゴリキイ)

全集・一九 豫約 改造社 十月

397

上演目録

自昭和三年十一月
至昭和四年四月

昭和三年十一月より同四年十月までの一ケ年間に互り東京に於ける主なる劇場即ち、市村座、歌舞伎座、新橋演舞場、築地小劇場、帝國劇場、本郷座明治座、山手劇場(以上五十音順)の上演脚本を各作者別に示したのがこの上演目録であり、これによつて劇作家の對劇場活動を知ることが出来るわけである。

- 一、作者の配列は五十音順に據ることとした。
- 一、原作者及び脚色、補綴等の場合には重複を厭はず各別に摘録した。但し翻譯の原作者等はこれを省略した。
- 一、新歌舞伎座が扱はれてゐないのは同座は三年九月、十月とも新作上演を見なかつたがためである。
- 一、この目録の編纂に際して作者の選定は文藝家協會の昭和四年十月現在の會員を中心として主なるものに限つた。
- 一、別項演劇の「各座上演記録」及び戯曲の「戯曲一覽」を併せ見ると一層便利である。

明石鏡也

故郷(三幕・原作) 七月 築地小劇場
 生田葵 小佛峠の仇討(二幕) 七月 山手劇場
 池田大伍 西鶴一代男(四幕) 三月 歌舞伎座
 泉鏡花 通夜物語(二幕・原作) 三月 市村座
 湯島の境内(二幕・原作) 五月 市村座

上田文子

晩春騒夜(二幕) 三月 築地小劇場
 江馬修 阿片戦争(四幕) 九月 本郷座
 岡本綺堂 小栗栖の長兵衛 七月 帝國劇場
 室町御所(三幕) 二月 明治座
 増補信長記(二幕) 三月 歌舞伎座
 雁金文七(二幕) 四月 本郷座
 虚無僧(二幕) 六月 山手劇場
 權三と助十(二幕) 十月 歌舞伎座

大佛次郎

赤穂浪士(六幕・原作) 一月 山手劇場
 赤穂浪士(中篇・六幕・原作) 二月 新橋演舞場

赤穂浪士(後篇・五幕・原作)

三月 帝國劇場

赤穂浪士(前篇・五幕・原作)

十月 市村座

赤穂浪士(後篇・五幕・原作)

十月 市村座

赤穂浪士(中篇・六幕・脚色)

十月 市村座

動物園近く(二幕)

三月 市村座

赤穂浪士(後篇・五幕・脚色)

三月 帝國劇場

飛ぶ唄(三幕)

五月 築地小劇場

鼠小僧(三幕)

六月 山手劇場

進軍(四幕)

九月 本郷座

赤穂浪士(五幕・脚色)

十月 市村座

赤穂浪士(後篇・五幕・脚色)

十月 市村座

上演目録

菊池寛

原敬(三幕) 七月 新橋演舞場
 受難華(二十一場・原作) 三月 市村座
 地獄のドン・ファン(二幕) 三月 歌舞伎座

時の氏神(二幕) 五月 帝國劇場
 不壊の白珠(六幕・原作) 九月 市村座

新釋地震加藤(一幕) 九月 明治座
 岸田國士 長閑なる反目(三幕) 二月 市村座

百三十二番の貸家(二場) 四月 市村座
 命を弄ぶ男二人(二幕) 九月 明治座

北村喜八 故郷(三幕・脚色) 七月 築地小劇場
 吼えろ支那(九景) 九月 本郷座

不如歸(五幕・脚色) 十月 市村座
 金色夜叉(八場・脚色) 二月 市村座

受難華(二十一場・脚色) 三月 市村座
 佐倉宗五郎(七幕) 三月 山手劇場

次郎長と強盗(二幕) 七月 本郷座
 乳姉妹(五幕) 八月 明治座

不壊の白珠(六幕・脚色) 九月 市村座
 北村小松 九條武子夫人(六幕) 七月 明治座

紳士淑女狐踏曲(十二幕) 八月 明治座
 北村壽夫 當世立志傳(十九場) 七月 築地小劇場

木村富子 心中雪夜話(二幕) 二月 市村座
 濱町音頭 六月 明治座

寢聲 七月 明治座
 久米正雄 オリジナルピク(二場) 七月 新橋演舞場

佐藤紅緑 キリスト(五幕) 七月 帝國劇場
 俠艶録(四幕) 四月 市村座

瀬戸英一 昭和忠臣蔵(八幕) 六月 本郷座
 續水戸黄門漫遊記(五幕・續) 一月 市村座

荒神山(四幕・脚色) 三月 帝國劇場
 葛松葉お茶(二幕) 三月 山手劇場
 心中旅鴉(二幕) 八月 明治座
 高田保 生ける人形(十六場・脚色) 五月 築地小劇場

刀を抜いて(二幕・脚色)	八月 帝國劇場	馬の背(二幕)	二月 本郷座	にがわらひ(二幕)	十月 新橋演舞場
田村西男		股旅草鞋(二幕)	五月 本郷座	眞山青果	
法界坊(三幕)	五月 帝國劇場	燐寸(二幕)	六月 新橋演舞場	颯風時代(三幕)	二月 新橋演舞場
清河八郎(十場)	七月 山手劇場	股旅草鞋(二幕)	六月 山手劇場	城山落城の日(二幕)	二月 市村座
坪内逍遙		敵討鎗諸共(四幕)	七月 本郷座	富岡先生(七場・脚色)	四月 市村座
良寛と子守(二幕)	六月 帝國劇場	香掛時次郎(三幕)	十月 市村座	乃木將軍(三幕)	六月 新橋演舞場
金毛狐	十月 帝國劇場	舶來巾着切(二幕)	十月 市村座	落城祕聞血笑記(二幕)	
香手鳥孤城落月(二幕)		中山七里(二幕)	十月 新橋演舞場	唐人お吉(四幕)	七月 歌舞伎座
永田衛吉	十月 明治座	勝者敗者(二幕)	二月 新橋演舞場	鼠小僧次郎吉(四幕)	八月 歌舞伎座
清河八郎(四幕)	六月 新橋演舞場	藤森成吉		村山知義	
大久保利通(五幕)	十月 市村座	磯茂左衛門(五幕)	六月 築地小劇場	全線(四幕)	六・七月 築地小劇場
中村吉藏		松居松翁		阿片戦争(四幕・改幕)	九月 本郷座
大隈重信(二幕)	十月 新橋演舞場	命髪切(二幕)	二月 歌舞伎座	山崎紫紅	
人 鮫(二幕)	五月 歌舞伎座	胡蝶の舞	二月 歌舞伎座	頼家と政子(二場)	四月 歌舞伎座
無籍者(二幕)	十月 市村座	夢想兵衛胡蝶譚(二幕・脚色)	三月 帝國劇場	山本有三	
道元と時頼(三幕)	十月 帝國劇場	泡 (二幕)	一月 市村座	西郷と大久保(三幕)	七月 帝國劇場
額田六福		遠山の金さんと鼠小僧(三幕)	二月 明治座	兒殺し(二幕)	三月 帝國劇場
眞書太閤記(四幕)	五月 本郷座	乃木將軍(二幕)	三月 市村座	坂崎川羽守(四幕)	三月 新橋演舞場
越後の傳吉(二幕)	六月 帝國劇場	臺灣神社(二幕)	三月 歌舞伎座	同志の人々(二場)	五月 明治座
道化役者(五幕・脚色)	八月 帝國劇場	討てば討たる(三幕)	七月 帝國劇場	行友李鳳	
長谷川伸		緊縮(二幕)	九月 帝國劇場	極附國定忠次(二幕)	一月 山手劇場
香掛時次郎(二幕)	三月 帝國劇場	高野長英(三幕)	十月 新橋演舞場	蜜柑船(二幕)	三月 明治座
香掛時次郎(二幕)	二月 新橋演舞場			吉田絃二郎	
				大谷刑部(三幕)	十月 歌舞伎座

文藝團體

昭和五年一月現在

文藝團體と云つてもその種類性質は各様あるが、わが國にあつては最近著しく職業組合化して來た文藝家協會が最も大きな存在であり、殊にこの一兩年來の同協會の社會的活動には見るべき多くのものがある。これについては評論隨筆家協會、詩人協會、日本歌人協會、童話作家協會など、その中にはまだ會員相互の共濟を主眼としてゐるに止まり思はしい團體としての活動を始めぬものもあるが、以上の五團體は目下のところ代表的なものと認むべくその會員、活動の概況、規約等は以下項を別つて掲げることにした。

次に思想的に或る主義主張の下に結成されてゐる團體としては「文藝戦線」の勞農藝術家聯盟、「戦旗」の全日本無産者藝術家聯盟は最も顯著な存在で年毎にその勢力を擴大しつつあることは人々の知るところであらう。また童話文學方面では小川未明等を中心とする新興藝術家聯盟も漸次擡頭して來た。

その他文藝團體としては「國際文化研究所」「近代生活社」「十三人俱樂部」等を擧げることが出来る。

文藝家協會

(事務所) 東京市京橋區尾張町二丁目六番地
 (電話) 銀座二六八九番
 (役員) 幹事——額田六福、葉山嘉樹、岡田三郎、長田秀雄、沖野岩三郎、直木三十五、山田清三郎(以上重任)、加藤武雄、大宅壯一、佐佐木茂索、近松秋江、米川正夫、新居格、長谷川時雨、細田民樹(以上新任)
 書記長——林田英雄
 法律顧問——仁井田益太郎、榛村專一

(1) 協會の歴史
 文藝家協會は大正十五年一月七日に小説家協會と劇作家協會とが合併して設立されたものである。小説家協會は大正十年七月十六日、劇作家協會は同年五月八日の設立にかゝるものであるが、共に會員の親睦共濟を計り、併せてその福利増進を目的としたものである。従つて兩者が合併して文藝家協會となつてもその目的に變りはない。

2 現在の會員

昭和三年十一月一日現在の會員は二百十一名、ほかに準會員三名を算してゐたが、内、小山内薫、小酒井不木の二名死亡、本田美禪、佐藤紅緑、佐々木邦、佐藤八郎の四名退會、五年一月までに左の三十七名入會、同年一月現在の會員數は二百四十二名となり、ほかに準會員に徳富愛子の一名を加へた。

岩藤雪夫 長谷川浩三 鳥江鐵也 小野金次郎 吉田甲子太郎 高垣暉 田中清一 立野信之 豊岡佐一郎 中野重治 南江二郎 檜崎勤 村松正俊 上田文子 久野豊彦 山上貞一 前田河廣一郎 深尾すま子 小林多喜二 小島勲 小島健三 江口漢 寺尾幸夫 佐々木千之 佐左木俊郎 崎山敏逸 湖山長三 貴司山治 木村幹 廣瀬操 吉 森田信義 菅原寛 中村正常 井伏鱒二 阪中正夫 古澤安二郎 阿部知二

(3) 主なる事業
協會本年度の主なる事業としては左の如きものがある。
一、最低稿料運動 三年十月六日の總

會に於いて最低原稿料、印税、上演料等に關してそれらの向きと協議することに決定、實行委員幹事等運動を開始し、大體協定成立した。稿料の最低額は別項の如く三年十二月より實施した。但し講談社に對しては實行の誠意に缺けるところあり、四年十二月二十一日の總會に於いて更に運動を起すことに可決、その方は幹事會で任命した實行委員に一任すること。

一、檢閲改正運動 この趣旨及び經過については「總説」の項に詳記す。
一、所得税問題 四年一月協會代表として菊池寛、上司小劍、中村吉藏、中村武羅夫、廣津和郎、山本有三、岸田國士、直木三十五は東京會館に東京稅務監督局長青木得三と會見、文藝家の税金について談合す。
一、年刊四冊刊行 日本小説集第五輯、日本戯曲集第五輯、大衆文學集第二輯、詩と隨筆集第二輯の四冊を協會編、新潮社より發行、但し右の内日本小説集は發賣禁止、訂正版を出した。

一、文藝年鑑發行 協會編にて四年一月昭和四年版を初めて刊行、これは前項の四冊の年鑑と共に毎年繼續するものである。(新潮社發行)
一、渡邊賞の授與 「總説」の項参照。その他四年十二月廿一日の總會にて原作及シナリオ上演料改正案、檢閲問題將來の運動方法、對講談社原稿料問題等が議に上つた。これらは何れも來年度の問題となるべく、協會はいよいよ多事多端であることを思はせる。

(4) 協定最低原稿料
前項に記した文藝家協會員の協定最低原稿料は左の如くである。(三年十二月より實施)
發行所・雜誌 創作 雜文
講談社
キング 一〇、〇〇圓
少年クラブ 五、〇〇圓
富士 五、〇〇圓
講談クラブ 五、〇〇圓
婦人クラブ 六、〇〇圓
少女クラブ 五、〇〇圓
幼年クラブ 五、〇〇圓

現代	四、〇〇	二、〇〇
雄辯	四、〇〇	二、〇〇
文藝	三、〇〇	二、〇〇
文藝クラブ	四、〇〇	二、五〇
朝日	三、〇〇	二、〇〇
新青年	三、〇〇	二、〇〇
講談雜誌	三、〇〇	二、〇〇
少年世界	二、五〇	一、五〇
少女世界	二、五〇	一、五〇
婦女界	七、〇〇	四、〇〇
婦女界	二、五〇	一、五〇
愛兒之友	二、五〇	一、五〇
寶文館	二、五〇	一、五〇
若草	二、五〇	一、五〇
令女	二、五〇	一、五〇
主婦之友	八、〇〇	五、〇〇
主婦之友	八、〇〇	五、〇〇
東京	三、〇〇	二、〇〇
婦人畫報	三、〇〇	二、〇〇
少女畫報	二、五〇	一、五〇
實業之日本社	六、〇〇	四、〇〇
婦人世界	二、五〇	一、五〇
日本少年	二、五〇	一、五〇
少女之友	二、五〇	一、五〇

婦人之友社	三、〇〇	二、〇〇
婦人之友	三、〇〇	二、〇〇
改造社	四、〇〇	三、〇〇
改造社	四、〇〇	三、〇〇
新潮社	三、〇〇	二、〇〇
新潮社	三、〇〇	二、〇〇
文學時代	三、〇〇	一、五〇
文藝春秋社	三、〇〇	一、五〇
文藝春秋	三、〇〇	一、五〇
週刊朝日	三、〇〇	二、〇〇
サンデー毎日	三、〇〇	二、〇〇

(5) 文藝家協會規定
名稱及び目的
第一條 本會を文藝家協會と稱す
第二條 本會は文藝家相互の親睦共済を計り、併せて文藝家全體の福利増進を以て其の目的とす
第三條 本會は主として文藝的著述を職業とする者を以て會員とす
第四條 本會は積立金に依り左の如き共済を行ふ
一 滿二年以上在會せる會員及其の家族死亡の場合に弔慰金として一

家族に對し金五百圓を贈與す、但し滿二年以上に充たざる場合は幹事に於てこれが弔慰金額を定む
尙本會に對する功勞、在會年月、遺族の經濟状態に依り適宜の追加を爲すことあるべし
二 半年以上會費滞納者には弔慰金を右金額の三分の二に減ず
三 會員疾病の場合、或は災禍の爲め生活困難に陥りたる場合、適宜の補助を爲すことあるべし、會員の遺族の場合も同じ
其他の事業
第五條 文藝家の利益、名譽等を擁護せんが爲めに本會に於て活動することあるべし
第六條 本會の目的を貫徹せんが爲め講演又は雜誌發行等の舉に出づることあるべし
積立金
第七條 積立金は左の如き方法に依る
一 會費は毎月金貳圓とす
二 年一回乃至數回會員の創作の選集を發行し、其印税を積立金に加ふるべし

三 會員は創作集、評論集、翻譯集、其他の著書を出版したる時初版に限り印税千部と限定す。百分の二を協會に納付するものとす。

四 會員の脚本上演せられたる時は初演に限り規定に據る最低上演料の百分の二を協會に納付するものとす。

五 會員の映畫脚本及び小説戯曲の上演せられたる時は最低使用料の百分の二を協會に納付するものとす。

六 會員にして本會指定の新聞及び雑誌に對し十枚以上の文章を執筆したる場合は一篇につき金壹圓を納付すべき義務あるものとす。但しこれが徵集は新聞社及び雑誌社に依頼する事、尙右指定新聞の連載物一ヶ月金拾圓、婦人雑誌の連載物は一ヶ月金五圓と定む。

入會退會及除名

第八條 第三條の資格を有する者にして會員二名以上の推舉に依り入會を申込みたる場合は總會の承認を経たる後これが入會を許可すべし但退會

を隨意とす。

第九條 若し會員たるの義務を履行せざること一年に及びたる者は事情調査の上これを除名することあるべし。

總會

第十條 總會は春秋二季にこれを開き會則の改正、會務の報告、其他の打合せを爲す。但必要に應じ臨時總會を開くことあるべし。

第十一條 已むを得ざる事情無くして二年間無斷總會に出席せざる會員は爾後三年間議決權、投票權、被選舉權を失ふものとす。

役員

第十二條 會の事務を處理進行せしむる爲め幹事十名以上、書記長一名、書記一名を置く。幹事の内三名を會計とす。幹事の任期は一ヶ年なりとす。書記は有給となすことを得。

會則の改正

第十三條 總會に於て、總會出席者三分の二以上の賛成ある時は本規定を改正することを得。

協定脚本使用料

第十四條 本會は會員の脚本使用料を

左の如く協定す、一座に於ける一興行の使用料は左の如し

劇場定員 一百名
平均入場料 一圓
興行日數 一日

一 幕 金一圓以上
金三圓程度

二 幕 金一圓五十錢以上
金四圓五十錢程度

三 幕 金二圓以上
金六圓程度

三幕以上はこの律に準じて加算するものとす。

第十五條 劇場定員は左の歩合に依り規定す

千名迄(十分の七)

千名以上二千名迄(十分の六)

二千名以上三千名迄(十分の五)

三千名以上はすべて此律に準ず

第十六條 使用日數は左の歩合に依り規定す

一日以上九日迄()

十日以上十九日迄(十分の八)

二十日以上三十日迄(十分の七)

三十日以上はすべて此律に準ず

第十七條 晝夜二回興行の場合は使用料の一倍半とす。

第十八條 東京、大阪、京都三市以外に於ける使用料は前記の二分の一とす。

第十九條 再演の場合と雖も使用料は割引せず。

第二十條 小劇場に於ける研究的試演の場合は協定使用料を適用せざることを得。

第二十一條 脚本を翻譯せる場合及び小説等を脚色せる場合は協定使用料を適用す。小説其他を原作として提供する場合協定使用料の三分の二とす。

第二十二條 舞臺監督料、立合料は脚本使用料以外とす。脚本使用料の協定は上演前に於て爲すものとす。契約の成立と同時に使用料の二分の一を授受するものとす。但し契約の有効期間は六ヶ月とし、右期間内に上演せざる時は契約を無効とし契約金全額を沒收す。

第二十三條 興行權を賣渡す場合は使用料の五倍以上とす。

協定映畫脚本使用料

第二十四條 會員の活動寫眞脚本の最低使用料を左の如く協定す

一 映畫脚本を提供する場合の最低使用料は一卷(凡そ七百呎)より五卷までを金四百圓とし、一卷を増す毎に金百圓を加算す

二 小説、脚本其他を單に材料として提供する場合の最低使用料は一卷より五卷までを金二百圓とし、一卷を増す毎に金五十圓を加算す

第二十五條 映畫權を賣り渡す場合及び複製をなす場合は別に協定するところあるべし。

第二十六條 使用料は契約の成立と同時に手金として其二分の一を授受するものとす。但六ヶ月以内に撮影を開始せざる場合は契約は無効とし契約金を沒收す。

著音機レコード吹込料

第二十七條 會員の著作脚本を臺詞として著音機に吹込む場合の最低權利料を左の如く規定す

一 兩面一枚につき金百圓以上

ラヂオ放送料

第二十八條 會員の著作脚本を臺詞と

してラヂオに放送する場合の最低使用料を左の如く規定す

一 一回金八十圓 上

第二十九條 文藝家協會會員外にして上演協定脚本料の保證を受けんとする者或は脚本家の遺族にして脚本の著作權を有する者は准會員として入會を許し其權利を保護することあるべし。

會の事業

第三十條 會員の作品を無斷上演、撮影、吹込み、放送したる場合には右各項最低協定額の五倍以上を請求す

第三十一條 協會の趣旨を達成せんが爲め協會は時に臨み講演其他の運動を起すことあるべし。

第三十二條 協會は會員の委託に依り劇場側との間に中介して上演料の協定、授受に任ずることあるべし。

第三十三條 會員の脚本が劇場若しくは劇團より不當の取扱を受けたる場合は會員は協力して該劇場當事者に交渉することあるべし。

第三十四條 脚本檢閲の不當に對しては會員協力して抗議する事あるべし。

昭和三十年十月 以上

評論隨筆家協會

(事務所) 東京市牛込區南根町五七
(電話) 牛込四三〇九番

(役員) 常任幹事——高須芳次郎
幹事——大槻憲二 千葉龜雄
吉江喬松 村松梢風

(1) 經過と事業

本會は大正十五年十二月に長谷川如是閑、長谷川天溪、馬場孤蝶、西村眞次、本間久雄、戸川秋骨、大槻憲二、河野桐谷、横山健堂、高須芳次郎、田中實太郎、室伏高信、村松梢風、内田魯庵、野口米次郎、小島徳彌、佐川臨風、佐々木指月、木村毅、島田青峰、平林初之輔、日高只一の二十二名を發起人として、評論隨筆の振興、評論家隨筆家相互の利益増進を目的として創立されたもので、會勢漸次隆盛を極めてゐる。昭和二年三月には會員の文集「現代隨筆」を刊行し、昭和四年四月には同協會編、會員の略歴及び事業を記載した「評論・隨筆家名鑑」を、同年六月には「山水大觀」を編纂發行した他、文藝講

演會を開くこと數回、昭和五年版の「評論・隨筆家名鑑」刊行の準備も講ぜられて居り、今後の活動が期待されてゐる。

(2) 現在の會員

昭和五年一月現在の名簿によれば會員、左の百八十一名である。
飯塚友一郎 一氏義良 石原純 井田秀明 生田春月 井上賢順 生田花世 土師清二 井汲清治 灰野庄平 石川宰三郎 長谷川如是閑 稻毛詛風 服部嘉香 池田孝次郎 橋爪健 石丸喜世子 半澤玉城 石割松太郎 芳賀融 池田林儀 幡谷正雄 石澤久五郎 畑山茂 井東憲 林久男 伊福部隆輝 橋田東聲 林房雄 茅野蕭々 林癸未夫 小野田益三 原田謙次 尾崎久彌 馬場勝彌 尾池義雄 西宮藤朝 岡村千秋 西村眞次 萩原藤吉 新居格 尾崎喜八 本間久雄 小野賢一郎 本莊可宗 岡澤秀虎 堀江かど江 小野政方 豊田大誓 大西貞治 土枝善磨 翁久允 豊岡佐一郎 尾佐竹猛 千葉龜雄 大槻憲二 大月隆伏 横山達三 尾瀬敬止 吉江喬松 綿貫六助 吉田

九郎 渡邊紫染 米川正夫 川田功 高島米峰 河竹繁俊 高谷伸 河野桐谷 武野藤介 賀川豊彦 田中貢太郎 加藤謙 片岡良一 竹内正輔 川崎備寛 伊達俊光 加藤朝鳥 高須芳次郎 片岡直方 園頼三 米田祐太郎 津田光造 永見徳太郎 坪内士行 村島歸之 坪谷善四郎 村松義一 辻潤 村松正俊 角田竹冷 野口米次郎 鶴見祐輔 黒田鶴心 成澤玲川 窪田空穂 長沼重隆 倉田潮 永田龍雄 山川智應 永島直昭 山根眞治郎 永松淺造 矢田義勝 中村漁波林 今井邦子 中村翁 矢口達 中田信子 山田清三郎 山本勇夫 近藤京魚 山田孝三郎 小杉未醒 増田義一 今和次郎 松原至文 小島烏水 松崎市郎 小林橋川 松原寛 小寺菊子 間宮茂輔 小島徳彌 松宮三郎 小佐井清平 松川二郎 江口渙 松本憲逸 江部鴨村 藤澤衛彦 寺下辰夫 藤森淳三 瀧美清太郎 藤田進一郎 淺田彦一 古莊國雄 赤松月船 相田隆太郎 木谷正之助 笹川臨風 木蘇毅 坂井岸水 北澤新次郎 佐々木榮多 木村毅 堺利彦 木

千を置く、其任期は一年とし改選は會員全體の選舉に依る

詩人協會

(假事務所) 東京市外世田ヶ谷若林二

(電話) 三七北原白秋方

(役員) 評議委員——島崎藤村 蒲原

有明 河合醉茗 野口米次郎 高村光太郎 北原白秋 室生犀星 萩原朔太郎 佐藤春夫 白鳥省吾 正富汪洋 竹友藻風 百田宗治 千家元磨 佐藤惣之助 生田春月 福田正夫 福士幸次郎 陶山篤太郎 中西悟堂 多田不二 尾崎喜八 大木篤夫 前田鐵之助 井上康文 常務委員——佐藤惣之助 萩原朔太郎 多田不二 福田正夫 前田鐵之助 中西悟堂 大木篤夫 尾崎喜八 北原白秋 井上康文 會計委員——島崎藤村 白鳥省吾 井上康文 室生犀星(昭

和四年度下半年より白鳥省吾退會のため北原白秋之に代る)

(1) 主なる事業

詩人協會は昭和三年一月二十一日島崎藤村、高村光太郎、河合醉茗、三木露風、北原白秋等の發起によつて創立されたもので、詩人相互の親睦と共済の爲めに設けられた會で、詩壇の中央集權的の機關ではない。未だ準備時代の觀があつて、本年度に於て特記すべき事業もないが着々順調な發達をなしてゐる。四年一月二十日河合醉茗司會の下に第二回總會を開會し、前年度の事務報告、役員選舉、雜誌編輯委員選舉等の議事に付審議討論する所があつて、同年三月協會機關誌「現代詩評」を尾崎喜八、中西悟堂、大木篤夫、竹友藻風、井上康文等の編輯によつて詩界に嚴正な批評を盡す意を以て發刊されたが、半ヶ年にして休刊の止むなきに到つた。四年四月には東京朝日新聞社朝日講堂に於て、詩人講演會を開催し、收入を協會の基金に當てた。出演者——島崎藤村、北原白秋、河井醉茗、正

村莊八 佐久間政一 北村喜八 佐々木味津三 北野博美 税所篤二 北村兼子 佐藤清 清澤冽 佐々木孝丸 喜多村進 澤田謙 宮川曼魚 佐藤惣之助 南江二郎 坂崎坦 三木春雄 齋藤茂吉 宮森麻太郎 三浦關造 三井甲之 宮島新三郎 南木芳太郎 白柳秀湖 白石實三 島田賢平 清水暉吉 下田將美 日高只一 日高基裕 平塚明子 守田有秋 陶山務 鈴木文四郎

(3) 評論・隨筆家協會規程

- 一、本會は評論・隨筆の振興を目的とすると共に評論家隨筆家相互の親睦共済を計り其利益増進に力む
- 二、本會の目的を達するため時々會合を開き又講演、雜誌發行等をなす事あるべし
- 三、本會は會員の慶事に對して祝意を表し不幸に對して弔問の誠意を表すべし
- 四、會費は毎月金五拾錢とし毎年二回(三月、九月)に分ち六ヶ月分宛取纏めて集金郵便により徴收すべし
- 五、本會に常任幹事一名、幹事書記若

富汪洋、野口米次郎、福田正夫、佐藤春夫、深尾須磨子、荻野綾子等で相當の成果を見た。尙本協會では教科書問題、作曲家との交渉に就て講じられ、實行委員として陶山篤太郎、尾崎喜八、大木篤夫、井上康文等推舉せられた。これらは協會が對社會的に進出した例の一つとして見てよいのであらう。

(2) 現在の會員

三年六月には協會員百四十九名の所、五年一月迄に五十一名の増加を見、現在二百名である。
厚見他嶺夫 相川俊孝 天野隆一 有本芳水 青旗青太郎 安西冬衛 生田春月 生田花世 石川善助 石井幸子 伊藤喬信 伊藤整 泉浩郎 岩佐頼太郎 伊福部隆輝 伊良子清白 内野健兒 上田敏雄 江口隼人 大木篤夫 大黒貞勝 大手拓次 落合茂 恩地幸四郎 片山敏彦 梶浦正之 勝承夫 川上澄生 川路誠子 川路柳虹 河井醉茗 蒲原有明 神戸雄一 北澤金藏 北原白秋 木水彌三郎 葛原滋 國井淳一 栗木幸次郎 古賀殘星 兒玉笛磨 小島貞一 小林愛雄 小牧暮潮

近藤東 後藤大治 後藤八重子 佐佐木秀光 笹澤美明 佐藤一英 佐藤清 佐藤惣之助 佐藤春夫 佐野嶽夫 柴山晴美 鳥崎藤村 清水暉吉 霜田史光 白鳥省吾 杉江重英 鈴木惣之助 陶山篤太郎 千家元磨 高木斐瑳雄 高橋新吉 高村光太郎 竹内勝太郎 竹内隆二 竹友藻風 竹中久七 多田不二 田中清一 田邊耕一郎 玉置光三 角田竹夫 富田碎花 外山卯三郎 内藤銀策 奈加敬三 中田信子 中田忠太郎 中西悟堂 中村恭二郎 中村魚波林 中村惠吉 中山伸 永見七郎 南江二郎 西川勉 西谷勢之介 新島榮治 新良孝平 野口雨情 野口米次郎 野野邊逸二 能村潔 萩原朔太郎 服部嘉香 英美子 花岡謙二 濱田廣介 林信一 春山行夫 伴野憲 平木二六 廣瀬操吉 府川惠造 福土幸次郎 福田正夫 福田夕咲 福永洸 福原清 藤森秀夫 藤井芳人 本澤浩二郎 正富汪洋 松原至大 松村又一 松本淳三 前田鐵之助 三石勝五郎 水之江公明 溝口白羊 宮崎孝政 宮崎丈二 宮田丙午 三好達治 村野四

郎 室生犀星 目次緋紗子 百田宗治 森三千代 森脇達夫 飯田義雄 矢部季 山口宇多子 山崎泰雄 八百板芳夫 横瀬夜雨 米澤順子 渡邊波光 井上多喜三郎 井上康文 岡田清一郎 岡田刀水士 岡村二一 小方又星 尾崎喜八、尾瀬敬止 ——五十音順——

(三年六月現在調査による。)

(3) 詩人協會規約

本 則
第一條 本會を詩人協會と稱し、一に詩人相互の親睦と共済、二に擁護と進展を計る事を目的とする
組 織
第二條 本會は本則に賛成したる者をもつて會員とする
第三條 本會は會員の選舉により評議委員二十五名をおいて會の重要事項を評議決定する
第四條 本會は評議委員の協議により評議委員及會員の中から別に常務委員十名をおいて會の實務を委任する
第五條 本會は評議委員の選舉により評議委員から三名常務委員から一名を舉げて會計を委任する

第六條 各委員の任期は一箇年とし、總會の時改選する

積立金

第七條 本會の積立金は會費及會の名による出版物の印税其他をもつてあ

第八條 會費は一箇月五拾錢とする

第九條 會員は詩に關する著作物初版印税の三分以上を寄附するものとす

第十條 會員にして以上の義務を怠つた場合、或は本會の名譽を毀損した場合は評議委員會の決議の上で除名することがある。但この場合積立金は返却しない

第十一條 積立金の使途は本會事務用雜費即、印刷物、郵税、臨時使用人費法律顧問費(必要を生じた場合)集會費及補助費を除く外一切を擧げて第十二、十三條の條項の場合に充當す

事業

第十二條 本會は左の方法によつて親睦と共済の實を計る

第一項 會員及其家族に疾病若しくは災害を受けた場合に見舞金を送

り、又適宜の補助をなす事がある

第二項 死亡の場合弔慰金をおくる遺族の經濟状態により適當に其額を定める

第三項 會員の家族死亡の場合に弔慰金をおくる、その金額は會員と死亡者の關係を參照して定める

第四項 日本詩壇に功勞のあつた人に謝恩の意を表し、金員又は記念品を贈呈することがある

第十三條 本會は左の方法によつて擁護と進展を計る

第一項 詩壇全體の協力を要する問題、及事業に就いて本會は之に盡力する

第二項 詩作品及詩人の地位待遇の向上の爲主張し、或は其不當の場合、本會はその交渉の任に當る

(イ)出版に關する件(ロ)記念會、講演會に關する交渉の件(ハ)著作權に關する件(ニ)名譽に關する件(ホ)原稿料に關する件(ヘ)無斷編纂若しくは掲載に關する件(ト)作曲、ラヂオ、レコード、興行等の權利侵害に關する件

會合及會務

第十四條 本會は年一回春季に總會を開き會務の報告をなしその他を協議す、尙必要に應じ臨時總會及委員會を開くことがある

第十五條 本會會務の報告のため年二回會報を發行する

第十六條 本會事務所を東京府内に置く

第十七條 本會の規約は總會出席者の三分の二以上の賛成を得なければ變更が出来ない

以上

日本歌人協會

(假事務所) 東京市本郷區駒込東片町二丁目野研方
(電話) 小石川四九六二番
(役員) 常務——北原白秋 前田夕暮 齋藤茂吉 川田順 松村英一 會計——石棹千亦 宇都野研 年刊歌集——土屋文明 尾山篤二郎 庶務——矢代東村
(1) 現在の會員

淺野梨郷 阿部鳩雨 井上眞一 石井直三郎 今中楓溪 石樽千亦 今井邦子 浅井嘉一 植松壽樹 宇都野研氏家信 上田英夫 白井大翼 大熊長次郎 岡本かの子 折口信夫 大熊信行 小田切浪考 尾山篤二郎 岡野直七郎 岡山巖 尾上柴舟 太田水穂 大井廣 小田觀登 岡麓 川田順 川崎杜外 川端千枝 川上小夜子 金子薫園 加納曉 北原白秋 菊池庫郎 菊池劍 菊池貞也 菊池知勇 木村流二郎 北見志保子 桐田蔭村 窪田空穂 楠田敏郎 河野慎吾 小森眞雅郎 佐野翠坡 佐佐木信綱 酒井廣治 齋藤淵 齋藤茂吉 四賀光子 鈴木康文 杉浦翠子 岡田葉吉 杉田鶴子 須藤泰一郎 關德彌 相馬御風 谷鼎 醍醐信次 高鹽背山 高田浪吉 竹尾忠吉 茅野雅子 對馬完治 土屋文明 土田耕平 堤青燕 土岐善麿 中河幹子 中島哀浪 長岡とみ子 中村憲吉 西村陽吉 野澤柿葺 榛原繁一郎 半田良平 橋田東聲 早川幾忠 橋本敏夫 馬場静浪 花田比露思 日比野道男 平福百穂 廣田樂 福井忠雄 藤澤古

實 藤居敦惠 細井魚袋 穂積忠 保坂嘉藏 前田夕暮 松村英一 松田常憲 水町京子 村野次郎 村磯象外人 森三樹雄 本居亮一 森田佐一郎 森山汀川 矢代東村 矢鳥歡一 山田龍夕 山下陸奥 安江不空 由利貞三 結城哀草果 依田秋圃 吉植庄亮 米田雄郎 吉井勇 割田斧二 和田山蘭 渡邊湖畔 若山喜志子(以上百十五名)

(3) 日本歌人協會規約

第一條 本會を日本歌人協會と稱す

第二條 本會本部及び事務所を東京府内に置く

第三條 本會は常に歌作に従事し歌人として認めらるる者を以て詮衡の上會員とし、随時入會を許すものとす

第四條 本會は歌人相互の親睦と共済を計り、現在及び將來の日本歌壇の進歩と向上と開展とに努力を拂ふ事を以て目的とす

第五條 本會は積立金に依りて次の各項の如き共済の實を表す

第一項 日本歌壇の爲に功勞ありし人に謝恩の意を表し、金員若くは記念品を贈呈することあるべし

第二項 會員及び其家族に疾病或は天災其他不得已る事情に依つて一時生活困難に陥りし場合見舞金を贈りまた適宜の補助をなすことあるべし

第三項 會員死亡の場合、若干の弔慰金を贈呈す。但し本會及び日本歌壇に對する功勞、遺族の經濟状態に依り、適宜に其額を増減することあるべし

第四項 會員の家族死亡の場合、若干の弔慰金を贈呈す。但し會員と死亡者との關係とその會員の生活状態を參酌して適宜の處置を探るべし

第六條 第五條以外の本會の事業は次の如し

第一項 歌壇全體の協力を要する事件と出版に就いては主として本會が是れに當る事

第二項 毎年其前年度に現れたる歌壇彙報及び評論の解説(編纂委員是れを成す)を附し、各自が前年度の作歌中或數(自選)の寄稿を求めて年刊歌集を編纂發行し、其印

税を積立金の中に加ふる事

第三項 多年歌作に従ひ常に優秀なる作品を有する新人を社會に紹介せんが爲に本會はこれを推薦する事あるべし

第四項 本會は歌人及び歌壇の利益と名譽を擁護し、其等の爲に活動することあるべし

第五項 本會の目的を達する爲、講演、雜誌發行、出版等をなすことあるべし

第七條 本會は會費、年刊歌集印稅其他の所得を以て積立金となす

第一項 會費は會員一人に就き月一圓とし、三ヶ月分前納、年四回拂込むものとす

第二項 年刊歌集印稅率を定價の一割以上と成し委員が適宜に是れを定むるものとす

第三項 積立金の使途は、本會事務用雜費即ち、印刷物、郵稅、使用人費、法律顧問費、臨時費、集會費補助等を除くの外一切を擧げて第五條の共済費に是を充當せしむる事

第八條 會員にして本會の名譽を毀損

せし場合、會員たる義務を履行せざる事一箇年に及ぶ者は總會の決議によつて是を除名することあるべし。但し此場合第七條の積立金を返還せざす。

第九條 本會は春秋二季に總會を開き、會務の報告その他を協議す。尙必要に應じ臨時總會及び委員會を開くことあるべし

第十條 本會は會務を處理する爲に委員十名を置き、内二名を會計委員に、二名を年刊歌集編纂委員に、五名を常務委員に一名を庶務として會務を處理す。右委員は任期を一年とし、春季總會に於て毎年改選するものとす

第十一條 本會事業綱目、委員改選、會規改正等は總會出席者の多數決に依り、其他は委員會に於て協議の上決定するものとす

委員會に於て決定せざる場合は臨時總會を開きて協議することあるべし

附記 本會假事務所を、當分の内東京市本郷區駒込東片町二二都野方に置く

童話作家協會

(事務所) 東京市外東調布町下沼部六六三濱田方

(役員) 幹事——前田晁 藤澤衛彦 水谷まさる 尾關岩二 濱田廣介

(1) 創立と經過

大正十五年一月に小川未明、楠山正雄、蘆谷蘆村、鹿島鳴秋、濱田廣介の五名に依つて童話の會が企てられ、右發起人の他に秋田雨雀、沖野岩三郎、藤澤衛彦、澁澤青花、小野政方、山内秋生、酒井朝彦、村山鶴子等が加り會名及び會員の詮衡に就いて協議の結果「童話作家協會」を創立したもので、同年には先づ年刊童話集として、當初の會員三十五名の作を集めた「日本童話選集」第一輯を丸善株式會社より刊行した。その附録の藤澤衛彦の「日本童話史」は貴重な文獻である。

昭和二年四月に總會開催、幹事改選に依つて前田晁、松原至大、澁澤青花、蘆谷蘆村、鹿島鳴秋の五名就任、而してあらたに會員に中村星湖、江口渙、

大木雄三、福永漢、鳴海要吉、小野浩、大木篤夫、徳永壽美子、細川武子、茅野雅子、宇野千代の十一名を推薦した。

この年協会の機關雜誌「日本童話」を小學館より刊行する運びとなつて編輯、印刷をすすめたが創刊號發行の際に於いて中止となる。然し年刊童話集第二輯は依然丸善より出版會員三十九名の作を収めた。その附録に山内秋生の「明治大正昭和の童話界」がある。これは次年度の第三輯に附録された濱田廣介の「大正昭和の童話界」と彼此相助けて、近代日本童話史を組織付ける場合には看過しがたい記録である。同年度の第二總會を十二月開催、次年度の幹事改選の結果、小川未明、酒井朝彦、濫澤青花、濱田廣介、山内秋生の五名就任。而してあらたに會員に石黒露雄、坪田讓治、清水かつらの三名を加へた。

らに又一本協会の合理進出を如何にすべきかに就いて會員各自の意見を求めた。

五月には、本協会が主催して、教育家及び教育雜誌記者の三者聯合懇談會を開催、その主意は、近時兒童の讀物が著るしく傾向化したのに就いて、三者の意見を交換したいといふにあつた。來會者は會員を合せて二十三名。十二月に總會開催、幹事改選して前田晃、藤澤衛彦、水谷まさる、尾關岩二、濱田廣介の五名就任。而して新會員に伊藤貴麿、木内高音、北川千代、下村千秋、田中宇一郎、塚原健二郎、村岡花子の七名を加へ總數五十四名となる。

昭和四年に入つて五月に、本協会は大阪朝日會館において童話講演會を開催、秋田雨雀、藤澤衛彦、濱田廣介および尾關岩二が出演した。目下年刊童話集第四輯を印刷中、會員三十七名の作を収め、その附録に尾關岩二の執筆になる「昭和三年の童話界」がある。

(2) 現在の會員

昭和五年一月現在の會員は次の五十

- 四名である。
- 小川未明 楠山正雄 蘆谷薫村 鹿島
- 鳴秋 濱田廣介 秋田雨雀 沖野岩三
- 郎 藤澤衛彦 濫澤青花 山内秋生
- 酒井朝彦 村山篤子 前田晃 松原至
- 大 中村星湖 江口漢 大木雄三 福
- 永漢 鳴海要吉 小野浩 大木篤夫
- 徳永壽美子 細川武子 茅野雅子 宇
- 野千代 石黒露雄 坪田讓治 清水か
- つら 伊藤貴麿 木内高音 北川千代
- 下村千秋 田中宇一郎 塚原健二郎
- 村岡花子 安倍季雄 巖谷小波 岩井
- 信實 宇野浩二 尾關岩二 北村壽夫
- 久保田万太郎 久留島武彦 小寺融吉
- 相馬泰三 千葉省三 豊島與志雄 中
- 島孤島 長尾豊 野邊地天馬 馬淵冷
- 佑 水谷まさる 宮原晃一郎 吉田絃
- 二郎(順不同)

社聞新・社誌雜

(順音十五)

在現月十年四和昭

本項は文藝に關係ある雜誌及び新聞の編輯擔當者を列挙したものであるが雜誌社にあつては一雜誌名、二發行所、三その所在、四電話番号、五編輯者等を記載した。而して雜誌は特に讀者の便を思ひ本年鑑所定のもの以外にも互り六十種を選んだ。

- 四階 (電話) 銀座二四八七・一六九〇
- (社長) 菊池寛
- (編輯) 近藤經一 古川綠波 岡部龍
- 上山雅輔
- 映畫と演藝——東京朝日新聞社
- (所在) 東京市麹町區有樂町三ノ一
- (電話) 丸の内一三〇一—三九・一四
- 一一一五八
- (編輯) 星野辰男
- 演藝畫報——演藝畫報社
- (所在) 東京市本郷區駒込動坂一一〇
- (電話) 小石川四九一一
- (編輯) 渥美清太郎
- 演劇研究——演劇研究社
- (所在) 東京市外巢鴨宮仲一九六九
- (編輯) 中村吉藏 大山廣光
- 改造——改造社
- (所在) 東京市芝區愛宕下町四ノ六
- (電話) 芝一一二一—一一二四
- (社長) 山本實彦
- (編輯) 三輪鍊一 徳富巖城 佐藤績
- 一 水島治男 深田久彌 鈴木一園
- キング——大日本雄辯會講談社
- (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四八

(電話) 小石川二二五—二二七、二六〇、二五一〇、二五一一、三五九六、五九八一、七〇八八
 (社長) 野間清治
 (編輯) 淵田忠良 廣瀬照太郎 森安勇 星野知常 長曾我部寅雄 岡島清市 中川雅枝 福村秀雄 西原長康 渡邊茂雄 室井剛八 徳江儀正 佐治克己 井出利信 西原誠直 内岡松夫
 近代生活——近代生活社
 (所在) 東京市牛込區矢來町四七
 (電話) 牛込九一八
 (編輯) 岡田三郎
 現代——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四八
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 唐澤武三郎 服部明二 御郷信夫 竹中保一 諏澤日出男 谷亮昭 小川一雄 土田喜三 蘆屋光久 生島操 小山宣二
 講談俱樂部——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四八
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 岡田貞三郎 横山八五郎 清水榮治郎 菅原宏一 鈴木慎三 瀨川正夫 王井好孝 鈴木松雄 伊藤珍太郎
 講談雜誌——博文館
 (所在) 東京市小石川區戸崎町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 眞野律太
 プロレタリア科——プロレタリア科
 學研究所
 (所在) 東京市外上落合五〇二
 (所長) 秋田雨雀
 (編輯同人) 片岡鐵兵 林房雄 村山知義 藏原惟人
 コドモノクニ——東京社
 (所在) 東京市京橋區墨町一
 (電話) 京橋三七三四、三七三五
 (編輯) 鷹見久太郎
 サンデー毎日——大阪毎日新聞社
 (所在) 大阪市北區堂島上二ノ三六
 (電話) 北五五〇〇、五六〇〇
 (編輯) 伊藤金次郎 渡邊均
 週刊朝日——大阪朝日新聞社
 (所在) 大阪市北區中之島三ノ三
 (電話) 本局三五〇〇
 (編輯) 春山武松 内海景晋 多賀博
 詩神——詩神社
 (所在) 東京市外世田ヶ谷下北澤九二五
 (編輯) 田中清一
 芝居とネマ——大阪毎日新聞社
 (所在) 大阪市北區堂島上二ノ三六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 伊藤金次郎 高原慶三
 新正統派——新正統派社
 (所在) 東京市神田區表神保町二
 (編輯) 淺沼悦
 新青年——博文館
 (所在) 東京市小石川區戸崎町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 水谷準
 新思潮——新思潮社
 (所在) 東京市小石川區白山御殿町一〇
 (編輯) 一戸務
 新潮——新潮社
 (所在) 東京市牛込區矢來町七一
 (電話) 牛込八〇五—八〇九
 (社長) 佐藤義亮
 (編輯) 中村武羅夫 檜崎勤
 主婦之友——主婦之友社

(所在) 東京市神田區駿河臺
 (電話) 神田一一六一—一一六六
 (社長) 石川武美
 (編輯) 本郷保雄
 生活者——不二社
 (所在) 東京市外代々木笹塚一〇一三
 (編輯) 倉田百三
 少女畫報——東京社
 (所在) 東京市京橋區墨町一
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 鷹見久太郎
 少女俱樂部——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四八
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 宇田川鈞 岡田たま 黒岩三平 丸山豊作 原又作 市川孝 大塚常雄
 少女世界——博文館
 (所在) 東京市小石川區戸崎町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 原田恭之助
 少女の友——實業之日本社
 (所在) 東京市京橋區南紺屋町一二
 (電話) 五一二一—五一二六
 (社長) 増田義一
 (編輯) 岩下天年 二宮伊平
 少年俱樂部——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 加藤謙一 片岡良子 須藤憲三 西村俊成 岩本新作 高橋清次 鳥居俊道
 少年世界——博文館
 (所在) 東京市小石川區戸崎町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 堀經道
 戰旗——戰旗社
 (所在) 東京市麴町區三番町二八
 (編輯) 山田清三郎 秋哲夫
 祖國——學苑社
 (所在) 東京市外千駄ヶ谷五六二
 (編輯) 藤井眞澄
 國海——博文館
 (所在) 東京市小石川區戸崎町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 井口長二
 中央公論——中央公論社
 (所在) 東京市麴町區丸九ビル五八八區
 (電話) 丸の内二〇六
 (編輯) 島中雄作 雨宮庸藏
 女人藝術——女人藝術社
 (所在) 東京市牛込區左内町三一
 (電話) 牛込一七八九
 (編輯) 長谷時雨 生田花世
 日本少年——實業之日本社
 (所在) 東京市京橋區南紺屋町一二
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 野口武夫 内山基
 富士——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 中島民干 木村喜市 中村康雄 中森清雄 金井正 細島喜美 金枝一郎 清水瀧次
 婦人畫報——東京社
 (所在) 東京市京橋區墨町一
 (電話) 京橋三七三四、三七三五
 (編輯) 水谷まさる
 婦人俱樂部——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 新井兵吾 袖木ます 上野良英 新井武助 熊谷寛 玉井光郎 原精一 小田島トキ 小林芳三郎 大和幸衛 梅本忠男 渡邊康平 峰

美知子 渡邊福次郎
 婦人公論——中央公論社
 (所在) 東京市麴町區丸ビル五八八區
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 伊藤茂雄 高垣たか子 佐藤澄子 藤井武夫
 婦人サロン——文藝春秋社
 (所在) 東京市麴町區内幸町大阪ビル四階
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 近藤經一 永井龍男
 婦人世界——實業之日本社
 (所在) 東京市京橋區南紺屋町一二
 (電話) 五一二一—五一二六
 (社長) 増田義一
 (編輯) 中島薄紅 宮崎徳 岩崎要藏 中村星秋 太田龍太郎 岩井弘子 古澤美恵子 海老衣子
 婦人之友——婦人の友社
 (所在) 東京市外雜司ヶ谷上り屋敷一四八
 (電話) 牛込三七七八、三七一九
 (編輯) 羽仁説子 松井しづ子 千葉貞子
 婦女界——婦女界社
 (所在) 東京市麴町區丸ビル三五五區
 (電話) 丸の内二一九一—二一九三、二九二八、二九三七
 (主幹) 都河龍
 (編輯) 太田菊子 佐久間三郎 京極無修 首藤久子
 文學——第一書房
 (所在) 東京市麴町區一番町五
 (電話) 九段三三四四、三五〇九
 (編輯) 犬養健 堀辰雄
 文學時代——新潮社
 (所在) 東京市牛込區矢來町七一
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 加藤武雄 佐左木俊郎
 文學風俗——文學風俗社
 (所在) 東京市麻布區新網町一ノ三〇
 (編輯) 原田齊起
 文藝俱樂部——博文館
 (所在) 東京市小石川區戸崎町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 横溝正史 本位田準一 中川史郎 村田千秋 三宅修
 文藝時報——文藝時報社
 (所在) 東京市小石川區林町二
 (電話) 小石川一三九五
 (編輯) 多惠文雄
 文藝春秋——文藝春秋社
 (所在) 東京市麴町區内幸町大阪ビル四階
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 佐佐木茂索 齋藤龍太郎 馬海松 西村晋一
 文藝戰線——文藝戰線社
 (所在) 東京市外杉並町高圓寺六一
 勞農藝術家聯盟内
 (編輯) 石井安一
 三田文學——三田文學會
 (所在) 東京市芝區三田慶應義塾大學内
 (編輯) 和木清三郎
 雄辯——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 岡田晴吉 鈴木宏志 本間羅久治 岩山行雄 本信哲 川島涉 伊藤虎雄
 幼年俱樂部——大日本雄辯會講談社
 (所在) 東京市本郷區駒込坂下町四六
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 笛木悌治 齋藤しげ 光野豊

吉 福島省三 小島侍 小田切久男
 清水泰十郎
 幼年の友——實業之日本社
 (所在) 東京市京橋區南紺屋町一二
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 由井寅一郎
 令女界——寶文館
 (所在) 東京市日本橋區本銀町二ノ二
 (電話) 日本橋二六二六、二六二七
 (編輯) 藤村耕一、柴山晴美
 若草——寶文館
 (所在) 東京市日本橋區本銀町二ノ二
 (電話) 前に掲ぐ
 (編輯) 北村秀太
 大阪朝日新聞社
 (所在) 大阪市北區中之島三ノ三
 (電話) 本局三五〇〇
 (學藝課) 青山武松 内海景普 多賀博
 大阪毎日新聞社
 (所在) 大阪市北區堂島上二ノ三六
 (電話) 北五五〇〇、五六〇〇
 (學藝部) 新妻莞 大竹憲太郎 渡邊均 名越國三郎 村島歸之 柄澤廣
 之 望月滿 小笠原秀登 渡邊得三
 高信喜代松
 國民新聞社
 (所在) 東京市京橋區加賀町
 (電話) 銀座五一〇—五一七
 (學藝部) 岡田復三郎 阪井徳三郎
 時事新報社
 (所在) 東京市麴町區丸の内
 (電話) 丸の内二一一—二一八
 (文藝部) 榊山潤 今井欣三郎 檜原豊一
 東京朝日新聞社
 (所在) 東京市麴町區有樂町
 (電話) 丸の内一三一、一四一
 (學藝部) 坂崎坦 妹尾太郎 竹中繁子 新延修三 中川陽太郎 時岡辯三郎
 東京日日新聞社
 (所在) 東京市麴町區有樂町
 (電話) 丸の内三二一、三三一
 (學藝部) 川邊眞藏 石川欣一 枝元長夫 尾崎昇 井上練次郎 大塚虎雄 大友刀藏
 報知新聞社
 (所在) 東京市麴町區有樂町
 (電話) 丸の内五五〇—五五九
 (文藝部) 伊駒榮藏 佐近益榮 青木武雄 市毛大成 太田雅光 菅野博峰卓
 都新聞社
 (所在) 東京市麴町區内幸町
 (電話) 銀座四五八—四五九
 (文藝部) 上泉秀信 飛田角一郎 豊島薫
 讀賣新聞社
 (所在) 東京市京橋區西紺屋町
 (電話) 京橋一一一一
 (文藝部) 清水彌太郎 平林襄二 河邊雅治 木村武雄 稻葉熊野

文士録

文士録について

- 一、配列は五十音順に據つたが、特にキはイに、エはエに、ヲはオに併せ入れ、且つ使用上の便宜を慮り専ら發音本位にした。「相馬」は「サ」の部に入れず、「ソ」の部、「河野」は「カ」を避けて「コ」の部に收めると云つた如きである。
- 一、生年月日、出生地、學歷、經歷、著作、代表的作品、職業、所屬、現住所等の順に記載したが、資料の都合に依り必ずしも右に據らなかつたものもある。
- 一、氏名の下に*印の附してあるものは昭和四年十一月十五日現在文藝家協會々員である。
- 一、前年版の文士録中より除去したものは死亡五名、その他二十七名計三十二名あり、新たに加へたものは三十九名、本稿には四百三十三名を採録した。尙ほ登載すべくして逸したものの數名あるが、これは何れも締切までに資料を得られなかつたがためである。
- 一、調査は努めて完全を期したが、尙ほ多少の不備誤謬がないとは云へないかも知れない。進んで資料の提供を得れば幸甚である。殊に住所の移動等は自他の便宜にもなること故その都度お知らせ願へるよう希望する。

[ア]

青野季吉*

明治二十三年二月四日、新潟縣佐渡郡澤根町に生れる。佐渡中學校を卒業後、三年間小學教員を奉職、後上京して早大に入學、大正四年同大學英文科卒業、大正十二年六月まで讀賣新聞、大正日日新聞、國際通信社に記者生活をした。文藝評論社會評論多く、「轉換期の文藝」無産政黨と社會運動の著のほかに、翻譯「資本主義最後の段階としての帝國主義」國争に輝く光「蒼ざめたる馬」國富論「マルクス・エンゲルス傳」何を爲すべきか」等がある。「文藝職線」同人。

赤松月船*

明治三十年三月、岡山縣淺口郡鴨方村に生れる。幼にして僧院に入り伊豫瑞應寺越前永平寺にて修業、又東洋大學に在學した。生田長江氏に師事し、初め詩評論を専らにし近時小説をも發表してゐる。(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷六二六

秋田雨雀*

秋庭俊彦

明治十八年四月五日、東京神田に生れる。同二十七年僧侶となるべく品川東海寺の弟子となる。同三十三年、京都に赴き紫野中學校に入り、同三十六年同校卒業。その後東洋大學聴講生となつたこともある。初め短歌に志し金子薫園氏の歌風を學び後新詩社同人となる。明治三十八年早大英文科豫科に入り、同四十二年卒業。チエホフの翻譯數卷があり、最近は「チエホフ選集」を「世界文學全集」の「露西亞三人集」中にて上梓した。大正十五年以來、等々力農園を設け蔬菜、草花の栽培に従事してゐる。(現住) 東京市外玉川村等々力六五

浅原六朗*

鏡村の號を持つ。明治二十八年二月二十

渥美清太郎

明治二十五年東京に生れる。東京本郷の郁文館中學を卒業の後、「演藝畫報」に引き続き執筆、大正六年から同誌の編輯に従事して今日に至る。多くの演劇に關する批評のほかに歌舞伎劇の考證がある。著書に「歌舞伎狂言往來」がある。(現住) 東京市小石川區原町一〇

網野菊

明治卅三年一月十六日、東京に生れる。大正九年日本女子大學校英文科を卒業。短篇集「光子」のほか短篇數種がある。(現住) 奈良市關伽町

新井紀一*

明治二十三年二月二十二日、群馬縣多野郡吉井町に生れる。四谷小學校卒業後、十五年間の勞働生活と二年間の軍隊生活を経て、「中央文學」記者、時事新報文藝部記者を前後六年間勤める。大正九、十年頃に「早稻田文學」「中央公論」等に發表した小説により所謂勞働文學の先驅者の名を馳せた。長篇「二人の文學青年」同「落葉の如く」短篇集「燃ゆる反抗」「雨の八號室」の四著あり、ほかに小説隨筆等、近時童話探偵小説にも筆を染めてゐる。(現住) 東京市外板橋町中丸四二五

有島生馬*

本名壬生馬。明治十五年十一月、横濱市月岡町に當時横濱稅關長だつた有島武氏の二男として生れる。故武郎氏の令弟、里見淳氏の令兄である。學習院に學び後東京外國語學校伊太利語科に入學、明治三十七年七月同校卒業、洋畫を學ぶべく藤島武二氏の門下となる。同三十八年六月伊太利留學のため渡歐、同四十三年歸朝するまでの間、アカデミー・ド・フランスマ、羅馬國古美術學校、グラント・シヨミ

安藤盛*

明治二十八年八月十八日、大分縣直入郡白丹村に生れる。學歴、經歷などは取りたてて云ふほどの事もなく唯僅かに新聞記者となりし事あるのみ。長く植民地にて生活をなす。數種の大衆文學を發表せり。(現住) 東京市麻布區笈町五

[イ(キ)]

飯島正*

明治三十五年三月五日、東京に生れる。かつて「新思潮」「青空」同人だつたことがある。現在は「文藝都市」同人。「シネマのABC」の著作の外映畫評論等多し。帝大文學部に在學中。(現住) 東京市外世田ヶ谷町下北澤新屋敷九七三

飯田豊二

明治三十一年三月一日、愛知縣中島郡稻澤町に生れる。東京工科學校機械科卒業。嘗て金星堂、中央公論社等に關係す、小説「我等の配列」等がある。社會藝術家聯盟員。「文藝解放」及び解放座同人。(現住) 東京市外澁橋柏木大町一〇三八

生田葵*

本名、盈五郎。明治九年四月十四日、東京都に生れる。京都東洋英學校卒業、大正二年から三ヶ年、英獨へ留學した。小説「謎の女」「富美子姫」「虚茶」「罪の扉」戯曲「慈善小屋」「舞踊劇「櫻津の日本武尊」等の著のほかに、尙ほ多くの大衆小説等がある。(現住) 東京市外世田ヶ谷町代田三九

生田 春月 *

本名、清平。明治二十五年三月十六日、鳥取縣西伯郡米子町に生れる。郷里の小學校を中途退學し、一家と共に朝鮮に渡り、後大阪及び東京に放浪。早大に在學したこともあるが、専ら獨學にて文學及び語學を修める。詩集「靈魂の秋」「感傷の春」「春月小曲集」「慰めの國」「澄める青空」「夢心地」「春月詩集」「抒情小曲集」「生田春月篇」(現代詩人全集八)長篇小説「相寄る魂」感傷集「眞實に生きる悩み」「智慧に輝く愛」「メルケとヘルデルリン」等の著書のほかに評論感想詩翻譯等數多く最近の業績としては評論集「山家文學論」及び「世界文學全集」中の「北歐三人集」(ピヨルンソン三篇、ラゲルレフ二篇の翻譯)などを擧げることが出来る。

生田 長江

名は弘治。明治十五年三月、鳥取縣日野郡根雨町に生れる。東京青山學院、第一高等學校を経て、明治三十九年東京帝大文科を卒業。脚本集「圓光以後」「纂奪者」小説「哀史」「落花の如く」評論集「最近の小説家」最近の文藝及び思潮「徹底人道

生田 蝶介

主義」等の著作のほか、特にニイチエ研究家として名あり「ニイチエ全集」の翻譯あり、また「世界文學全集」中の「死の勝利」(ダマツツイオ)ダンテの「神曲」(世界文學全集第一卷)の譯などもある。

生田 花世

本名は調介。明治二十二年五月二十六日、山口縣豐浦郡長府町に生れる。十四歳の春故郷を出て京都に遊學五年、十九歳の春上京、早大英文科に入り修業三年にして中途退學。時事新報文藝部記者たること半歳、博文館編輯部に入り、「日曜畫報」「演藝俱樂部」の記者たり。後永らく「講談雜誌」を主宰したことがある。小説「光に近く」「廓模倣」「歩み」「歌集」「長旅」「寶玉」「凝視」「搖籃」「渦潮」「旅人」「三歸來」。「短歌用語小辭典」などの著があり、近時は多く大衆文學ものを發表してゐる。短歌雜誌「吾妹」同人。

生田 花世

明治二十一年十月十五日、徳島縣板野郡松島村に生れる。徳島縣立高等女學校を卒業の後、小學校教員、雜誌新聞の記者

井 汲 清 治 *

をしたことがある。小説集「燃ゆる頭」小品集「情熱の女」感想隨筆集「戀愛順禮」の著のほか、詩小説等の作がある。生田春月氏の夫人、「女人藝術」編輯。

池 田 大 伍 *

本名は銀次郎。明治十八年九月、東京銀座に生れる。明治四十年早大英文學科を卒業。戯曲の作多く、「瀧口時頼」「茨木屋幸齋」「名月八幡祭」等は何れも上演されて好評を博したものである。その他演劇に關する批評研究も尠くない。銀座「天金」の主人。

池谷 信三郎 *

明治三十三年十月十五日、東京市京橋區舟町に生れる。曉星中學、東京府立一中を経て、第一高等學校を卒業。後、渡歐、ベルリン大學にて經濟學を修めた。歸朝後時事新報の懸賞に應募して長篇「望郷」を寄せ當選、そのほか翻譯「一週間」戯曲短篇集「橋・おらんだ人形」の著作がある。

石川 欣一 *

明治二十八年三月十七日、東京に生れる。高師附屬中學を経て第二高等學校卒業。東京帝大英文科中途退學、米國に遊ぶ。後大阪毎日新聞社に入社。目下は東京日日新聞學藝部に勤務。隨筆集「煙草とパイプ」「山へ入る日」の他に多くの隨筆並に翻譯等がある。

石濱 金作 *

明治三十二年二月、東京市京橋區木挽町に生れる。第一高等學校を経て、大正十三年東京帝大英文科卒業。第六次「新思潮」を川端康成氏などと經營したことが

石丸 梧平 *

あつた。また「文藝時代」「文藝春秋」の同人であつた。小説「喜劇」「結婚破壊時代」「青春挿話」その他評論、隨筆等がある。

泉 鏡花

本名は鏡太郎。明治六年十一月四日、金澤市下新町に金尾彫工清次の長男として生れる。金澤高等小學校、北陸英和學校に學び、明治二十三年上京。同二十四年十月尾崎紅葉の門に入り同家に寄寓する。同二十六年五月より京都日出新聞に「冠彌左衛門」を連載したのを最初とし、同二十八年博文館の「日用百科全書」編纂に従事したほか、今日まで終始専ら文筆に

伊藤 永之介

よる生活を續けてゐる。其間著作頗る多く、主なる單行本のみにも「湯島詣」「草迷宮」「鏡花集」(五卷)「銀鈴集」「戀女房」「鏡花選集」「遊里集」「鶯鶯帳」「七寶の柱」「番町夜講」等を擧げることが出来る。尙ほ別に「鏡花全集」(春陽堂發行)と「泉鏡花集」(現代日本文學全集第十四卷)「泉鏡花集」(豪華版)がある。

井 東 憲 *

本名は伊藤憲。明治二十八年八月二十七日、東京牛込區神樂坂に生れる。質屋の雇人となり、放浪生活數年の後に、東京正則英語學校を経て大正八年明治大學法科卒業。長篇小説「地獄の出來事」同「人間の巢」戯曲集「妖怪亂舞」等の作がある。近時はまた支那文學の紹介翻譯などもあ

伊藤 貴麿 *
(現住) 東京市芝區琴平町若林方、電話
芝二二〇七番
明治二十六年九月五日、神戸市に生れる。
早大英文科を卒業。舊「文藝時代」の同
人だつた。短篇集「カステラ」の著があ
る。

伊藤 松雄 *
(現住) 東京市外下落合四三八

伊藤 靖
明治二十六年八月、福島縣須賀川町に生
れる。東北學院、第二高等學校を経て、
東京帝大醫學部藥學科を卒業。星製藥會
社の技師を勤めたことがある。長篇「發
掘」「傷痕」のほか短篇がある。
(現住) 東京市麹町區三番町五一

稲垣 足穂
明治三十三年十二月二十六日、大阪市北
區寶寺町に生れる。神戸關西學院中學部
を卒業。小説「天體嗜好症」「村の騒動」「星
澄む郷」「煌ける城」「飛行機物語」等の外
に評論隨筆コントあり、別に「一千一秒物
語」「星を賣る店」「鼻眼鏡」第三半球物
語」の著がある。
(現住) 東京市外西巢鴨町新町八一七池
内舞踏場内

犬養 健 *
明治二十九年、七月東京牛込に生れる。學
習院中等科高等科を卒業、東京帝大哲學
科中途退學。「十二月二十五日」「變つて
行くもの」「孤獨」「カメラード」「黄ろい
花」「松吉の場合」「裸木」等の他小説の作
多く「一つの時代」「南國」「南京六月祭」
「天養健集」(新進傑作小説全集) 戯曲「家
鴨の出世」の著書がある。
(現住) 神奈川県鎌倉町長谷原ノ臺一八
三

犬田 卯
明治二十四年八月、茨城縣稻敷郡牛久村
大字城中に生れる。郷里の小學校を卒へ、
二十五歳まで農事に従事。後、上京専ら
農民小説を發表、長篇「土に生れて」「土
にあぐら」短篇「農人」ほか二十數篇、評論
集「農民文藝の研究」翻譯「或る百姓の生
涯」(エミール・ギヨマン作)等。
(現住) 東京市外杉並町成宗一三

井上 勇
明治三十四年四月三十日、廣島縣神石郡
永渡村に生れる。東京外國語學校佛語科
卒業、東京帝大文科中途退學。佛蘭西文
學の紹介及び翻譯が多い。
目下外遊中

井上 康文
本名は康治。明治三十六年六月、神奈川
縣小田原町に生れる。大正六年、東京藥
學校を卒業、製藥工場職工技手となり、
「新小説」記者となり、また雜誌編輯圖書
出版等の仕事をしたこともある。大正十
年には自ら詩人會を興し雜誌「新詩人」を
發行した。詩及び散文の作多く、詩集「愛
する者へ」「土に祈る」「愛の翼」「未明の生

伊原 青々園 *
(現住) 東京市四谷區三光町一

伊原 青々園 *
本名は敏郎。明治三年四月二十日、松江
市雜賀町に生れる。松江中學より第一高
等學校に入り中途退學。初め二六新報に
劇評を擔當し、後、「早稲田文學」記者、
更に都新聞記者となり、今日に至る。
目下は都新聞社調査部長。「伊原青々園
集」(現代大衆文學全集第二五卷)の他多
くの戯曲、小説評論等がある。「日本演劇
史」が最も世に聞えてゐる。
(現住) 東京市赤坂區青山南町五ノ三七
(電話青山一〇六九)

伊福 部隆輝
明治三十一年五月十二日、鳥取縣八頭郡
智頭町に生れる。評論集「現代藝術の破
産」のほか、評論、詩が多い。
(現住) 東京市外野方町字新井三三三

今野 賢三 *
本名は賢藏。明治二十六年八月十三日、
秋田縣南秋田郡土崎港町に生れる。郷
里の小學校を卒業の後、商店小僧労働者

岩崎 純孝
明治三十四年四月九日、静岡市に生れる。
戸川貞雄氏の令弟、郷里の小學校を卒業
後、東京成城中學校を経て、東京外國語
學校伊太利語科を卒業。評論及び伊太利
文學の紹介翻譯がある。
(現住) 東京市外荻窪六四八

岩田 豊雄
明治二十六年七月一日、横濱市に生れる。
慶應義塾幼稚舎より同普通部を経て同大
學部中途退學。四年間佛蘭西に遊學。「現
代の舞臺裝置」「クノック」等の著譯のほ
かに近代劇全集の佛伊作品の翻譯その他
がある。
(現住) 東京市外中野町雑色六一七

岩藤 雪夫
明治三十七年四月一日、横濱(神奈川縣
立横濱病院施設部七號室)に生れる。故
郷は岡山縣津山町。東京市外千駄ヶ谷小

巖谷 小波
本名は季雄。別に樂天居の號がある。明
治三年六月六日、東京麹町に生れる。獨
逸協會學校出身。京都日出新聞記者の後
博文館編輯局に入り、「少年世界」主筆、
同編輯局主幹等に歴任し、目下は顧問で
ある。また文部省囑託、文藝委員會、通
俗教育調査會、臨時國語調査會の各委員、
伯林東洋語學校講師、早大文學部講師な
どの經歷もある。早くより少年文學、お
伽噺の開拓に努め「小波をぢさん」の名は
何人も少年期に一度は親しんだものであ
る。従つてこの方面の述作多く、「世界お
伽噺」「世界お伽文庫」「日本お伽噺」「日本
昔噺」「小波お伽百話」「新お伽百話」「洋行
土産」「新洋行土産」「喜劇七草」「お伽芝居
十八番」「桃太郎主義の教育」「我が五十
年」「こがね丸」「伯林土産の繪葉書」等
はその主なるものである。尙ほ別に俳句
の作も多い。

(現住) 東京市芝區高輪南町五三

[ウ]

上田文子*

明治三十八年十月二日、東京市淺草區向柳原に生れる。東京高師附屬小學校卒業、日本女子大學附屬高女中途退學。「ふるさと」「姉」「過渡期の凡婦」等の戯曲あり、「晚春騒夜」は昭和三年十二月築地小劇場に上演された。

(現住) 東京市小石川區龍洞町一六一 (電話) 大塚九二二番

白田亞浪

本名は卯一郎。明治十二年二月一日、長野縣小諸町に生れる。法政大學卒業後、十餘年間新聞記者生活をしてゐた。俳句及び俳句に就いての研究等多く、句集「炬火」「評釋正岡子規」「正傳眞田三代記」「目ざすべき俳句の一路」その他の著作がある。雑誌「石楠」主幹。

(現住) 東京市外代々木山谷一七五

宇野浩二*

本名は格次郎。明治二十四年七月、筑前

博多に生れる。少年期を大阪にて過ごす。早大英文科中途退學。小説集「蔵の中」「苦の世界」「男心女心」「戀愛合戦」「美女」「我が日我が夢」「魔都」「宇野浩二篇」(現代長篇小説全集第二〇卷)等のほかに多くの小説及び評論、童話などの著作がある。

(現住) 東京市下谷區上野櫻木町一七

宇野四郎*

明治二十六年四月、東京神田に生れる。慶應義塾文學部出身、戯曲集「眞宮一家」「嘆きの影」等の作がある。帝劇文藝部員。

(現住) 神奈川県鎌倉市坂ノ下一七六

宇野千代*

明治三十年十一月二十八日、山口縣玖珂郡岩國町大字川西に生れる。大正三年岩國高等女學校卒業。短篇集「脂粉の顔」「幸福」「晩唱」「白い家と罪」「新選宇野千代集」のほか、小説、隨筆、童話等の作が多い。

(現住) 東京市外代々木町海岸鈴ヶ森ボブラの家氣附

生方敏郎*

明治十五年八月、群馬縣沼田町に生れる。

明治學院を経て、早大英文科卒業。「虐げられた笑」「女性に支配する」「人のアラ世間のアラ」「一圓札と猫」「食後談笑」その他諷刺文學の作が多い。雑誌「ゆうもあ」主幹。

(現住) 東京市外野方町上沼袋三一六

[エ]

江口 渙*

明治二十年七月二十日、東京麹町區富士見町に生れる。三重縣立第四中學校、熊本第五高等學校卒業、東京帝大英文科中途退學。東京日日新聞記者、「帝國文學」編輯に従事したこともある。小説「性格破産者」「赤い矢帆」「戀と牢獄」「労働者誘惑」「悪魔」のほか評論集「新藝術と新人」等小説評論及び翻譯などが多い。近時は社會主義及び社會問題に關する評論を主として發表してゐる。

(現住) 東京市外吉祥寺町六一五

悦田喜和雄

明治二十九年八月二十四日、徳島縣海部郡三岐田町に生れる。小學校を卒へたほか、別に學歷を持たない。武者小路實篤

氏に師事して、小説を發表してゐる。短篇集「新らしき日」「百姓」その他がある。

(現住) 宮崎縣兒湯郡新しき村

江戸川亂歩*

本名は平井太郎。明治二十七年十月二十一日、三重縣津市に生れる。早大政治經濟科卒業、公吏、會社員、商店員、書籍店自營等の經歷を持つてゐる。専ら探偵小説をものし、「心理試験」「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獸」「江戸川亂歩集」その他この方面の著作が多く、「ポー、ホフマン集」、「シャーロックホームズの冒險」等の翻譯もある。

(現住) 東京市外戸塚町源兵衛一七九 (電話) 牛込二四六四

江原小彌太

明治十五年十月、新潟縣刈羽郡柏崎に生れる。教員、新聞記者、會社員、海員、商人等の經歷を持つてゐる。長篇「新約」「舊約」「復活」短篇集「野人」「混濁」「女子多面」等の小説のほか「心靈學」「新自然科學と生活革命」「人生學」などの著作がある。

(現住) 京都市下賀茂泉川一二號角野方

江馬 修*

明治二十二年十二月十二日、岐阜縣高山町に生れる。斐太中學を中途退學、長篇「受難者」「暗礁」「不滅の像」「運命の影」短篇集「樞の葉」「心の窓」その他の著作がある。

(現住) 東京市外代々木初臺六〇八

江見水蔭

本名は忠助。明治二年八月、岡山市に生れる。稱好塾、東京英語學校に學んだ。小學の作から「空中の人」「水蔭叢書」「水車」等はその主なもの、近著に「自己中心明治文壇史」がある。近時は大衆文藝に筆を染めてゐる。別に俳句をよくし、考古學上の蒐集も學界一部に知られてゐる。

(現住) 東京市外品川小倉山一一五二

[オ]

大泉黒石

本名は清。明治二十六年十月二十一日、長崎市八幡に生れる。長崎鎮西學院中學、京都第三高等學校等に學んだ。「俺の自叙

大鹿卓

明治三十一年八月、愛知縣に生れる。秋田鐵山専門學校を経て、京都帝大經濟學部に入り、主として同文學部の講義を聴いたが中途退學。その後、學校教師をしてゐる。詩集「兵隊」その他がある。(現住) 東京市四谷區番柴町一八

大關柝郎

本名は太一郎。明治二十三年十二月、茨城縣筑波郡北條町に生れる。京華中學を卒へ、東京外國語學校佛語科及びボストン大學に學ぶ。東京日日新聞記者だつたこともある。大正三年七月から同十一年まで、演劇研究のために歐米諸國を歴遊した。戯曲集「嵐」及び「現代佛蘭西傑作叢書」の翻譯その他がある。(現住) 東京市麹町區元園町一ノ七

太田水穂

本名は貞一。明治九年十一月、長野縣筑摩郡廣丘村に生れる。長野師範學校卒業、歌集「つゆ草」「山上湖上」のほか、「新譯伊勢物語」「紀歌集講義」「短歌立言」など國文學に關する著作も妙くない。日本齒科醫專教授、雜誌「潮音」主宰。

(現住) 東京市外田端二八二

大槻憲二

明治二十四年十一月二日、兵庫縣淡路國洲本に生れ、神戸にて育つた。東京美術學校洋畫科中途退學、早大英文科を大正七年に卒業。キリアム・モリス「藝術のための希望と不安」パトラー「ダント」その他の譯著及び評論がある。(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷六〇九

大村嘉代

明治十八年十二月二十三日、東京麹町に生れる。日本女子大學校文科卒業、岡本綺堂氏に師事、戯曲集二三がある。(現住) 東京市小石川區大塚仲町四一(電話大塚九四八)

大森眠歩

明治三十四年三月、東京市神田區五軒町に生れる。放浪轉々のみにて學歴等不詳、戯曲集「幻想時代」その他がある。(現住) 東京市外池上町雪ヶ谷八一八

大宅壯一

明治三十三年九月、大阪府富田町に生れる。中學中途退學、專門學校入學者檢定

試験に合格、第三高等學校、東京帝大文科中途退學。「共產黨の研究」「赤い星」世界文學全集中の「モンテクリスト伯」(下巻)の翻譯、他多くの評論がある。(現住) 東京市外吉祥寺五六九

岡榮一郎

明治二十三年十二月、金澤市に生れる。東京帝大英文科卒業。戯曲及び演劇評論その他がある。(現住) 東京市下谷區中根岸町五九

岡鬼太郎

本名は嘉太郎、明治五年八月一日、東京芝區芝山内に生れる。慶應義塾出身、戯曲の作多く、ほかに演劇評論研究などもある。松竹合名會社相談役。(現住) 東京府調布町田園都市一七〇

岡下一郎

明治二十八年十二月二十二日、名古屋に生れる。愛知町立高等小學校を卒業後、鐵道火夫、紙函屋小僧、道路人夫、發電所職工、荷車挽、郵便配達夫等あらゆる勞働生活を續けた。二十七歳にして上京。短篇數十篇がある。「文藝戰線」同人。(現住) 東京麹町三番町二八戰旗社氣附

岡田三郎

明治二十三年二月、北海道福山町に生れる。同四十二年、小樽中學校を卒業して直ちに上京、畫家志望にて太平洋研究所に入つたが間もなく退所。早大英文科卒業、博文館編輯局に入り、「文章世界」編輯をした。後、佛蘭西に遊學、歸朝後、「文藝日本」編輯に當つたこともある。舊「不同調同人」だつた。短篇集「涯なき路」「青春」「岡田三郎集」(新進傑作小説全集第十卷)長篇「巴里」「聖火」等の著書があり、ほかに長篇「肉體の秋」「黄金草」「殘光夢」短篇「喧嘩三昧」「泥まみれ」「血」「酒」「夏」等多くの小説及び評論隨筆コントなどがある。「近代生活」同人。(現住) 東京市牛込區矢來町四〇

岡田八千代

明治十六年十二月、廣島に生れる。畫家岡田三郎助氏夫人、故小山内薫氏令妹。東京富士見町小學校、女子職業學校、成女女學校等に學んだ。「門の草」「新緑」「繪具箱」「八千代集」等の著がある。劇團芽生座を主宰してゐる。(現住) 東京市外下灘谷一八三七

岡本かの子

明治二十三年三月、東京青山に生れる。小石川跡見女學校を卒業。明治四十三年畫家岡本一平氏に嫁した。歌集「かろきねたみ」愛のなやみ」等の著があり、ほかに小説隨筆などがある。目下外遊中(現住) 東京市赤坂區青山高樹町三

小川未明

本名は健作。明治十五年四月七日、高田市に生れる。明治三十八年、早大英文科卒業。「秀才文壇」の編輯をしたこともある。「愁人」「赤き地平線」「雨を呼ぶ樹」その他小説の作多く、「小川未明選集」に収録されてゐる。また感想集「生活の火」「人間性のために」及び「赤い蠟燭と人魚」「ある夜の星たち」「港に着いた黒んぼ」等の童話集がある。(現住) 東京市小石川區雜司ヶ谷町七六

岡本綺堂

本名は敬二。明治五年十月十五日、東京芝區高輪に生れる。學歴といふもの殆んどなく、専ら獨學。新聞記者をしたこともある。脚本の數多く「綺堂戯曲集」十卷にまとまつてゐる。その他「半七捕物帳」

翁久允

「岡本綺堂集」「世界怪談名作集」「世界大衆文學全集第廿五卷」の翻譯また探偵小説數種の著がある。(現住) 東京市麹町區元園町一ノ二七

沖野岩三郎

明治二十一年二月八日、富山縣中新川郡六郎谷村に生れる。明治四十年渡米、約八年間苦學生活をする。同時に、太平洋沿岸にて發行する諸種の邦人新聞雜誌に小説を發表した。後、約十年間は日本人會幹事、新聞記者、大正十年の華府會議には日米新聞社の特派員として派遣された。同十三年歸朝、東京朝日新聞社に入り、「週刊朝日」の編輯を擔當せり。短篇集「移植樹」長篇「道なき道」感想隨筆集「宇宙人は語る」がある。(現住) 東京市外目黒町駒場九〇五

岩三郎篇(現代長篇小説全集の内)その他童話の著作も数多くある。
(現住) 東京市外下落合一五一〇

萩原井泉水
本名は藤吉。明治十七年六月十六日、東京芝区神明町に生れる。明治四十一年、東京帝大文学科(言語學科)を卒業。俳句及び俳句に關する研究評論多く、「井泉水集」(二卷)「層雲全集」(五卷)「井泉水俳話」(二卷)「旅人芭蕉」(古人を説く)、「俳句趣味論」(春秋文庫第十三卷)等はその著作の主なるものである。雑誌「層雲」主宰。
(現住) 相州鎌倉町材木座光明寺内

尾崎喜八
明治二十五年一月三十一日、東京京橋區南小田原町に生れる。京華商業學校卒業。「ロオマン」(小説)「近代音楽家評傳」(ペルリオ自傳と書翰)「ペーター・ベン交響樂の研究」(詩集)「空と樹木」(高層雲の下)等の著作の他、多く評論、詩などがある。
(現住) 東京市京橋區四日市町五

尾崎士郎
明治三十一年二月五日、愛知縣幡豆郡横須賀村に生れる。岡崎中學を卒へ、早大

中途退學。短篇集「獄中より」「逃避行」「懷疑者の群」「尾崎士郎集」(新進傑作小説全集第十卷)等の著作のほか、近作に「世紀の夜」「荏原郡馬込村」等、また評論隨筆もある。
(現住) 東京市外馬込町中井一五七八

長田秀雄
明治十八年五月、東京市神田區神保町に生れる。中學卒業後、明治大學、關西大學等に學んだ。永く劇場「市村座」の顧問、重役をしてゐた。戯曲集「歡樂の鬼」「放火」「琴平丸」「大佛開眼」「愛憎篇」「飢渴」「牡丹燈籠」小説集「午前二時」「聲」その他がある。
(現住) 東京市牛込區横寺町五九(電話牛込六五一〇)

長田幹彦
明治二十年二月一日、東京市麹町區九段坂上に生れる。東京高等師範附屬中學校卒業、早大英文科中途退學。中學を卒へて後間もなく與謝野寛氏品子氏の新社に入り「明星」に二三の小説を發表、後、「スバル」派に屬してゐた。明治四十四年永い間の放浪生活を了へて東京に歸り「スバル」に「濤」を發表して文壇一部の好

評を博し、次で翌四十五年「中央公論」に「零落」を發表したが、これが出世作とも云ふべきものであつた。前記二作のほか「霧」があり、今日までに八十餘卷の著作がある。最近には「現代長篇小説全集」の「長田幹彦篇」として「永遠の謎」「戀ころも」を上梓した。小説集「新選長田幹彦集」「長田幹彦篇」(明治大正文學全集第廿三卷分冊)のほか隨筆などもある。
(現住) 東京市牛込區南山伏町一
(電話牛込二〇三九)

大佛次郎
本名は野尻清彦。明治三十年十月に生れる。東京帝大法科卒業、外務省官吏たつたこともある。大衆文藝の作を専らとし、「鞍馬天狗」「御用盜異聞」「小鳥を飼ふ武士」「艶説蟻地獄」「天狗騷動記」「春宵和尚奇縁」「照る日曇る日」「赤穂浪士」「角兵衛獅子」「幽霊傳奇船」「ごろつき船」(上巻)「鞍馬天狗山嶽黨奇談」等は主なるものである。
(現住) 神奈川県鎌倉材木座通(電話)鎌倉八六八番

尾瀬敬止
明治二十二年十一月十八日、京都市上京

區車屋町に生れる。東京外國語學校露語專修科卒業、東京朝日新聞記者をしたこともある。露西亞文學の紹介翻譯に努め、また日露藝術協會(大正十三年三月組織)のために盡力した。「勞農ロシアの文化」「ロシア十大革命家」「勞農ロシア詩集」「日本を歌へる」(ロシア詩集)「革命ロシアの藝術」その他の譯者がある。
(現住) 相州鎌倉町圓覺寺前

小田律
明治十八年九月五日、東京に生れる。慶大中途退學。米國大使館通譯官たりしことあり、また曾て「ジャパンズ・メッセ」ジ・ウィ・アメリカ」編輯者として日米親善運動のために渡米したことがある。「米國及米國人」の著の他に翻譯、大衆文藝等がある。
(現住) 東京市外駒澤町下馬四七〇

落合浪雄
明治十二年一月十八日、東京淺草區三筋町に生れる。横濱商業學校卒業後、早稻田專門學校英語政治科、東京帝大政治科に學んだ。萬朝報、東京日日新聞記者を経て、松竹合名社松竹キネマ社員をしてゐた。「社會生活學」翻譯「闇の力」等のほ

かに脚本「大尉の娘」映畫脚本「坂崎出羽守」を初め多くの作がある。
(現住) 東京市外長崎町荒井一七一七

小寺菊子
明治十五年八月、富山市に生れる。女學校中途退學。小學校教員を二年ほど勤めたこともある。洋畫家小寺健吉氏夫人。長篇小説「父の罪」「紅あざみ」「頬紅」「祖母」短篇集「百日紅の蔭」「十八の娘」などがあり、短篇集「情熱の春」はその近業である。
(現住) 東京市外大久保百人町三二九

小野金次郎
明治二十五年四月十六日、横濱市に生れる。神奈川県鎌倉師範學校中途退學。外國商館員などの後、現に讀賣新聞演藝記者。戯曲の作及び演劇に關する批評隨筆等がある。
(現住) 東京市外大崎町白金猿町一一一

尾上柴舟
本名は八郎。明治九年八月二十日、岡山縣津山に生れる。東京帝大文科國文學科卒業。文學博士。歌集「静夜」「永日」「日記の端より」「遠樹」「白き道」「空の色」

「朝ぐもり」研究「日本文學新史」(古今と新古今)「歌と草假名」平安朝時代草假名の研究」等の著がある。東京女子高等師範學校教授、早大講師、「水煙主宰」
(現住) 東京小石川區白山御殿町一二七(電話小石川四二〇〇)

尾山篤二郎
明治二十二年十二月、金澤市に生れる。金澤高等學校及び私立英學院に學んだ。新聞記者、雜誌記者をしたこともある。自然詩社を經營し文藝雜誌「自然」を發行。「明治歌壇史」「鑑賞長塚節歌集」の他歌集隨筆の著書十餘種がある。最近大衆文藝の作を試み「影繪双紙」の著がある。
(現住) 東京市日本橋區檜物町紅玉堂内

片岡鐵兵
明治二十七年二月、岡山縣津山町に生れる。津山中學卒業後上京、慶應大學英文科を中途退學。大阪朝日新聞記者を大正九年三月限りやめ、創作に精進する。同年八月「人間」に「舌」を發表したのが出世作だと云はれてゐる。舊「文藝時代」

同人。短篇集「がい話」の少女「片岡鐵兵集」(新進傑作小説全集の内)、「新選片岡鐵兵集」の著作のほか、多くの小説、評論がある。「戦旗」同人。
(現住) 東京市外落合町葛ヶ谷東一五

鹿地 巨

明治三十六年五月一日、鹿兒島市武町に生れる。昭和二年東京帝大文学部卒業。戯曲「一九二七年」のほか、評論等がある。「戦旗」同人。
(現住) 東京市麹町区三番町二八戦旗社 氣付

勝本清一郎*

明治三十二年五月、東京市日本橋區茅場町に生れる。慶應義塾幼稚舎、普通部を経て、大正十二年同大文学部卒業、その後二年半ほど同大学院に在學した。大正十五年四月「三田文學」復活に際して同誌の編輯に當り、昭和二年十月辭任した。主として評論を發表し小説の作もある。「近代生活」同人。目下獨逸に遊學中。

加藤朝鳥

本名は信正。明治十九年九月、鳥取縣東伯郡社村に生れる。明治四十二年早大英

文科卒業、大正八九年オランダ領爪哇に遊んだ。「最近文藝思潮講話」「爪哇の旅」「十字軍」等の著のほか、多くの翻譯紹介及び評論等がある。
(現住) 東京市外玉川村瀬田一一七一

加藤 一夫*

明治二十年二月二十八日、和歌山縣西牟婁郡大郡河村に生れる。明治學院神學部卒業、二年ほど傳道に従ふ。後、文學方面の仕事を始め社會運動にも參加した。長篇「無明」「幻滅の彼方」「虚無論文集」「本然生活」「土の叫び地の囁き」「民衆藝術論」「救ひの無い人生」「自由人の生活意識」等のほか、小説、評論及び多くの翻譯がある。「世界大思想全集」を企畫し、その編輯にたづさはつてゐる。
(現住) 神奈川県都筑郡新治村大六天

加藤 武雄*

明治二十一年五月三日、神奈川県津久井郡川尻村に生れる。明治三十五年、郷里の小學校卒業後、小學校教師となる。同四十三年上京、新潮社に入り今日に至る。舊「文章俱樂部」主幹。現に「文藝時代」主幹。農文藝會を起し雑誌「農民」を主宰したこともある。短篇集「土を離れて」

金子 薫園

本名は雄太郎。明治九年十一月、東京神田に生れる。故落合直文に師事した。歌集「片われ月」「外十歌集」「金子薫園集」等のほか、和歌に關する作法研究書が多い。新潮社員、短歌研究會「光」主宰。
(現住) 東京市外高田町一三七一(電話 牛込一四一〇)

金子 洋文*

本名は吉太郎。明治二十七年四月十四日、秋田縣土崎港に生れる。小學校卒業後上京し、一年有餘、電氣屋の小僧をして歸郷、縣立工業學校機械科を卒業、小學校教師をした。大正九年十月上京、雑誌記者、新聞記者をした。小説集「地獄」戯曲集「投げ棄てられた指輪」「理髮師」戯曲小説集「銃火」のほか、多くの小説戯曲の作、童話集二三もある。「文藝戦線」同人。

加能作次郎*

(現住) 東京市外井荻村上荻窪六四八
明治十九年一月、石川縣羽咋郡西海村に生れる。小學校卒業後、小僧生活をし、小學校教師などもした。明治三十八年九月上京、國民英學會に學び、同四十年早大入學、同四十四年同大英文科卒業。その間「ホトトギス」に毎號外國文豪の評傳、作風の紹介等を執筆、處女作は同誌に發表した「恭三の父」である。大正二年博文館に入り「文章世界」記者となり、同十年退職。長篇小説「世の中」「若き日」「傷ける群」「小夜子」「幸福へ」その他短篇集「誘惑」「厄年」「處女時代」などの著作がある。
(現住) 東京市牛込區加賀町二ノ三三

上 司 小 劍*

明治七年十二月、奈良市に生れる。學歷といふほどのものを持たない。永らく讀賣新聞記者をしてゐたことがある。短篇集「鱧の皮」「父の結婚」「生存を拒絶する人」「巫女殺し」長篇「木像」「お光莊吉」「東京」「上司小劍篇」(現代長篇小説全集第十六卷)等の著作のほか多くの小説、隨筆などがある。

加 宮 貴 一*

(現住) 東京市外馬込町洗足三八三七
明治三十四年二月二十七日、岡山市中之町に生れる。鳥取縣立第一中學校を経て大正七年岡山縣立第一中學校卒業、大正十二年慶應大學文科卒業。舊「文藝時代」同人。「一片のパン」「屏風物語」の各短篇集のほか「戀の一片」「詐病患者」「メリ・ゴウ・ラウンド」その他の短篇がある。
(現住) 東京市本郷區千駄木町五九

嘉 村 磯 多

明治三十年十二月山口縣周防國仁保村に生れる。學歷らしきもの殆んどなしと云ふ。併て雑誌「不同調」の編輯に従事した。「業苦」「星の下」「生別離」その他の種類の短篇がある。
(現住) 東京市牛込區矢來町四六、中村 武羅夫方

河 井 醉 茗*

本名は又平。明治七年五月七日、大阪府堺市北旅籠町に生れる。早稻田専門學校(早大前身)に學んだ。「女子文壇」を主宰し、「婦人之友」編輯にも従事した。詩集「彌生集」「青海波」「塔影」「桂の巻」を初め

川 口 松 太 郎*

として、詩、散文詩等の著作が多い。
(現住) 東京市外中目黒一四八〇
明治三十二年十月一日、東京淺草區今戶町に生れる。久保田万太郎、故小山内薫氏等に師事した。雑誌「音楽」の編輯をしたことがある。戯曲及び大衆文藝の作がある。
(現住) 大阪市住吉區天王寺町一三四五

川 崎 長 太 郎

明治三十四年十二月六日、神奈川県小田原町に生れる。小田原中學、中途退學。その後約五年間、家業魚商に従事した。大正十一年秋上京、小説を發表した。「無題」「酔ひ」「漁師街の魚屋」その他の短篇がある。
(現住) 東京市外下戸塚五二五法榮館方

川 崎 備 寛*

明治二十五年三月、大阪府下に生れる。中學卒業後、關西大學經濟科に學んだ。會社員、女學校教師、中學校教師をしたこともある。舊「不同調」同人。「カーペンタア訪問記」その他翻譯が二三あり、また短篇約二十種がある。

川路柳虹

(現住) 市外南品川淺間臺一五〇一
本名は誠。明治二十一年七月九日、東京芝區三田臺町に生れる。東京美術學校卒業。支社にて、「新家庭」の編輯主任、博文館にて「美術寫眞畫報」「太陽」の編輯に當つたこともある。詩、詩論、美術評論等が多く、「路傍の花」かなたの空二歩む人」はつ戀「曙の輝」その他の詩集、「現代日本美術界」「現代美術の鑑賞」「詩の新研究」等の著作がある。
(現住) 神奈川県鎌倉郡鎌倉町材木座三七一

川尻清潭

本名は義豊。明治九年八月一日、東京淺草藏前に生れる。歌舞伎劇の批評及び考證などが多い。松竹合名會社相談役、歌舞伎座舞臺監督。
(現住) 東京芝區芝公園二一號地番外七

河竹繁俊

本名は吉村繁俊。明治二十二年六月九日、長野縣下伊那郡山本村に生れる。長野縣立飯田中學校、早大英文科を卒業、文藝協會演劇研究所第一期卒業、故河竹默阿

川端康成

明治三十二年六月、大阪北區此花町に生れる。第一高等學校を経て、東京帝大文科卒業。「文藝春秋」「新思潮」「文藝時代」の同人だつたことがある。評論及び小説の作多く、短篇集「感情裝飾」「川端康成集(新進傑作小説全集の内)」の著がある。
(現住) 東京市下谷區上野櫻木町四九カハヒカシ

河東碧梧桐

本名は兼五郎。明治五年、松山市に生れる。初め岡子規、内藤鳴雪、高濱虚子等と共に日本俳句派を起し、後に新傾向句を提唱。「日本俳句抄」「三千里」「續三千里」等のほかに句作多くまた評論隨筆紀行の數も尠くない。俳句雜誌「碧」主幹。
(現住) 東京市牛込區加賀町一ノ九

川村花菱

本名は正平。明治十七年二月二十一日、東京市牛込區久戸町に生れる。早大英文科卒業。戯曲及び演劇評論等多く、「花菱脚

上泉秀信

明治三十年二月十二日、山形縣西置賜郡長井町に生れる。米澤中學校卒業、早大英文科中途退學。戯曲及び小説の作がある。都新聞文藝部記者。
(現住) 東京市外井荻町上井草一八一〇

神近市子

明治二十四年六月六日、長崎市北松浦郡佐々村に生れる。長崎市活水女學校、東京女子英學塾卒業、弘崎高等女學校教師、東京日日新聞記者をした事がある。短篇集「村の反逆者」「人類物語」「パイプル物語」等の著作のほか、小説評論隨筆等がある。
(現住) 東京市外落合町上落合五〇六

蒲原有明

本名は隼雄。明治九月三月、東京に生れる。小學校を了へたほか別に學歴を持たない。「獨絃哀歌」「春鳥集」「有明集」「有明詩集(全集)」「有明詩抄(岩波文庫)」等

多くの詩作がある。
(現住) 静岡市鷹匠町二ノ四

[キ]

菊池寛

明治二十二年十二月二十六日、香川縣高松市七番町に生れる。明治四十一年、高松中學校を卒業、東京高等師範學校に入學したが、一年有餘で除名された。同四十二年第一高等學校に入り、大正二年四月退學。同年九月京都帝國大學英文科選科に入り翌年本科に移り、同五年同科を卒業。大正五年十月、時事新報社に入り社會部記者となり、同八年二月退社、翌月から大阪毎日新聞社員となつた。大正十二年一月、雜誌「文藝春秋」を創刊し引續き同誌を主宰し今日に至つてゐる。初め草田杜太郎の筆名を用ひ、大正三年五月、當時故芥川龍之介、久米正雄、豊島與志雄等と興した第三次「新思潮」に戯曲「玉村吉彌の死」を發表したのが處女作であり、大正七年七月「中央公論」の「無名作家の日記」が出世作であらうと云はれてゐる。小説及び戯曲の作頗る多く、主なる單行本のみでも「心の王國」「中傷者」

彌の養嗣子。詳傳「河竹默阿彌」の著作のほか、「默阿彌全集」の校訂編纂は最も顯著である。
(現住) 東京市外中澁谷松壽五四

貴司山治

明治三十二年十二月二十二日、徳島縣板野郡鳴門村に生れる。小學校卒業。大正九年より同十三年まで大阪時事新報記者を勤めた。「止れ進め」を代表作として多くの長篇小説がある。プロレタリア作家同盟に屬してゐる。
(現住) 東京市外吉祥寺五三四

岸田國士

本名は清。明治三年十一月、水戸市に生れる。永らく大阪毎日新聞の社員だつた。「己が罪」「乳姉妹」「毒草」「彼女の運命」「お夏文代」「百合子」「女の生命」等の著作のほか、多くの小説がある。
(現住) 兵庫縣武庫郡部屋屋

菊池幽芳

「慈悲心鳥」「火華」「新珠」「貞操」「肉親」「戀愛病患者」「時と戀愛」「明眸禍(上巻)」「菊池寛集(豪華版)」「東京行進曲」等々を擧げることが出来る。ほかに評論隨筆も多く、また愛蘭文學に關する研究などもある。
(現住) 東京市麹町區内幸町大阪ビル二階文藝春秋社内(電話銀座一六九〇)

木蘇穀

明治二十三年十一月二日、東京に生れる。陸軍士官學校出身、東京帝大佛蘭西文科に學び、文學演劇研究のために渡歐、巴里に四年ほど滞在。歸朝後、法政大學中央大學の講師となつた。戯曲集「古い玩具」「チロルの秋」「屋上庭園」「落葉日記」等のほか、多くの戯曲評論紹介及び翻譯がある。「悲劇喜劇」を主宰したことがある。
(現住) 東京市外杉並町天沼山下四二六

北尾龜男

明治二十五年八月二日、東京赤坂區表町に生れる。大倉商業學校、正則英語學校に學んだ。「演劇新潮」記者だつたことがある。戯曲「稻葉成佛」その他十數種の戯

曲がある。

(現住) 東京市赤坂區新町五ノ三三

北川千代

明治二十七年六月十四日、埼玉縣大寄村に生れる。東京三輪田高等女學校中途退學。曾て江口漢氏夫人だつた。「樂園の外」に飾める花「歸らぬ兄」赤い花」等の著作のほかに短篇小説、童話等がある。(現住) 東京市外三河島町宇町屋三六三

北原白秋

本名は隆吉。明治十八年一月、福岡縣柳河町に生れる。早大英文科中途退學。詩、短歌、散文詩、小唄、民謡、童謡、隨筆、論文等の著作頗る多く、主なる單行本に「白秋詩集」(二卷)「水墨集」(日本の笛「わすれなぐさ」)「思ひ出」(白秋小唄集)「あしの葉」(北原白秋集) (現代詩人全集第五卷分冊)「海豹と雲」(銀の花籠)、「白秋全集」(フレック・トリップ)「季節の窓」(風景は動く)「洗心雜話」(藝術の圓光)「緑の觸角」(雲母集)「桐の花」(雀の卵)「新選北原白秋集」(とんぼの眼玉)「日本童話集」(編) (日本兒童文庫第二三卷)、「世界童話集」(譯) (日本兒童文庫)、「篋」(北原白秋集) (現代短歌全集第九卷分冊)

「白秋國民歌集」(改造文庫)等がある。かつて「近代風景」を主宰した。

(現住) 東京市外世田ヶ谷若林二三七

北村喜八

明治三十一年、石川縣に生れる。金澤第四高等學校を経て、大正十三年東京帝大英文科卒業。評論「表現主義の戯曲」のほかに翻譯「朝から夜中まで」(獨逸男ヒンケマン)「長い歸りの船路」(蟲の生活)、世界戯曲全集(第六卷)中の「シヨオ集」等があり、また戯曲及び評論紹介などがある。築地小劇場文藝部員。(現住) 東京市本郷區千駄木町四八

北村小松

明治三十四年一月四日、青森縣八戸町長横町に生れる。八戸中學を卒へて、慶應義塾大學の文科に入り、同大學卒業後松竹キネマ蒲田撮影所に入り今日に至る。戯曲集「猿から貰つた柿の種」のほかに戯曲、隨筆等がある。(現住) 東京市外矢口町小林二二九

北村壽夫

明治二十八年一月八日、東京市麹町區中六番町に生れる。攻玉社中學校卒業、早

大英文科中途退學。處女戯曲「幻の部屋」上梓以來、劇作多く、「駙馬哲學」は築地小劇場にて上演され「當世氣質」は映畫化された。童話の創作もある。(現住) 東京市外砧村成城學園前

喜多村進

明治二十二年九月十四日、和歌山市湊通町に生れる。東京正則中學校卒業、青山學院英文科卒業、舊南葵文庫に勤務、大正十三年七月より帝大附屬圖書館に轉じた。目下は東京帝國大學司書。長篇小説「霧」短篇集「青磁色の春」の著がらる。(現住) 東京市外世田ヶ谷太子堂本村一〇七

木下柰太郎

本名は太田正雄。曾て別名北村清六「きしのあかしや」を用ひたこともあつた。明治十八年八月、伊豆伊東に生れる。第一高等學校を経て東京帝大醫科卒業。永らく東京帝大醫科助手を勤め、後、南滿醫學堂に赴き、獨逸留學、大正十三年歸朝、直ちに愛知醫科大學教授となつた。目下は東北帝大醫學部教授。醫學博士。「和泉屋染物店」「南蠻寺門前」「印象派以後」(えすばにや、ほるとがる記)、「木下

柰太郎集」(日本探偵小説全集第一七卷分冊)等の著がある。

(現住) 仙臺市光禪寺通四

木村毅

明治二十七年二月十二日、岡山縣勝間田村に生れる。大正六年、早大英文科卒業。書肆隆文館、春秋社の編輯員をした後、大正十五年には雑誌「反響」を主宰編輯した。創作集「鬼と妖生」のほかに「小説研究十六講」小説の創作と鑑賞「世界文學の輪廓」文藝東西南北」等の著がある。また翻譯も多く、「世界文學全集」中の「クオ・ヴディス」は最もよく知られてゐる。昭和三年五月渡英、滯歐二ヶ年の豫定であるといふ。(留守宅) 東京市外西大久保二一三

木村庄三郎

明治三十五年八月、東京本所に生れる。東京府立第一中學校を卒業後、慶應義塾大學に入り、日下國文科在學中である。「嘘」見えざる敵」その他の短篇がある。「山嶺」同人。(現住) 東京市芝區高輪南町三〇

木村富子

文士録(キ)(ク)

明治二十三年十月十日、東京淺草區千束町に生れる。松居松翁に師事して戯曲を研究、大正十五年五月處女作「玉菊」の歌舞伎上演を始めとして、數種の戯曲及び舞踊劇「高野物狂」などがある。

(現住) 東京市淺草區千束町二ノ四二三 (電話淺草四〇〇三)

木村幹

明治二十二年一月十日、長野縣南佐久郡野澤町に生れる。錦城中學校卒業。一高を経て帝大に進み政治科佛文科に各二年宛在學した。新聞記者の經歷がある。創作集「駒鳥の死」翻譯「居酒屋」(最近佛蘭西文學史)「情人の告白」(テレマツク物語)「法の精神」(夢)などがある。(現住) 東京市外巢鴨町巢鴨一〇七二

清見陸郎

明治十九年十月十一日、東京神田區猿樂町に生れる。東京中學校卒業、東京美術學校日本畫科に一ヶ年間在學。また早大英文科に籍を置いたこともある。「美術新報」秀才文壇」の編輯に當り、根岸興行部脚本部長だつたこともある。戯曲集「宮古路驛後縁」のほかに多くの戯曲がある。

(現住) 東京市外巢鴨町三ノ二六

[ク]

楠田敏郎

明治二十三年四月二十六日、京都府與謝郡宮津町に生れる。「秀才文壇」(小説俱樂部)記者から新聞記者生活に入り、東京毎日、大阪朝日、大正日日、大東京新聞社等で働いた。歌集「彩雲」「流離」戯曲集「火遊び」「白日の堂」その他がある。短歌雜誌「吾妹」同人。(現住) 東京市牛込區河田町一一

楠山正雄

明治十七年十一月、東京銀座に生れる。早大英文科卒業、讀賣新聞、「新日本」の記者をしたことがある。「近代劇十二講」「ジャンクリストフ物語」、その他劇文學に關する著作、翻譯多く、別に童話の譯著も數多ある。富山房編輯顧問。(現住) 東京市麻布區霞町一九ノ三

工藤信

明治三十一年三月六日、大分に生れ東京に育つた。富士見小學校(麹町)、府立一

中を経て大正九年早大英文科卒業。東京外語伊語科に學んだ。評論を主とし短篇小説若干がある他に、著作「表現派の映畫」(翻譯)「チエホフ選集」(フランス大革命史論(クロボトキン)「鼠陷し」(イレーツキ)等がある。

工藤恒

明治二十八年、秋田縣土崎港に生れる。二十三歳にして上京、目下は婦人畫報「ゴドモノクニ」發行所の東京社編輯部に勤めてゐる。「歸郷」(徒勞)その他の作がある。

邦枝完二

明治二十六年一月一日、東京麹町區有樂町に生れる。東京外國語學校伊語科に學んだ。時事新報記者を大正八年に退き、帝國劇場附屬技藝學校主事を勤めたことがある。戯曲集「明暗録」(邪曲集)「異教徒の兄弟」及び「演劇往來」(戯曲の見方と考へ方と作り方)等の著作のほか長篇小説「大空に描く」などがある。

國枝史郎

明治二十一年十月十日、長野縣諏訪郡宮川村に生れる。東京都文館中學卒業、早大英文科中途退學。大阪朝日新聞記者をした後、松竹合名社に脚本部員だつたことがある。近時、大衆文藝の作家として著名である。「レモンの花咲く丘」(黒い外套の男)「紅白縮緬組」(名人地獄)等のほかに多くの著作がある。

國木田虎雄

明治三十五年一月、東京赤坂に生れる。故國木田獨歩の息。病弱のため中學を中途退學。詩集「鳴」のほかに小説の作がある。

久野豊彦

明治三十一年九月、名古屋に生れる。慶應義塾大學經濟科出身。「第二のレエニ」その他の作がある。

窪田空穂

本名は通治。明治十年六月、長野縣東筑摩郡和田村に生れる。明治三十七年、舊早稻田大學文學部を卒業。新聞雜誌記者をしたことがある。「自選歌集榎の木」(改造文庫)、「青朽葉」その他歌集、文集、古典註釋書など十數種の著がある。早稻田大學教授。

久保田万太郎

明治二十二年一月、東京淺草區田原町に生れる。慶應義塾大學文科卒業、短篇集「東京夜話」(戀の目)「春泥」長篇「末枯」戯曲集「万太郎戯曲集」(雨空)「心ころ」などのほかに多くの戯曲、演劇批評、隨筆、俳句などがあり、戯曲集「夜鶯」はその近業である。東京中央放送局顧問。

久米正雄

明治二十四年十一月二十三日、長野縣小縣郡上田町(今の上田市)に生れる。八歳の時父の自殺に會ひ、母方の實家の所在地福島縣安積郡桑野村に移つた。同村の小學校より、縣立安積中學に入り明治四十五年卒業。中學時代に俳句をよくし河

東碧梧桐氏を師とし三汀と號した。第一高等學校を経て大正五年東京帝大英文科卒業。神田錦城中學校の教師を勤めたことがあり、大正七年以來作家生活に入つた。處女作は社會劇「牛乳屋の兄弟」で大正三年三月、第三次「新思潮」に發表したもの、小説の第一作は同五年二月の第四次「新思潮」に發表した「父の死」である。

小説、戯曲の數頗る多く、單行本として上梓した主なるものとして、「蒼草」「不死鳥」「赤光」「冷火」「晴夜」「破船」「天と地と」等の長篇と、「學生時代」「木靴」「増補學生時代」(新潮文庫第五篇)、「新選久米正雄集」等の短篇集を擧げることが出来る。別に「現代長篇小説全集」の第十三卷として久米正雄篇、「現代日本文學全集」の第三十二篇として「久米正雄集」、「日本戯曲全集」の第四十七卷として「久米正雄篇」がある。その他「椿姫」「マノン・レスコー」(世界大衆文學全集第五卷)の翻譯などもある。時事新報社客員、東京中央放送局顧問。昭和三年十一月出發歐米を漫遊して同四年十一月歸朝した。

倉田百三

(現住) 神奈川縣鎌倉町塔の辻二〇六
明治二十四年二月二十三日、廣島縣庄原

藏原惟人

町に生れる。第一高等學校に學んだ。出家とその弟子「歌はぬ人」「愛と認識の出發」(布施太子の入山)「静思」「轉身」(處女の死)等の著がある。雜誌「生活者」主宰。

黒島傳治

明治三十一年一月、東京に生れる。東京外國語學校露語科卒業。二ヶ年モスクワに學んだ。「藝術と無産階級」、「壊滅の譯その他露西亞文學の翻譯紹介のほか、評論等がある。「戦旗」同人。



甲賀三郎

本名は春田爲龍。明治二十六年十月、東京に生れる。京華中學校卒業、第一高等學校を経て、東京帝大工科應用化學科卒業、工學士。商工省窒素研究所技師をしてゐたことがある。探偵小説の作頗る多く、「琥珀のバイブ」(現代大衆文學全集)の第十二卷として「甲賀三郎集」(日本探偵小説全集)の第四卷として「甲賀三郎集」等その他の著書がある。

古賀龍視

明治二十八年三月十六日、福岡縣三潞郡川口村に生れる。柿河中學傳習館卒業、早大英文科に學んだ。「病院の人々」(影)等のほか小説、評論がある。

甲田正夫

明治三十三年一月四日、長野縣小縣郡中鹽田村に生れる。長野中學校卒業、慶應義塾大學文科中途退學。文藝春秋社にゐたことがある。短篇小説及び評論等がある。讀賣新聞記者。

幸田露伴

本名は成行。慶應三年七月、江戸(東京)に生れる。十三歳にして小學校の業を卒業、菊池松軒に就いて學ぶ。明治十六年電信修技校に入り、翌年卒業。判任官として北海道後志に赴任したが、同二十年官を捨て出京。同二十一年に「露伴」を著す。同二十二年に讀賣新聞社客員となつた。同二十三年、國會新聞に入り同二十九年同新聞廢刊まで續く。明治四十二年五月、京都帝大講師となり大正三年九月解任。小説、論文、史傳その他作物頗る多く、主なる刊行物に次のやうなものがある。「風流佛」「葉末集」「新葉末集」「宮尊徳」「勇魚捕」「寶の藏」「尾花集」「真西遊記」「枕頭山水」「日蓮上人」「有福詩人」「さゝ舟」「きくくの濱松」「佛伴」「ひげ男」「ひとり寝」「雲の袖」「水上語彙」「新羽衣物語」「小萩集」「伊能忠敬」「待言」「長語」「露伴叢書(前、後篇)」「出處」「天うつ浪(第一、第二、第三)」「潮待草」「不藏庵譚」「はるさめ集」「蝸牛庵夜譚」「寶の山」「玉かつら」「小品十種」「頼朝」「露伴集(第一、第二)」「努力論」「修省論」「洗心録」「立志立功」「悅樂」「幽情記」「冬の日抄」「幽秘記」「蒲生氏郷・平將門(名和長年)

河野義博

明治二十三年九月八日、山梨縣東山梨郡加納岩村に生れる。早大英文科出身。戯曲「平重盛」「故郷」「木食仙人」「醫者と行者」の作及び「近代演劇史」の著がある。「演劇研究」同人。(現住) 山梨縣東山梨郡加納岩村

小島健三

明治三十一年五月二日、秋田縣由利郡本莊町に生れる。大正五年縣立本莊中學校卒業。後、青山學院に學んだ。「蜘蛛」文藝春秋「主觀」の同人だつた。「首」「千手觀音」「跡」その他の作がある。(現住) 東京市小石川區丸山町一三

小島政二郎

明治二十七年一月三十一日、東京下谷區下谷町に生れる。京華中學校卒業、慶應義塾大學文科卒業。長篇「綠の騎士」心の青空「短篇集」「含羞」「新居」童話「狼少年」のほか小説、隨筆及び國文學に關する

小島島

明治三十三年六月一日、松本市南深志に生れる。大正十三年、早大文學部哲學科卒業。處女作「地平に現はれるもの」は大正十四年九月の「早稻田文學」に發表したが發賣禁止の厄に遭つた。「遙かなる眺望」「群盜」その他の作がある。(現住) 東京市外杉並町高圓寺五三

小島徳彌

明治三十一年七月二日、京都市に生れる。京都府立第一中學校卒業、早大政治經濟科及文科中途退學。「父親と息子」「大尉の人形」「文壇百話」「レミゼラブル」「明治大正文學史觀」最近の思潮及批評」その他の著作がある。(現住) 東京市外下戸塚六二六

小杉天外

本名は爲藏。明治六年九月十九日、秋田縣仙北郡六郷町に生れる。國民英學會に學んだ。小説の作頗る多く、その主なるものに「蛇いちご」「はつ姿」「魔風戀風」

「コブシ」「銀笛」「七色珊瑚」「伊豆の頼朝」「靈鏡」「二つの太陽」等がある。(現住) 神奈川県厚木市町根山

小寺融吉

明治二十八年十二月八日、東京麹町區富士見町に生れる。開成中學校を経て、早大文科卒業。戯曲を發表する傍ら舞踊、兒童演劇の研究に従ふ。「近代舞踊史論」の著のほか多くの兒童劇の創作、舞踊、舞踊に關する論文等がある。(現住) 東京市外中野町上ノ原七六〇

小林多喜二

明治三十六年舊曆八月二十三日、秋田縣北秋田郡下川沿村に生れる。同三十九年一族と共に北海道に移住。小樽高商を卒業。「鍵」「蟹入」「最後のもの」「女囚徒」等の作の他、殊に近作「一九二八年・三・一五」「蟹工船」は最も著はれてゐる。創作集「蟹工船」がある。(現住) 小樽市若竹町一八

小林徳二郎

明治三十一年十一月三日、東京淺草に生れる。學歴と稱するほどの正規の教育は受けぬと云ふ。大正九年女文社に入り「新

小堀甚二

明治三十四年八月、福岡市に生れる。小學校卒業後、十五歳にして上京、十八歳までの間、芝浦製作所、瓦斯會社等に働く。十八歳の時歸郷、門司鐵道局従業員となつたが三年間に於いて罷免、大正十五年三月雜誌「解放」に戯曲「或る貯蓄心」を發表し、以後プロレタリア文藝運動に参加して今日に至る。戯曲、小説の作がある。「文藝戦線」同人。(現住) 東京市外杉並町高圓寺六六七

小牧近江

本名は近江谷駒。明治二十七年五月、秋田縣土崎町に生れる。東京曉星中學校を中途退學し、巴里大學法科に學んだ。外務省、國民新聞社にゐたことがある。「グラルテ」「小さな街」「フィリップ」その他の翻譯及び評論等がある。「文藝戦線」同人。(現住) 神奈川県鎌倉町稻村ヶ崎

小宮豊隆

明治十七年三月、福岡縣京都郡岸川村に生れる。東京帝大獨逸文科卒業。永らく慶應義塾大學講師であつたが、大正十三年獨逸から歸朝の後、東北帝大法文學部教授に就任し今日に至る。小説「烙印」のほか数篇の短篇と多くの文藝評論がある。(現住) 仙臺市北二番町

小宮山明敏

明治三十五年一月二十五日、岡山縣金川町草生に生れる。同縣金川中學校、第一早高を経て大正十五年早大文學部(露西亞文學專攻科)卒業。同年早稻田高等學院講師となつたが病後靜養のため昭和四年辭職した。評論及び翻譯がある。(現住) 東京市外世田ヶ谷町若林二八

今東光

明治三十一年三月二十六日、東京本郷區西片町に生れる。中學三年退學後、獨學。長篇小説「愛經」短篇集「瘦せた花嫁」その他がある。近時は映畫界の仕事に従事してゐる。(現住) 東京市本郷區西片町一〇ろ六號

(電小石川一九二六)

近藤 經一 *

明治三十年四月、東京に生れる。京華中學校卒業、第二高等學校を経て、東京帝大文學部卒業。戯曲「玄宗と楊貴妃」長篇小説「愛欲變相圖」の著のほかに小説、戯曲の作などがある。文藝春秋社「映畫時代」編輯。
(現住) 東京市麻布區筈町二六

[サ]

西條 八十

明治二十五年一月、東京牛込區拂方町に生れる。早大英文科卒業、東京帝大國文選科に學んだ。大正十三年春、佛蘭西に留學し昭和二年歸朝。詩集「砂金」「靜かなる朝」「愛吟詩百篇」「抒情詩集」「少年詩集」「美しき喪失」「新選西條八十集」、譯詩集「白孔雀」現代英詩講話「隨筆感想集」哀しき破片等の著のほかに、多くの詩、譯詩、童話などがある。早大講師。
(現住) 東京市外澁橋町柏木四三三

齋藤 茂吉

明治二十五年七月、山形縣南村山郡堀田村に生れる。第一高等學校を経て、東京帝大醫科卒業。獨逸に留學し大正十四年一月歸朝。長崎醫科大學教授だったことがある。醫學博士。短歌の作及び評論隨筆研究等が多く、「赤光」「あらたま」「童馬漫語」「短歌寫生の話」「短歌私鈔」「續短歌私鈔」「新訂金槐和歌集」(岩波文庫)等の著作がある。「アララギ」同人。
(現住) 東京市赤坂區青山南町五ノ八一

齋藤 龍太郎 *

明治二十九年三月、宇都宮市に生れる。栃木縣立宇都宮中學校卒業。早大文科西洋哲學科卒業。中學教師をしたこともある。大正十二年「文藝春秋」創刊と共にその同人になった。後、「新小説」編輯にもたづさはる。小説、評論、翻譯のほかに「ニイチエ哲學の本質」と編著「文藝大辭典」がある。文藝春秋社員、「文藝春秋」編輯。
(現住) 東京市外長崎町大和田二〇二一

酒井 眞人 *

明治三十一年七月、金澤市に生れ、東京

崎山 猷逸 *

明治三十四年二月、大阪市に生れる。天王寺中學校、青山學院中等部を経て、早大文學部に學んだ。「辻馬車」同人だった。短篇小説の作が約五十篇ある。
(現住) 東京市外杉並町天沼三七九

佐近 益榮

明治二十三年八月、鳥取縣西伯郡境町に生れる。約十年間の小學教員生活の後報知新聞記者となり、學藝部主任として引續き今日に及んでゐる。數篇の小説その他がある。
(現住) 東京市外代々木二二九

佐々木 邦

明治十六年五月、靜岡縣沼津に生れる。青山學院中學部を経て、明治學院高等部卒業。曾つて第六高等學校、慶應大學に教鞭を執つた事がある。ユーモアに富んだ作

佐佐木 千之 *

明治三十五年四月四日、北海道札幌に生れる。獨逸協會學校出身。訪問記者、筆耕生、役員などのほか「新潮」記者をしたことがある。曾て「短篇」「文藝王國」を主宰した。長篇三部作「憂鬱なる河」(北國・苦惱の街・戀愛行)の著と「暗い静物」「暗夜」等の短篇の作がある。
(現住) 東京市外駒澤新町一三六

佐々木 孝丸 *

明治三十一年一月三十日、釧路國川上郡屯田村に生れる。獨學。郵便局員、書店編輯員等をしたことがある。プール・ド・スイフ「赤と黒」「クラルテ」その他の翻譯などがある。「戦旗」同人。
(現住) 東京市外上落合一八九

佐左木 俊郎

明治三十三年四月十四日、宮城縣玉造郡一栗村に生れる。三四の私立學校に學ん

佐佐木 信綱

竹柏園の號を持つ。明治五年六月三日、三重縣鈴鹿郡藥師村に生れる。父は歌人佐佐木弘綱。東京帝大文科古典科出身。「日本歌學史」「萬葉集選」「新選山家集」。「萬葉集」(卷一、二、三、四)、「元曆萬葉集解説」、歌集「思草」「新月」「豊旗雲」等の外向多くの著書がある。大正六年帝國學士院から恩賜賞及賞牌を授けられた。文學博士。東京帝大文學部講師。「心の花」主宰。
(現住) 東京市本郷區西片町一〇一・一六

ささき ふさ

本名は佐佐木房。佐佐木茂索氏夫人。明治三十年十二月東京芝公園に生れる。青山女學院卒業。佛蘭西に遊んだことがある。短篇集「斷髮」その他小説、隨筆等がある。
(現住) 東京市赤坂區新坂町七五

佐々木 味津三

佐佐木 茂索 *

明治二十七年十一月、京都上京區に生れる。「中央美術」編輯、時事新報文藝部主任をしたことがある。短篇集「春の外套」「天の魚」「南京の皿」「新選佐佐木茂索集」等のほかに翻譯「小公子」「小公女」などがある。「文藝春秋」編輯主任。
(現住) 東京市赤坂區新坂町七五

佐藤 紅緑

本名は治六。明治七年七月、弘前市に生れる。弘前中學校を四年にて退學、東京法學院(中央大學の前身)に學んだ。外務省の囑託を受け佛蘭西へ行つたことがある。俳句、脚本、小説の作多く、近時は殊に小説を専ら發表してゐる。「半人半獸」

「愛の順禮」旅役者の手記「光の巷」「ワ
ン」物語等の著作がある。
(現住) 兵庫縣武庫郡鳴尾村西畑

佐藤惣之助*

俳名を大魚と云ふ。明治二十三年十二月、
神奈川縣川崎町(今の川崎市)砂子に生れ
る。詩集「正義の兜」「華やかな散歩」「琉
球諸島風物詩集」「トランシット」等のほ
か、多くの散文詩、隨筆、紀行などがあ
る。「詩の家」主宰。
(現住) 川崎市砂子町一ノ二六

サトウハチロー

本名は佐藤八郎、明治三十六年五月二十
三日、東京牛込區王寺町に生れる。佐藤紅
綠氏息。初め詩を志し福士幸次郎氏の門
に入りしも、後感ずるところありて童話
童話に志す。童話童話隨筆等多く各種雜
誌に發表する。
(現住) 東京市外西巢鴨堀ノ内九八七

佐藤春夫

明治二十五年四月九日、和歌山縣牟婁郡
新宮町に生れる。明治三十七年縣立新宮
中學校に入學したが、同三十九年には第
三年級にあつて原級にとゞめられた。同

四十二年夏、町内有志者の開催した文學
講演會に於てなした一場の談話が物議を
醸し、無期停學を命ぜられたところ漸く
懲戒は解かれ、同四十三年同校卒業。四
月上京、慶應義塾文學部に入學したが大
正三年退學。初期には散文、小品、詩を
専らにし、「病める薔薇」(田園の憂鬱)
第一稿の一部を雑誌「黒潮」に發表した
のは大正六年五月である。以後、小説の
作多く、刊行著作物の主なるものとして
は短編集「病める薔薇」同「お絹とその兄
弟」長篇「田園の憂鬱」短編集「美しき町」
「佐藤春夫選集」殉情詩集「短編集「幻燈」
「南方紀行」感想集「藝術家の喜び」中篇
「剪られた花」詩文集「わが一九二三年」
支那短編集「玉簪花」短編集「俗しすぎる」
「暮春挿話」「厭世家の誕生日」「佐藤春夫
詩集」「女誠扇綺譚」短編集「窓展く」「佐藤
春夫篇」(明治大正文學全集第四〇卷)、
「佐藤春夫集」(日本探偵小説全集第二〇
卷の内)評論隨筆感想雜文集「退屈讀本」
「支那童話集」(日本兒童文學第十三卷)、
支那譯詩集「支那歷朝詩抄」(軍廣集)、
その他長篇小説「神々の戯れ」現代長篇
小説全集の第二〇巻として「薔薇」の著
がある。
(現住) 東京小石川區關口町二〇七

里見 淳*

本名は山内英夫。明治二十一年七月十四
日、横濱市月岡町に横濱稅關長有島武の
四男として生れる。山内姓は、母方の里
の名跡を襲いだのである。麹町の番町小
學校より學習院初等科に入り、同院中等
科高等科を卒業。明治四十二年東京帝大
文科英文科に入學したが直ちに退學。明
治四十三年、「白樺」創刊に與り短篇「お民
さん」を同誌に發表したが、これが處女
作である。大正八年十一月より同十年六
月まで、吉井勇、久米正雄、田中純諸氏
と雑誌「人間」を發行したことがある。小
説、戯曲等の作多く、主なる著作物に次
の如きものがある。短編集としては「善
心悪心」「三人の弟子」「慾」「毒草」「幸福
人」「父親」「雨に咲く花」「縁談」「妬心」
「里見淳篇」(現代長篇小説全集第四三卷)
「里見淳集」(豪華版)、「新選里見淳集」(戯
曲集)長篇としては「桐畑」「四葉の首飾」
「多情佛心」(前、後篇)「凡夫愛」「満潮」今
年竹」「大道無門」「直輔の夢」「おせつか
い」(中篇)等があり、尙この他に選集も
數種あり、「赤き机に凭りて」「白醉亭漫
記」文藝管見等の感想隨筆集もある。
(現住) 神奈川縣鎌倉町西御門六五及び

柴田勝衛

明治二十一年六月四日、仙臺市に生れる。
青山學院高等科卒業後、時事新報記者を
七年間、大正八年讀賣新聞社に入り今日
に至つてゐる。評論「ヘツダ・ガブレルの
研究」(翻譯「女學生」(ストリンドベリ)
「きりす」と傳「(ハビニ)等のほかに、外國
文藝の研究紹介などがある。讀賣新聞編
輯局長。
(現住) 東京市外中澁谷一七

島崎藤村

本名は春樹。明治五年二月十七日、長野
縣西筑摩郡神坂村に生れる。九歳にして
上京、京橋泰明小學校、三田英學校、神
田共立學校に學んだ後、明治二十年明治
學院に入學、同二十四年同校を卒業した。
同二十七年、雑誌「文學界」の創刊に與つ
た。明治二十九年翌三十年は東北學院教
師として仙臺にあり、同三十二年から三
十八年までの七年間を信州小諸で小諸義
塾の教師として過し、同年上京。大正二
年には佛蘭西への旅に上り同五年に歸朝
した。最初の詩集「若葉集」を明治三十年
に出し、「破戒」の脱稿が同三十八年であ
ると云ふ。以後、今日までに發表上梓し

里村欣三

東京市麹町區麹町六ノ一二(電話九段
三〇八二番)
明治三十五年八月、東京に生れる。半生
を放浪の生活に過したと云はれてゐる。
短編集「苦力頭の表情」のほか短篇小説な
どがある。「文藝戦線」同人。
(現住) 東京市外杉並町高圓寺六一一

[シ]

潮山長三*

本名は松村長之助。明治二十五年一月一
日、名古屋市中區矢場町に生れる。名古
屋商業學校に學んだ。名古屋新聞、新愛
知の兩社を通じて十餘年間新聞記者生活
をした。昭和四年夏東京に轉住。長篇「闇
の森心中」の他に大衆讀ものがある。
(現住) 東京市外野方町上沼袋二〇五

十一 谷義三郎*

明治三十年十月二十日、神戸市に生れる。
東京帝大英文科卒業、聚芳閣編輯員だつ
たことがある。短編集「青草」「静物」長篇
小説「あの道この道」のほかに、小説、評

十 菱 愛彦

論等があり、近葉唐人お吉(長篇)は世
に開えてゐる。
(現住) 東京市本郷區駒込千駄木町五〇
明治三十年十一月五日、神戸市に生れる。
京都東山中學校卒業、雜誌記者、特殊小
學教員、會社員、官吏等をしたことがあ
る。戯曲集「結婚への道」小説「第二の處
女期」等がある。
(現住) 東京市外松原村上北澤文化村一
一七一

志賀直哉

明治十六年二月二十日、陸前國石巻町に
生れる。同十八年上京。芝幼稚園、學習
院初等科、中學校、高等科を経て、明治
三十九年東京帝大文科に入つたが、同四
十一年中途退學した。明治四十三年四月
創刊の「白樺」同人になつた。大正二年一
月上梓した「留女」を初めとして、以後小
説の作多く刊行著作の主なるものに、「大
津順吉」「夜の光」「荒絹」「壽々」「暗夜行
路」(前篇)「雨蛙」山科の記憶等があり、
その大部分は「現代日本文學全集」の第二
十四篇「志賀直哉集」に収録されてゐる。
(現住) 奈良市上高畑

た詩、小説、感想、隨筆、紀行、童話頗る多く、その主なるものを挙げれば詩集「一葉舟」「落梅集」「藤村詩集」小説「綠蔭叢書(三篇)」「綠葉集」「春」「長篇」藤村集「家」「長篇」「食後」「微風」「櫻の實の熟する頃」「長篇」「新生」「長篇」「鳥崎藤村篇」「現代長篇小説全集第六卷」「風」「藤村傑作集(第一、二集)」「新選鳥崎藤村集」「鳥崎藤村集(豪華版)」「櫻の實の熟する頃(岩波文庫)」「感想隨筆紀行」「新片町より」「後の新片町より」「千曲川のスケッチ」「平和の巴里」「戦争と巴里」「佛蘭西紀行」「飯倉だより」「春を待ちつゝ」「藤村紀行文(改造文庫)」「藤村感想集(新潮文庫第十一卷)」、その他「藤村全集(全十三卷)」「藤村パンフレット(三輯)」「北村透谷選集(改造文庫)及び童話集などがある。
(現住) 東京市麻布區飯倉片町三三

島田青峰

本名は賢平。明治十五年三月八日、三重縣志摩郡の野村に生れる。早大英文科卒業。永らく國民新聞社にあり學藝部長を勤めてゐた。俳人として聞えてゐるが小説隨筆翻譯などもある。雑誌「土上」編輯。
(現住) 東京市牛込區若松町八一

島村民藏

明治二十一年七月、東京市神田區岩本町に生れる。明治四十二年早大英文科卒業。大正六年同大學文學部講師となり引續き今日に至つてゐる。戯曲「夜叉丸」「清十郎」演劇評論集「近代劇の理論と實際」等の著がある。
(現住) 東京市牛込區早稲田町五五

霜田史光

本名は平治。明治二十九年六月十九日、埼玉縣北足立郡美谷本村に生れる。正則英語學校、アテネ・フランセ等に學んだ。官吏、村役場書記、銀行員、雜誌記者等をしたことがある。詩集「流れの秋」「日本民謡選集」童話集「夢の國」翻譯「十五少年漂流記」その他民謡、詩作、評論、及び戯曲などがあり、近時は多く大衆文藝の作を發表してゐる。
(現住) 東京市外雜司ヶ谷東通六〇八

下村悦夫

明治二十七年二月十六日、和歌山縣新宮町に生れる。二十四歳の春、生活の必要に迫られて某誌に短篇を發表して以來各種の雜誌に執筆す。大衆文藝の作多く、

「下村悦夫集」(現代大衆文學全集第十六卷)の他長篇拾數篇、短篇百五十篇近くある。
(現住) 和歌山新宮町

下村千秋

明治二十六年九月四日、茨城縣稻敷郡朝日村に生れる。縣立土浦中學校、早大英文科卒業。短篇集「刑罰翻譯」「ワレンカ・オレンツ」等のほかに小説の作がある。
(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷八四二

白井喬二

本名は井上義道。明治二十二年九月一日、横濱市に生れる。某私立大學にて政治經濟を學んだ。歴史小説、大衆文藝等の著作多く、短篇集「寶永山の話」長篇「富士に立つ影」等がある。
(現住) 東京市外中野町朝日ヶ丘

白石實三

明治十九年十一月十一日、群馬縣碓氷郡安中町に生れる。早大英文科、東京外國語學校露語專修科卒業。富山房編輯員、東京府立第三中學校教諭の後、永らく博文館編輯部にあつて「寸鐵」その他の編輯

に當つた。長篇「返らぬ過去」短篇集「曠野」「姉妹」「武蔵野順禮」等の著作のほか長篇「多摩物語」その他がある。
(現住) 東京市外代々木初臺五三四

白鳥省吾

明治二十三年二月二十七日、宮城縣栗原郡築館町に生れる。縣立築館中學校を卒業、大正二年早大英文科卒業。詩集「世界の一人」「大地の愛」「樂園の途上」「若き郷愁」「共生の旗」評論集「詩に徹する道」「民主的文藝の先驅」「現代詩の研究」長篇叙事詩「青春の地」「童話「カバン」その他詩、童話の作が多い。「地上樂園」主宰。
(現住) 東京市外高田雜司ヶ谷龜原六一

[ス]

菅忠雄

明治三十二年五月五日、東京市小石川區竹早町に生れる。逗子開成中學校卒業、上智大學中途退學。昭和四年九月まで「文藝春秋」編輯の任にあつた。「正秋」「銅羅」「二つの心理」のほか短篇の作がある。
(現住) 神奈川縣鎌倉町御用邸通

菅原寛

明治二十五年五月二十一日、山形縣寒河江町に生れる。眞宗中學卒業後専ら獨學。新聞記者生活の後、松竹本社囑託として新派更生に當つた。現在は五九郎劇文藝部長。戯曲集「幻の舞踏」「幕物新選集」の著の他に戯曲劇評等がある。
(現住) 東京市外大崎町白金猿町一一一

鈴木氏

明治十八年、仙臺市に生れる。新聞記者、雜誌記者をしたことがある。小説、童話等の作がある。文藝春秋社員。
(現住) 東京市外高田巢鴨代地三三三

鈴木善太郎

明治十六年一月、福島縣郡山に生れる。早大に學んだ。新聞記者生活十餘年の後、外人經營の商會社セールスマンにあり、歐米諸國を遊歴したことがある。短篇集「幻想」「暗示」長篇「山莊の人々」戯曲集「鴉鵲」等のほか「白鳥」「モルナアル」「開かれぬ手紙(同)お互に愛したら(同)」「芝居は眺向き(同)」「ロボット」「チャベック」「動物」(オニール)などの翻譯がある。

(現住) 東京市外北品川一本木三四五
(電話三七五九)

鈴木彦次郎

明治三十一年十二月、東京深川に生れる。盛岡中學校、第一高等學校を経て、東京帝國大學文科卒業。大學時代には川端康成、石濱金作、酒井眞人諸氏等と第六次「新潮」を興した。「文藝春秋」「文藝時代」の同人だつたことがある。小説、戯曲の作がある。「新文學準備俱樂部」編輯。
(現住) 東京市外入新井宿二五五八

鈴木三重吉

明治十五年九月二十九日、廣島市猿樂町に生れる。故夏目漱石門下。東京帝大英文科卒業、成田中學校教師、中央大學講師をしたことがある。大正七年以來、童話童話雜誌「赤い鳥」を主宰した。小説として「短篇集」「瓦」「赤い鳥」「少猫」「女」「千鳥」「桐の雨」「黒血」「金魚」「櫛」「八の馬鹿」長篇「桑の實」「小鳥の巢」等があり、ほかに世界童話集「黃金鳥」以下二十餘冊の著作がある。
(現住) 東京市外高田町上屋敷三五五九

薄田泣菫

本名は淳介。明治十年五月、岡山縣淺口郡連島町に生れる。永らく大阪毎日新聞社員を勤めてゐた。詩集「暮草集」「ゆく春」「白玉姫」「二十五絃」「白羊宮」等のほかに多くの隨筆などがある。
(現住) 兵庫縣西宮市分銅二二三

須藤 鐘一 *

本名は莊一、明治十九年二月一日、鳥根縣能義郡比田村に生れる。明治四十三年早大英文科卒業。永らく博文館編輯部にあり、後、三越呉服店編輯部に入り今日に至る。短篇集「傷める花片」「愛憎」「勝敗」「長篇」「人間哀史」「翻譯」家なき少女」等がある。「文藝道」主宰。
(現住) 東京市外大井町四四八四

諏訪 三郎 *

本名は半澤成二。明治二十九年十二月三日、福島縣安積郡赤津村にて生れる。中央公論社、中外商業新報社の記者をしたことがある。「文藝時代」の同人だつた。「貧しき郊外の街より」「労働祭の日の事」等の小説の作がある。
(現住) 千葉縣市川町平田二二七

陶山 篤太郎

明治二十八年四月四日、神奈川縣川崎市に生れる。横濱商業學校卒業。ホテルの番頭をしたことがある。詩集「銅牌」のほかに詩作がある。昭和三年九月社會民衆黨候補にて川崎市會議員に當選ついで同副議長に選まれた。
(現住) 川崎市砂子町一ノ九

[七]

關口 次郎 *

本名は二郎。明治二十六年六月十六日、福井縣敦賀町に生れる。郷里の小學校を卒へた後、京都府立第一中學校、第一高等學校を経て、東京帝大獨逸文科卒業。大阪朝日新聞に二年、東京朝日新聞に三年の記者生活をした。「人間」の新進作家號に書いた戯曲「母親」が出世作であると云はれてゐる。その他に戯曲「狐」小説「狸之助の話」「冷たい頭」などの作がある。
(現住) 東京市外西大久保九

瀬戸 英一 *

明治二十五年七月二十一日、大阪市北區曾根崎新地に生れる。新聞記者をしたこ

千家 元麿 *

明治二十一年六月、東京麴町に生れる。府立第四中學校を経て應義塾大學に學んだ。詩集「自分は見た」「虹」「夢」「野天の光」長篇抒情詩「昔の家」等の詩作がある。
(現住) 東京市外落合町葛ヶ谷六四〇

[ソ]

相田 隆太郎

明治三十二年九月、山梨縣北巨摩郡上手村に生れる。山梨師範學校中途退學。世界宗教十六講の著のほかに評論及び紹介がある。
(現住) 東京市外馬込町字出穂山三四八二

相馬 御風

本名は昌治。明治十六年七月十日、新潟縣西頸城郡糸魚川町に生れる。明治三十

九年早大文科卒業。永く「早稻田文學」記者、早大講師をしてゐたが、大正五年郷里に歸住し今日に至る。「黎明期の文學」「自我生活と文學」「大愚良寛」「良寛和尚詩歌集」「愚庵和尚その他」「砂上漫筆」「雜草苑」「田園春秋」「凡人淨土」「茶と良寛と芭蕉」「尉山雜記」等の著作がある。
(現住) 新潟縣糸魚川大町五二

相馬 泰三

本名は洪藏。明治十八年十二月、新潟縣中蒲原郡庄瀬村に生れる。早大文科中途退學。新聞記者、雜誌記者などをしたことがある。短篇集「夢と六月」「野の咲笑」「新選相馬泰三集」「長篇」「荊棘の路」「愛慾の垢」のほかに小説の作多く、また童話集「陽炎の空」がある。
(現住) 神奈川縣大磯町神明町

[夕]

高垣 眸 *

明治三十一年一月二十日、尾道市に生れる。岡山縣矢掛中學を経て、早大英文科卒業。大正九年より同十一年まで新國劇脚本部にあつて處女作「日本人」上演、罪

と罰「カレの市民」その他翻譯劇の演出擔當。「龍神丸」「豹の眼」「銀蛇の窟」「夜光珠綺譚」「曼珠沙華」その他少年少女小説十數篇がある。
(現住) 東京府下青梅町仲町三二一

高倉 輝

明治二十四年、高知縣幡多郡七郷村に生れる。大正五年、京都帝大英文科卒業、同九年まで同大學の囑託をしてゐた。「女人焚殺」「海峡の秋」「長谷川一家」「阪」等の小説、戯曲の作がある。
(現住) 上田市別所温泉 氣付

高桑 義生 *

明治二十七年八月二十九日、北海道函館に生れる。曾て「青年文壇」「新小説」の記者をしたことがある。大衆文藝の創作に従事して九年、「黒髮地獄」「快俠七人組」「白蟻秘門」「高桑義生集」(現代大衆文學全集第二七卷)の著その他がある。
(現住) 東京市外目黒三田三六

高須 芳次郎

かつて梅溪の號を用ひてゐた。明治十三年四月十三日、大阪市船場に生れる。明治三十八年、早大英文科卒業。それより

前、十九歳の時に「新聲」(新潮の前身)の記者をしたことがある。早大卒業後、國民新聞、東京毎日新聞、二六新報の記者生活をした。「平家の人々」「近松の人々」「現代文學十二講」「日本思想十六講」「東洋思想十六講」「近代文藝史論」を始め、評論、史論、隨筆等がある。
(現住) 東京市牛込區南段町五七

高田 義一郎 *

明治十九年六月二十八日、滋賀縣栗太郡草津町に生れる。醫學博士。大正十三年筆禍のため千葉醫大教授を辭任以來筆硯に親しむ。「犯罪鑑定夜話」「關性術」「世相表裏の醫學的研究」「高田義一郎集」(現代エウモア全集第一二卷)等の著作がある。
(現住) 東京府下國立大學町西三條通第三七四號(電話國立五二)

高田 保 *

明治二十八年三月二十八日、茨城縣土浦町に生れる。早大文科卒業、大正十三年九月、始めて戯曲「天の岩戸」を發表し、以後作家生活に入った。戯曲集「人魂黃表紙」のほかに戯曲、隨筆などがある。「近代生活」同人。
(現住) 東京市赤坂區臺町七七 根岸方

(電話青山三〇三〇)

鷹野 つぎ*

本名は次。明治二十三年八月十五日、濱松市尾張町に生れる。濱松高等女學校卒業。短篇集「悲しき配分」「ある道化役」感想集「眞實の鞭」の著のほかに、小説、隨筆などがある。

(現住) 東京市外世田ヶ谷太子堂三五〇

高橋邦太郎*

明治三十一年九月五日、東京淺草に生れる。京華中學校卒業、東京外國語學校佛語科卒業。東京帝大佛文科に學んだ。大正十三年築地小劇場創設に當つて文藝部員となり今日に及んでゐる。翻譯「降誕祭の夜(ポオル・クロオデル)」「青春の夢(ラヌヌテイヌ)」「狼(ロマン・ロオラン)」「アルセエヌ・ルバン(モオリス・ルブラン)」「生れた家(ジャツク・コボオ)等及び「世界文學全集」第三十卷に収録した「椿姫(デヌマ・フェイス)」「海の義賊(世界大衆文學全集第廿九卷)の譯のほかに、戯曲「榎本武揚」を初め小説、戯曲、隨筆、海外文藝紹介などがある。

(現住) 東京市下谷區上野花園町一四

高橋新吉

明治三十三年、伊豫に生れる。「ダダ」の著のほかに、詩、小説等がある。

(現住) 東京市外大崎町上大崎七七二淺野方

高濱虚子

本名は清。明治七年二月、松山市に生れる。第三高等學校中途退學。長篇小説「俳諧師」「朝鮮」短篇集「鶏頭」「凡人」「道」等のほかに、俳句に關する著作は二十餘冊の多き上つてゐる。俳句雜誌「ホトトギス」主幹。

(現住) 神奈川県鎌倉町原ノ臺

高群逸枝

本名は橋本逸枝。明治二十七年一月、熊本縣下益城郡豐川村に生れる。熊本女子師範學校、熊本女學校中途退學。詩、評論があり、著作に「私の生活と藝術」「放浪者の詩」「日月の上に」「美想曲」「妾薄命」胸を痛めて」「東京は熱病にかゝつてゐる」などがある。

(現住) 東京市外上荻窪二六九

高村光太郎

明治十六年三月、東京下谷に生れる。彫刻家高村光雲氏の息。東京美術學校彫刻科卒業、後、數年間歐米に遊んだ。詩集「道程」等のほかに、「印象主義の思想と藝術」翻譯「ロダンの言葉」などの著、及び多くの詩作がある。

(現住) 東京市本郷區駒込林町二五

高安月郊

本名は三郎。明治二年二月十六日、大阪市瓦町に生れる。明治二十六年に初めてイブセンを我が國に傳へた。同二十八年の處女作「重盛」をはじめとして、「櫻時雨」「平賀源内」「江戸城明渡」その他の戯曲及び詩集、評論、翻譯「リヤ王」(シェクスピア)などがある。

(現住) 兵庫縣東蘆屋井尻

瀧井孝作*

折柴の號がある。明治二十七年四月、岐阜縣高山町に生れる。大正三年上京、俳句雜誌「海紅」の編輯に従事すること五年、時事新報記者一年、「改造」記者一年半の經歷がある。短篇集「妹の問題」「良人の貞操」長篇「無限抱擁」の著のほかに、小説、俳句の作がある。

(現住) 奈良市上高畑町

武田麟太郎

明治三十七年、大阪に生れる。京都三高に學んだ。昭和二年上京、「辻馬車」「プロレタリア藝術」「大學左派」等の同人であつた。數種の短篇小説及び評論がある。

(現住) 東京市麹町區内幸町一商工ビル 映書往來社

武野藤介*

本名は眞壽太。明治三十二年四月、岡山市萬成町に生れる。縣立岡山第一中學校卒業。早大露文科中途退學。中央新聞文藝部記者をしたことがある。「現代作家表現の研究」長篇「男犯」のほかに小説、評論、隨筆、及び多くのコントがある。

(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷天沼四六九

武林無想庵

本名は盛一。明治十三年二月、北海道札幌に生れる。東京帝大文科出身、佛蘭西から歸朝後、専ら創作に従事したが、再び佛蘭西に遊び、昭和四年五月一旦歸朝したが三度渡佛した。「結婚禮讚」「文明病患者」の著作、「サフォ」「サーニン」等の翻譯のほか、小説、隨筆がある。

(現住) 巴里

田島淳*

明治三十一年一月十九日、横濱市野毛町に生れる。早大英文科卒業。「龍祇」「酒みづき」「歳末挿話」「堤」「夕立」等の作がある。

(現住) 横濱市小港町九八

多田不二*

明治二十六年十二月、茨城縣結城町に生れる。栃木縣立眞岡中學校卒業、金澤第四高等學校を経て、東京帝大哲學科(心理學專攻)を卒業。大正九年時事新報記者となり、同十三年退社後、雜誌「愛の泉」編輯に當つた。詩誌「帆船」を経営主宰したことがある。詩集「惱める森林」「夜の一部分」のほかに詩作、評論などがある。

(現住) 東京府荏原郡東調布町下沼部七〇五

立野信之

明治三十六年千葉縣五井町に生れる。中學校を中途退學。標的になつた彼奴「泥濘」「軍隊病」「赤い空」「どぶいたち」「豪雨」等の小説がある。戦旗同人。

(現住) 東京市外落合町葛ヶ谷一五、片

岡鐵兵方

田中純*

明治二十三年一月、廣島市に生れる。廣島中學校、神戸關西學院神學部卒業、早大英文科卒業。長篇「闇に哭く」「妻等のほかに、小説、評論、隨筆がある。曾て「人間」同人であつた。

(現住) 神奈川県高座郡藤澤町鶴沼

田中貢太郎*

明治十三年三月、高知縣長岡郡三里村に生れる。郷里の高等小學校卒業後はすべて獨學。船大工、小學校教員、新聞記者等をしたことがある。說話集「黑影集」「燈臺鬼」「戀愛鬼話」「春宵詩話」「五月雨夜話」「月の夜話」「切支丹屋敷」「怪談」「奇語哀語」等のほかに、多くの大衆文藝ものなどがあり、「怪談全集(上下二卷)」は近業である。

(現住) 東京市外碑文町碑文谷一五四六

田中總一郎*

明治三十二年十一月に生れる。第三高等學校を卒業し、東京帝大文學部美學科に學んだ。戯曲集「午前八時」のほかに戯

曲、翻譯などがある。
(現住) 兵庫縣西宮市外夙川甲南莊
(電話大宮一九六三)

谷崎潤一郎*

明治十九年七月二十四日、東京日本橋區
鶴殿町に生れる。府立第一中學校卒業、
第一高等學校を経て、明治四十一年東京
帝大國文科に入ったが、翌四十二年九月
退學。同年十一月、「新思潮」に「刺青」
を發表したが、これが處女作であると云
はれてゐる。尙ほ大正九年十年頃には、
大正活映株式會社の脚本部顧問として、
映畫劇「アマチュア俱樂部」の處女作を初
め「葛飾砂子」(泉鏡花原作)「雛祭の夜」
「蛇性の婦」等の脚色撮影がある。また大
正七年と同十五年の兩度、支那に遊んだ。
「刺青」以後多くの小説戯曲を發表した。
「刺青」「惡魔」「戀を知る頃」「お艶殺
し」「お才と己之助」「鮫人」「愛すればこ
そ」「神と人との間」「痴人の愛」「人魚の嘆
き」「近代情痴集」「潤一郎犯罪小説集」
「谷崎潤一郎集」(日本探偵小説集第五卷)
「潤一郎全集」評論感想隨筆雜文集「饒舌
録」その他の著作がある。
(現住) 兵庫縣武庫郡本山村岡本好文園
二號

谷崎精二*

明治二十三年十二月、東京日本橋區鶴殿
町に生れる。谷崎潤一郎氏の令弟。早大
英文科卒業。長短篇の小説「離合」「結婚
期」「戀愛摸索者」「生と死の愛」「蒼き夜と
空」「地に頼つて」「静かな世界」「水のほ
とろ」「谷崎精二篇」(現代長篇小説全集第
二二卷)等の著及び翻譯などがある。早
大講師。
(現住) 東京市牛込區喜久井町二一

田中西男*

本名は喜三郎。明治十三年二月、東京市
下谷區黒門町に生れる。東京法學院(中
央大學の前身)卒業。多くの小説、戯曲
及び劇評がある。
(現住) 東京市外池上町石川上ノ臺一八
七

田山花袋

本名は綠彌。明治四年十二月上州館林町
に生れる。館林小學校を卒へ、十六歳の
時に上京、語學を二三の私學で學んだ。
永く博文館編輯局にあつて「文章世界」を
編輯してゐた。「妻」「生」「縁」「清剛」「田
舎教師」「髮」時は過ぎ行く」「一兵卒の銃

[子]

殺「殘雪」合歌の花「或る僧の奇蹟」「源
義朝」「田山花袋篇」(明治大正文學全集第
廿二卷)「田山花袋篇」(現代長篇小説全集
第一七卷)等のほかに、多くの小説、紀
行、隨筆などの著作がある。
(現住) 東京市外代々木山谷一三二

中條百合子

明治三十二年二月十三日、東京市小石川
區原町に生れる。本郷誠之小學校、お茶
の水高等女學校卒業。米國に遊んだ事がある。小説の著作に「伸子」「一つの芽生」
その他がある。且下露西亞に遊學中。
(留守宅) 東京市本郷區駒込込込町二一

近松秋江*

本名徳田浩司。明治九年五月四日、岡山
縣和氣郡藤野村に生れる。明治二十五年
岡山縣立中學校に入學したが、翌二十六
年十二月退學。慶應義塾、國民英學會、
二松學舎等に學んだ後、明治三十一年九
月、四度目の上京をなし東京專門學校(早
大の前身)に入學、英文科を卒業した。博
文館の「中學世界」編輯、「早稻田文學」編

[ツ]

塚原健二郎

明治二十八年二月十六日、長野縣埴科郡
東條村に生れる。商業學校中途退學、正
則英語學校に學んだ。小説「ある迷宮の
舞踏者」等の作がある。
(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷小山八
三

辻潤

明治十八年十月四日、東京市淺草區藏前
片町に生れる。國民英學會出身、小學校
教師をしたことがある。「自我經」「スチ
ルナア」「天才論」「ロンブロソオ」「阿片溺
愛者の告白」「ヂクイニシイ」「一青年の告
白」「ジョウヂ・ムウア」等の翻譯、隨筆感
想集「浮浪漫語」で「すべら」等のほか隨筆
などがある。讀賣新聞特置員として巴里
に約一年遊んだことがある。
(現住) 東京市外大岡山一二七

土井晩翠

本名は林吉。明治四年十月、仙臺市に生
れる。東京帝大英文科卒業。永く第二高

遅塚麗水

本名は金太郎。明治元年十二月、静岡縣
沼津に生れる。別に學歴はない。多くの
小説、紀行文集があり。夙より都新聞
記者となり、今日に及んでゐる。
(現住) 東京市外澁橋町角管一四八

茅野蕭々

明治十六年三月、長野縣上諏訪町に生れ
る。東京帝大獨文科卒業。第三高等學校

茅野雅子

明治二十三年、大阪市にて生れる。日本
女子大學校卒業、明治四十年茅野蕭々氏
に嫁した。歌集「金沙集」その他多くの作
歌隨筆などがある。先頃、夫君歸朝の前
歐洲に遊んだ。
(現住) 東京市芝區三田綱町一

千葉龜雄*

曾て江東と號した。明治十一年九月二十
四日、山形縣酒田町に生れる。仙臺第一
中學、早大歴史科を何れも中途退學。國民
英學會卒業。「文庫」「新聲」「日本及日本
人」等の雜誌記者生活の後、新聞記者と
なり、日本新聞、國民新聞、時事新報、
讀賣新聞、大阪毎日新聞を経て、現に東
京日日新聞社顧問。多くの外國文學の紹
介、評論などがある。
(現住) 東京市外大井町庚申塚四八四二

等學校教授であつたが、先頃辭任した。詩集「天地有情」「晩翠詩集」その他がある。

(現住) 仙臺市本荒町二一

土田 杏村

本名は茂。明治二十四年一月、新潟縣佐渡郡新穂村に生れる。東京高等師範學校博物學部卒業、京都帝大文學部哲學科卒業。同大學院にあつて哲學、生物學を専攻した。「文化主義原論」「啞の如くに語る」「華嚴哲學小論」「マルクス思想と現代文化」「象徴の哲學」「文明思想と新哲學」「生物哲學」「文學論」「日本支那現代思想の研究」「國文學の哲學的研究」「戀愛の諸問題」「現代哲學概論」等の著作がある。

(現住) 京都市新町頭

坪内 士行

明治二十年八月十六日、名古屋市に生れる。明治四十二年早大英文科卒業、歐米に約七年間遊學し、歸朝後、早大に教鞭を執つた。後、俳優となり、寶塚音樂學校の顧問となつてゐたが、先頃辭任した。「モリエール全集」「バリー傑作集」「イアセン傑作集」「なすな戀」「金髪のもつれ」「旅役者の手記」「西洋芝居土産」「新

歌舞劇十二集」などの譯者がある。目下關西大學講師。「國民劇場」主宰。

(現住) 大阪府豊能郡箕面村櫻ヶ丘

坪内 逍遙

本名は雄藏。安政六年五月、愛知縣加茂郡太田村尾張代官所に生れる。東京帝大政治科卒業。永らく早大教授をしてゐた。また文藝協會を興して新劇の勃興に力を盡した。多くの著作があり、「小説神髓」「當世書生氣質」「桐一葉」「牧の方」「香手鳥狐城落月」「名残の星月夜」「義時の最後」「法難」「新樂劇」「新曲浦島」「新曲かぐや姫」「坪内逍遙集」(日本戯曲全集第卅二卷)「我、ヘジエント劇」「英文學史」「逍遙選集」「シエークスピア研究録」「良寛と子守」「現代ユウモア全集」の「坪内逍遙集」。「新日本少年文學全集」の第一卷として「坪内逍遙集」などはその主なるものであり、別にシエークスピア全集の翻譯がある。文學博士。

(現住) 東京市牛込區余丁町一一

坪田 讓治

明治二十三年、岡山縣御津郡に生れる。大正四年、早大英文科卒業。短篇集「正太の馬」のほか小説、コント、童話等

の作がある。

(現住) 東京市外高田町狐塚八六六

津村 京村

本は京太郎。明治二十六年、兵庫縣明石に生れる。小學校を卒業の後、すべて獨學。長篇小説「結婚地獄」戯曲集「死の接吻」その他の著作がある。雑誌「人と藝術」を主宰したことがある。

(現住) 東京市外代々木初臺六〇三

鶴田 知也

明治三十五年二月十九日、小倉市に生れる。小學校中學校を卒へて上京、東京神學社神學校を中途退學後放浪生活に入り、百姓、馬車曳き、職工等轉々、名古屋にて組合運動に従事。數種の短篇小説を「文藝戦線」その他に發表した。現に「文藝戦線」同人。

(現住) 東京市外杉並町高圓寺六一一文藝戦線社氣付

[ト]

戸川 貞雄

明治二十七年十二月二十五日、東京に生

れる。早大英文科卒業、雑誌記者をしてゐたことがある。「早稲田文學」に發表した「蠢く」を出世作とし、以後、小説、評論等を發表す。短篇集「蠢く」「春晝」長篇小説「女性の復讐」のほか長篇「人柱」などの作がある。

(現住) 神奈川縣中郡平塚新宿一五〇四

戸川 秋骨

本名は明三。明治三年十二月、熊本縣玉名郡岩崎村に生れる。明治學院、東京帝大英文科出身。「エマソン論文集」「哀史」「デカメロン」その他の翻譯のほかに、「戸川秋骨集」(現代ユウモア全集第二卷)隨筆集「文鳥」などがある。慶應義塾大學教授。

(現住) 東京市外井荻村下荻窪三七一

土岐 善麿

もと哀果の號を用ひた。明治十八年六月八日、東京市淺草區松葉町に生れる。早大卒業後、讀賣新聞社に入り後、東京朝日新聞記者となり今日に及んでゐる。目下は同新聞社調査部長。短歌の作多く、また夙より日本式ローマ字普及運動にも參加してゐる。「土岐哀果集」「空を仰ぐ」「鶯の卵」「朝の散歩」「作者別萬葉全

集」作者別萬葉以後「春歸る」「自選歌集・空を仰ぐ」等のほかにローマ字宣傳文書十餘種がある。先頃歐洲を一巡して歸つた。

(現住) 東京市外目黒町下目黒八〇四

徳田 秋聲

本名は末雄。明治四年十二月、金澤市横山町に生れる。第四高等學校を中途退學して上京、故尾崎紅葉門下となつた。小説の作頗る多く、主なる著作として、「足跡」「微」「欄」「あらくれ」「奔流」「秘める戀」「何處まで」「斷崖」「新選徳田秋聲集」(現代日本文學全集)第一八卷として「徳田秋聲集」(明治大正文學全集)第二十五卷として「徳田秋聲篇」(現代長篇小説全集第十卷として「徳田秋聲篇」等があり、「元の枝へ」(大正十五年九月改造所載)の一篇は近時文壇の視聽を蒐めた小説である。

(現住) 東京本郷區森川町一南堺裏二一〇

徳永 直

明治三十二年一月十日、熊本市黒髮町に生れる。黒髮小學校卒業。十三歳より印刷工となり中途、電氣職工、新聞記者等

をしたこともあるが、現在は印刷植字工。「太陽のない街」「能率委員會」「何處へゆく?」等の作がある。「戦旗」同人。

(現住) 東京市外西巢鴨宮仲二五〇〇

富田 碎花

本名は戒治郎。明治二十三年十一月、盛岡市に生れる。日本大學出身。詩歌の作多く、歌集「貧しき愛」「詩集「末日頌」「地の子」「富田碎花集」のほかに「民主主義の方へ」「カーペンター」「草の葉」「ホキットマン」の翻譯などがある。

(現住) 兵庫縣武庫郡蘆屋茶屋蘆屋

豊島 與志雄

明治二十三年十一月二十七日、福岡縣朝倉郡福田村に生れる。東京帝大佛文科卒業。小説「反抗」「人間繁榮」「狐火」「生あらば」「恩人」「新選豊島與志雄集」等の著のほかに「レ・ミゼラブル」「ユーゴー」「ジャン・クリストフ」「ロマン・ローラン」等の翻譯がある。東京帝大文學部講師。

(現住) 東京市本郷區千駄木町五七(電話小石川二六〇五)

[ナ]

内藤 振策

明治二十二年八月二十四日、長岡市に生れる。歌集「旅愁」の著のほか詩歌の作がある。「抒情詩」社主宰。

(現住) 東京市小石川區御殿町三二

内藤 辰雄

本名は惠吉。明治二十六年二月十一日、岡山縣淺口郡河内村に生れる。縣立商業學校中途退學。永き自由労働者等の體験がある。舊「黒煙」舊「祖國」同人であつた。長篇「空に指して語る」のほか短篇隨筆などがある。「労働藝術家」主宰。

(現住) 東京市外長崎町地蔵堂九一七

直木 三十五

本名は植村宗一。明治二十四年大阪に生れる。早大出身。曾て「人間」「苦樂」などの編輯に當つたことがある。多くの隨筆のほか、「仇討十種」を初め大衆文藝の作がある。

(現住) 東京市麴町區紀尾井町三(電話九段二二一九)

永井 荷風

本名は壯吉。明治十二年十二月三日、東

京市小石川區金富町に生れる。東京英語學校、高等師範附屬尋常中學校を経て、外國語學校支那語科に學んだが、籍を置いたと云ふに過ぎない。明治三十六年渡米同四十二年歸朝までの間、米、佛各地に遊び、公使館員、銀行員をしたことがある。同四十三年、慶應義塾文科の教授となり、かたはら「三田文學」のために力を注いだ。大正五年、同教授を退き、同時に「三田文學」の編輯も辭した。明治三十二年一月「よしあし草」に處女作「おぼろ夜」を發表して以來、小説の作頗る多く隨筆、翻譯などもある。主なる著作物として「野心」「地獄の花」「夢の女」「女優ナナ」「あめりか物語」「ふらんす物語」「荷風集」「すみだ川」「牡丹の客」「紅茶の後」「新橋夜話」「珊瑚集」「散柳窓夕榮」「夏委」「荷風傑作鈔」「日和下駄」「腕くらべ」「江戸藝術論」「おかげ鐘」「歡樂」「秋のわかれ」「雨瀟瀟」「二人妻」「麻布襟記」「荷風全集」「永井荷風集」などがある。

(現住) 東京市麻布區市兵衛町一ノ六

中河 與一

明治三十年二月二十八日、香川縣綾歌郡坂出町に生れる。早大英文科中途退學。舊「文藝時代」同人であつた。「地獄」「米

る舞踏場」「黒い影」「午前の殺人」「木枯の日」その他小説の作がある。

(現住) 東京市外千歳村祖師ノ谷

仲木 貞一

明治十九年二月十一日、金澤市に生れる。早大英文科卒業。鐵道院員、雜誌記者、新聞記者などをしたことがある。また日本大學講師、文部省囑託だつた。戯曲「囃」「飛行曲」「柿實る村」「盜賊と首」その他の作がある。現に東京中央放送局社會教育課長。

(現住) 東京府下岩淵町稻村字極ノ木二ノ二〇三

中里 介山

明治十四年、東京に生れる。大衆文藝の作多く、「大菩薩峠」は最も世に著はれ、ほかに「黒谷夜」「義朝の子」等の著がある。

(現住) 東京府下高尾妙音谷

中田 信子

明治三十五年十二月、山形市に生れる。詩集「處女の掠奪者」のほか詩作がある。

(現住) 東京市外大森新井宿皿沼五二二

永田 龍雄

明治二十三年九月二十日、東京に生れる。東京外語卒業。始め實業家故村井吉兵衛の秘書となり、後露西亞に遊び歸朝して帝國劇場文藝部員となり大正十二年九月關東大震災と同時に辭して再び外遊、歸朝後文筆生活に入った。劇及舞踊藝術、詩、音樂に關する多くの著作がある。

(現住) 東京市麴町區飯田町二ノ六

中塚 一碧樓

本名は直三。明治二十年九月、岡山縣淺口郡玉島町に生れる。俳句の作多く「海紅」を主宰してゐる。

(現住) 岡山縣淺口郡玉島町

中戸 川吉

明治二十九年五月、北海道釧路に生れる。東京開成中學、逗子開成中學、京北中學校を轉々した後、明治大學に入學したが中途退學。曾て「新小説」編輯、「隨筆」編輯に當つたことがある。長篇小説「反射する心」「北村十吉」短篇集「イボタの蟲」「縁なき衆生」「友情」その他がある。

(現住) 東京市外巢鴨宮下一八七九(電話大塚九二八)

中西 伊之助

明治二十六年二月七日、京都宇治に生れる。學歷と云ふほどのものはないといふ。時事新報記者をしてゐたことがあり、後、労働運動に加つた。長篇小説「緒土に芽ぐむもの」「汝等の背後より」「老農喜兵衛の死」「一人生記録」短篇集「死刑囚と其裁判長」或る農夫の家等の著作がある。

(現住) 東京市外淀橋町柏木六五六

中西 悟堂

明治二十八年十一月十六日、金澤市長町に生れる。東京京橋文海小學校、天台宗中學、曹洞宗中學卒業後、二三の宗教大學に學んだ。鳥根縣能義郡長樂寺、松江市普門院の各住職をし、松江市の松陽新報記者となり、後、詩作生活に入った。歌集唱名詩集「東京市」「花順禮」「武藏野」小曲集「かはたれの花」その他の著がある。

(現住) 東京市外高田町雜司ヶ谷七一六

中野 重治

明治三十五年一月二十五日、福井縣坂井郡高根村一本田に生れる。東京帝大卒業。「藝術」に關する走り書「覺え書」の著の他

に小説、詩、評論等がある。「戦旗」同人。

(現住) 東京市外千歳村島山一七七〇

中原 綾子

明治三十一年二月十六日、長崎市に生れる。歌集「眞珠貝」などがある。

(現住) 東京市外下澁谷七一七

永見 徳太郎

明治二十三年八月五日、長崎市銅座町に生れる。大阪商業學校に學んだ。戯曲「和冠」のほか長崎に關する研究紹介二三の著がある。

(現住) 東京市外高井戸町中高井戸三八

中村 吉藏

春雨の號を用ひたことがある。明治十年五月十五日、石見國津和野町に生れる。津和野小學校を卒業、山口町の山口學校鴻城義塾に學び、後、静岡にて公證人役場の筆生、大阪にて爲替貯金管理所書記補をした後、明治三十二年上京、廣津和郎氏の家庭教師として廣津柳浪氏方に寄寓、早大に通學し同三十六年同大學を卒業した。これより前、同三十四年に「大阪毎日新聞」の懸賞に應募して小説「無花果」が當選した。同三十九年渡米、プリ

ストン大學、コロンビヤ大學に學び、歐洲を経て同四十二年歸朝した。同四十四年、文藝協會のイブセン劇「人形の家の演出を擔當したのを初めとして、大正二年より同八年藝術座解散に至るまで、同座のために努力した。歸朝後の作品は殆んど戯曲ばかりで、その主なるものとしては「剃刀」「飯」「眞人間」「爆發」「淀屋辰五郎」「白隠和尚」「井伊大老の死」「大鹽平八郎」「錢屋五兵衛」「地震」「原始時代」「牛と鬮ふ男」「無籍者」「道化役者」「獅子に喰はれた女」「星亨」「鬼ヶ島から来た男」等何れも上演された。ほかにイブセン劇の翻譯「三三」「最近歐米劇壇」「イブセン評論」「吉藏戯曲集」等の著がある。早大講師。イブセン會「演劇研究」主宰。
(現住) 東京市外巢鴨宮仲一九六九

中村憲吉

明治二十二年一月、廣島縣雙三郡布野村に生れる。東京帝大法科卒業。歌集「馬鈴薯の花」「林泉集」しがらみ等がある。
(現住) 廣島縣雙三郡布野村

中村星湖*

本名は將爲。明治十七年二月、山梨縣南都留郡河口村に生れる。明治四十年、早

大文科卒業。長篇小説「少年行」「影」「美貌」「かくれ沼」短篇集「半生」「星湖集」「漂泊」「女のなか」「失はれた指環」等のほか「月光」「死の如く強し」「ボブライ夫人」「眞心」の翻譯などがある。昭和三年五月渡歐、佛蘭西に遊學し同四年六月歸朝した。
(現住) 東京府下井荻村上井草一四五六

中村白葉

本名は長三郎。明治二十三年十一月二十三日、名古屋市西洲寄町に生れる。名古屋市立商業學校を経て、東京外國語學校露語科を卒業した。外語在學中に米川正夫氏等と共に雑誌「露西亞文學」を刊行した。鐵道官吏、「中央文學」編輯、新聞記者、露西亞貿易商館番頭、オムスク政府通報局囑託等をした。文學上の仕事は主として露西亞文學の翻譯であり、「罪と罰」「アンナカレーニナ」「小悪魔」「サアニン」「現代のヒーロー」「復活」その他がある。日本電報通信社員。
(現住) 東京市外駒澤新町四三一

中村正常

明治三十四年十一月六日、東京小石川區指ヶ谷町に生れる。本郷區誠之小學校、

京北中學校を卒業後、第七高等學校に學んだ。岸田國士の門に入り、「悲劇喜劇」の編輯に従事した。戯曲數種の作あり「マカロニ」はその代表作である。
(現住) 東京市小石川區指ヶ谷町五七

中村武羅夫*

明治十九年十月、北海道空知郡岩見澤町に生れる。約二十年前上京、「新潮」記者となり今日に及んである。嘗て「不同調」を主宰した。長篇小説の作にして刊行されたもの二十種ほどがあり、主なるものとしては「悪の門」「獸人」「渦潮」「群盲」「緑の春」「女人群像」「處女」「女王」「夜の潮」「蒼白き薔薇」等、ほかに短篇小説、評論、隨筆なども多く、「文壇隨筆」の著がある。「新潮」主幹。
(現住) 神奈川縣辻堂(電話辻堂二八)

中本たか子

明治三十六年十一月十九日、山口縣豊浦郡角島村に生れる。縣立山口高女卒業、下關市及び山口町にて四年間小學校教員を勤め昭和二年上京。アポロの葬式「曲玉」新聞紙が作った海峽「赤」等の短篇及び評論がある。
(現住) 東京市外龜戸町七丁目二二四

長與善郎*

明治二十一年八月六日、東京市麻布區宮村町に生れる。學習院を経て、帝大英文科に入ったが中途退學。曾て「白樺」同人であつた。「盲目の川」「項羽と劉邦」「頼朝」「夜の戯曲」「春田の小説」「竹澤先生と云ふ人」「二人旅する者」その他の戯曲小説がある。
(現住) 東京市外杉並町高圓寺五二五

中山楠雄*

本名は田中英一。明治二十三年十一月二日生れる。明治大學中途退學。「演藝畫報」創刊當時から大正十年まで同記者をし、後、「新演藝」「萬朝報」記者を経て、目下東京日日新聞演藝記者を勤めてゐる。戯曲「愛人」のほか演劇についての隨筆がある。
(現住) 東京市外寺島町一三四五

並木秋人

本名は三島一。明治二十六年六月二十七日、福島縣安達郡石井村に生れる。農夫、會社員、新聞記者などをしたことがある。歌集「種明」「菓葉の卵」等の著作がある。短歌雜誌「常春」主宰。

南江二郎*

(現住) 東京市外松澤村松原六四牧野邸
明治三十五年四月三日、京都府南桑田郡龜岡町に生れる。早大、文化學院本科を何れも中途退學。詩集「原始と文明」の中間に快える者「南枝の花」戯曲集「悪戯の城」評論集「人形劇の研究」翻譯「イエーツ舞踊詩劇集」その他の著作がある。
(現住) 京都府龜岡町宇河原町(電話龜岡九)

南部修太郎*

明治二十五年十月十二日、仙臺市に生れる。東京芝中學校卒業、大正六年慶應義塾大學文科卒業。「三田文學」編輯に従つてゐたことがある。短篇小説集「修道院の秋」「湖水の上」「若き入獄者の手記」「鳥籠」長篇小説「返らぬ春」隨筆集「過ぎゆく日」等の著のほか、小説、評論、隨筆などがある。
(現住) 東京市麻布區新龍土町一二(電話青山四五一八)

榎崎勤

明治三十四年十一月七日、山口縣萩に生れる。京城中學校出身。數種の小説、戯

成瀬無極

本名は清。明治十七年一月、東京に生れる。第一高等學校を経て、東京帝大獨逸文科卒業。慶應大學後科教授から京都に赴任、第三高等學校教授兼京都帝大文學部助教となり、大正十年海外に留學、同十二年末に歸朝した。戯曲小説集「極光」小品集「東山の麓より」「近代浪漫主義」「東山夜話」「夢を作る人」等の著がある。
(現住) 京都市上京區岡崎法勝寺七二

(二)

新居格*

明治二十一年三月九日、徳島縣撫養町に生れる。第七高等學校を経て、大正四年東京帝大法科(政治科)卒業。讀賣新聞、大阪毎日新聞、東京朝日新聞記者をしたことがある。もと「明星」「解放」文藝批評の同人。多くの評論、隨筆、及び小説などがあり、著作に小説「月夜の喫煙」隨筆「季節の登場者」「近代明色」及び「近

代心の解剖がある。「近代生活」同人。
(現住) 東京市外杉並町高圓寺八一

新開 良三

山形市に生れる。東京帝大獨文科卒業。
「ハーゲマンの舞臺藝術」演劇評論のほかに著作二三、翻譯、紹介などがある。
曾て獨逸に留學した。學習院教授。
(現住) 東京市小石川區大塚坂下町七〇

西川 勉

明治二十七年六月三十日、愛媛縣宇摩郡金田村に生れる。早大英文科卒業。雜誌記者、新聞記者をしたことがある。「純正童話講話」メテリリンク童話集「母を尋ねて三千里」等の譯著のほかに詩作、童話、評論等がある。「聯想詩派」主宰。
(現住) 東京市外西巢鴨町宮仲二七五八

西宮 藤朝

明治二十四年十二月七日、秋田縣仙北郡角館町に生れる。早大英文科卒業。「新詩歌論講話」「現代哲學思潮大系」等の著のほかに評論、翻譯などがある。早大講師。
(現住) 東京市外田端五五

西村 陽吉

諸の作がある。
(現住) 東京市外吉祥寺七八七

野口 米次郎

英米等ではヨネ・ノグチとして知られてゐる。明治八年十二月、愛知縣津島町に生れる。慶應義塾に學んだ後、渡米して米國詩人に學び、在外多年、歸朝後慶應義塾大學教授となり今日に及んでゐる。英文著書十四五種あり、邦文著書として「二重國籍者の詩」「林檎」「落つ」「沈黙の血潮」「野口米次郎詩論」及び「野口米次郎ブックレット」「私は現代風景を切る」「芭蕉論」等その主なるものであり、その他に「ロマンス」(世界大衆文學全集第卅二卷)の翻譯がある。
(現住) 東京市外中野町原八六五

野島 辰次

明治二十五年六月十九日、東京市本郷區元町に生れる。本郷小學校、京華中學校卒業。慶應大學中途退學。大正九年より同十五年まで時事新報記者をしたことがある。舊「不同調」同人。長篇小説「記念碑」のほかに、短篇評論、隨筆及び童話などがある。「今日」主宰。
(現住) 東京市外中目黒五八二

本名は辰五郎。明治二十五年四月、東京市本所區東兩國に生れる。小學校卒業後別に學歴と云ふものはない。早くより書肆の店員となり目下は東雲堂書店經營。歌集「都市居住者」「現代口語歌選」「街路樹」評論集「新社會への藝術」等の著作がある。
(現住) 神奈川縣鶴見町一四二

〔又〕

額田 六福

明治二十三年十月、岡山縣勝間田町に生れる。大正九年早大文科卒業。戯曲集「眞如」「冬木心中」「天一坊」等のほかに戯曲、大衆文藝等の作がある。
(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷二八九

〔ノ〕

能島 武文

明治三十一年五月十五日、大阪市北區眞砂町に生れる。堺中學校を経て、早大英文科卒業。「劇と評論」「演劇新潮」の編輯をし、また「近代劇全集」の刊行にも参畫

した。戯曲「裸になる一幕」「東京小景」「波紋」等の作のほかに「作劇の理論と實際」の著がある。
(現住) 東京市外幡ヶ谷八五五

野上 豊一郎

曾て白川と號した。明治十六年、大分縣白杵町に生れる。第一高等學校を経て、東京帝大英文科卒業。「龍面の女」「巢鴨の女」「お菊さん」「ビエル・ロテイ」の譯のほかに、小説、評論、翻譯などがある。法政大學教授。
(現住) 東京市外日暮里渡邊町一〇四〇

野上 彌生子

明治十九年、大分縣白杵町に生れる。野上豊一郎氏夫人。「新しき生命」「小説六つ」「海神丸」「野上彌生子篇」(明治大正文學全集第廿三卷)等の著作のほかに、小説及び翻譯「傳説の時代」がある。
(現住) 東京市外日暮里渡邊町一〇四〇

野口 雨情

本名は英吉。明治十五年十二月二十九日、茨城縣多賀郡磯原町に生れる。東京專門學校出身。「別後」「赤い月夜」「砂上の夢」「童話十講」等のほかに、多くの童話、民

昇 曙 夢

本名は直隆。明治十一年七月、鹿兒島縣大島郡名實村に生れる。郷里の小學校を卒へ、二十八年に上京。正教傳道學校に學び、翌年正教神學校に入り、三十六年卒業。直ちに同校講師となり、大正元年陸軍中央幼年學校講師、同四年早大講師、同五年陸軍教授に任命され陸軍士官學校付に補せられた。同十一年に日本大學講師となり今日に及んでゐる。昭和三年秋トルストイ百年祭に際して露國に招待されたのを併せて彼地に遊ぶこと前後四回である。多くの翻譯及び紹介があり、その主なるものは次の如くである。「露國近代文藝思想史」「露國現代の思潮及文學」「露國革命と社會運動」「トルストイ十二講」「ロシア藝術の勝利」「露國民衆文學全書(五卷)」「新ロシア・パンフレット」、翻譯には「現代露國文藝傑作集」(六卷)、「決闘」「虐げられし人々」「どん底」「トルストイ物語」「トルストイとドストエフスキ」「空氣饅頭」「革命後のロシア文學」復活等。
(現住) 神奈川縣鎌倉町稻村ヶ崎五二七

野村 愛正

神奈川縣鎌倉町稻村ヶ崎五二七

野村 胡堂

本名は長一、明治十五年十月十五日、岩手縣紫波郡彦部村に生れる。一高を経て東京帝大法科に學び中途退學。大正元年春、報知新聞記者となり今日に及んでゐる。著作「人類館」「萬年前」「太郎の旅」「美男將」の他に小説、大衆讀物などがある。
(現住) 神奈川縣鎌倉町極樂寺五三八

〔ハ〕

灰野 庄平

明治二十年四月、新潟縣刈羽郡高井村に生れる。東京帝大文科卒業、同大學院にあつた。戯曲「秦の始皇」「尊氏の歌」などのほかに評論、隨筆がある。現に日本大學講師として日本演劇史を講じてゐる。
(現住) 東京市小石川區大塚坂下町七九

萩原 恭次郎

明治三十二年五月、群馬縣勢多郡南橋村日輪寺に生れる。前橋中學卒業。「赤と黒」「ダムダム」「マウオ」文藝解放「黒旗は進む」等の編輯同人だった。代表作に詩集「死刑宣告」あり他に詩及び評論がある。

(現住) 東京市本郷區駒込千駄木町六五溝口方

萩原 朔太郎

明治二十一年十一月一日、前橋市北曲輪町に生れる。第六高等學校中途退學。詩集「月に吠える」「青猫」「蝶を夢む」「純情小曲集」「萩原朔太郎詩集」「詩論と感想」「新しき欲情」「詩の原理」等の著作あり、近時は評論を専らにしてゐる。

橋田 東聲

本名は丑吾。明治十九年十二月二十日、高知縣幡多郡中筋村有岡に生れる。大正二年東京帝大經濟學科卒業。農商務省、東京日日新聞社、東洋拓植會社、法政大學、日本大學等に奉職したことがある。歌集「地懷」評論集「自然と韻律」研究萬葉集傑作選「正岡子規全傳」長塚節歌集等の著がある。短歌雜誌「霸王樹」主宰。

(現住) 東京市外大森八景坂二二九四

橋本 英吉

明治三十一年二月二十日、松本市に生れる。静岡沼津中學校、第一高等學校を経て、東京帝大法科及び文科に學んだ。「文藝公論」を主宰してゐた。詩集「合掌の春」「午前の愛撫」「われら凱旋の日」評論集「陣痛期の文藝」等のほかに小説、詩、評論及び少女小説などがある。

橋本 英吉

明治三十一年十一月、福岡縣伊田町に生れる。小學校卒業後三井田川鑛業所に入り、大正九年上京。初め印刷職工となり後、文藝春秋社に入社した。「棺と赤旗」「發端」「一九一八年の記録」等の小説がある。「戦旗」同人。

(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷六八一

土師 清二

本名は赤松靜太。明治二十六年九月、岡山縣邑久郡國府村に生れる。十歳の秋父に死別し、十一歳より呉服店、荒物店、活字活版用具商等に雇はれ、後、十九歳にして上京、石川半山に師事、二十一歳

にして岡山市中國民報社に入り、大阪時事を経て大阪朝日記者となり三十四歳の夏、同社を退いた。「土師清二集」(大衆文學全集の内)「血けむり伊吹風」「水野十郎左衛門」「傳奇紫雲傳」等の著作のほか「砂繪呪縛」を始め大衆文藝の作がある。

長谷川 浩二

明治二十五年六月、茨城縣潮來町に生れる。早大英文科卒業。永く博文館編輯部にあり、昭和三年二月、「太陽」休刊と共に辞任した。「春を待ちしが」を初め二十餘篇の小説のほか随筆などもある。

長谷川 時雨

本名は康子。三上於菟吉氏夫人。明治十二年、東京日本橋に生れる。坪内逍遙氏に師事した。曾て尾上菊五郎と共に狂言座を創設し、また舞臺研究會を起したことがある。戯曲集「櫻ぶき」「情熱の女」「時雨脚本集」(第一卷)のほかに長篇小説「處女時代」「美人傳」(二部)などの著作がある。雜誌「女人藝術」主宰。

長谷川 伸

かつて著作の號を用ひたことがある。本名は伸二郎。明治十七年三月、横濱市眞金町に生れる。小學校半途の後、専ら獨學。大衆文藝の作多く「よもすがら檢校」「どろんの道」「日染月染」「股旅草鞋」尙他に「日本探偵小説全集」の第一七巻として「長谷川伸集」の著がある。

長谷川 天溪

本名は誠也。明治九年十二月、新潟縣刈羽郡高濱村に生れる。明治三十年早大英文科卒業。英國に留學したことがある。永らく博文館にあり、先頃同館編輯局長を退いた。「文藝思潮論」の著のほか多くの評論及び隨筆などがある。

長谷部 孝

明治二十九年十月二十九日、三重縣鈴鹿郡庄野村に生れる。大正七年早大英文科卒業。曾て「婦人書報」の編輯をしたことがある。「應酬」「靴磨きと女車掌」「赴任の前夜」「お常の貞操」等の戯曲がある。「演劇研究」編輯、イブセン會同人。

(現住) 東京市外野方町上高田九九

畑 耕一

明治二十三年五月十日、廣島市堀川町に生れる。大阪高等商業學校を卒へ、第八高等學校工科を中途退學、更に第一高等學校を経て東京帝大英文科卒業。東京日日新聞學藝記者をしてゐたが、大正十三年退社して松竹キネマに入った。戯曲「直助權兵衛」「如己」「武藏と巖流」「劫火」等。小説に「煥指」「幸福」「棘の樂園」「劍魔白藤幻之介」その他陽氣な喇叭卒(現代エウモア叢書)がある。松竹キネマ文藝部長、日本大學講師、明治大學講師。

秦 豊吉

丸木砂土の別名を近頃用ひてゐる。明治二十五年一月十四日、東京日本橋に生れる。第一高等學校を経て、東京帝大法科卒業。伯林に三菱商會社支店員として勤務してゐたことがある。先頃歸朝した。「駭者(ヘンシエル)」「エルテルの悲しみ」「メトロポリス」(世界大衆文學全集第一五卷)、「近代劇全集」第八卷、「西洋十夜」(シュニツツレル)、「西部戦線異狀なし」

服部 秀

明治二十二年十一月二十三日、埼玉縣忍町に生れる。早大文科を途中退學し、新聞記者、雜誌經營等を経て松竹合名社文藝部長となり、新聲劇舞臺監督、新潮座文藝顧問として主に關西に活躍する。

馬場 孤蝶

本名は勝彌。明治二年十一月九日、高知市に生れる。明治二十四年明治學院卒業。中學校教師、日本銀行員をしたことがある。同三十九年慶應義塾大學部教授となり今日に及んでゐる。「やどり木」「泰西名著集」「モオパッサン傑作集」「戦争と平和」「イリアッド」等の翻譯のほかに「のり草」「連翹」「近代文藝の解剖」「最近社會的文藝」等の著があり、別に小説、評論、隨筆その他がある。

濱田 廣介

(現住) 東京市小石川區水道端二ノ一八

本名は廣助。明治二十六年五月、山形縣東陽郡屋代村に生れる。米澤中學校卒業、大正七年早大英文科卒業。「ひろすけ童話讀本」(五卷)童話集「小鳥と花と」トラストイ童話集「世界童話選集」等の譯著がある。

濱村 米藏

(現住) 東京市外東調布町上沼部六六三

明治二十三年一月七日、東京市淺草區田原町に生れる。早大英文科中途退學。大正二年九月まで足掛三年帝國劇場文藝部主任を勤めた。「歌舞伎劇の見方」簡易なる日本國劇史の著の他に「日本開國記」を始め戯曲及び劇評などがある。

(現住) 東京市外世田ヶ谷町羽根木一八三〇

林 房雄*

本名は後藤壽夫。明治三十六年五月、大分市に生れる。第五高等學校を経て、東京帝大法學部に學んだが、大正十五年一月、「日本學生社會科學聯合會」檢舉事件に連座して退學。短編集「牢獄の五月祭」「鎖」林房雄集(新進傑作小説全集)翻譯「經濟科學概論」「インタナショナルの歴史」等のほかに、小説、評論などがある。

る。「戦旗」同人。
(現住) 東京市外杉並町高圓寺四〇

林 和*

明治二十年八月、千葉縣香取郡小見川町に生れる。早大文科に學び、文藝協會第一期卒業。その後、守田勘彌と文藝座を設立し、その主事及び舞臺監督となつた。「公曉」「柳澤吉保」「江戸一代女」等の戯曲がある。

(現住) 東京市外和田堀町和田五八

葉山 嘉樹*

明治二十七年三月、福岡縣豊野に生れる。海員、醫院書生、鐵道雇員、坑夫、土工などの體驗を持つてゐる。治安警察法違反にて入獄したことが二度ある。「海に生くる人々」「淫賣婦」「淺瀬船」「労働者のない船」「新選葉山嘉樹集」「葉山嘉樹集」(新進傑作小説全集)などの小説の著作がある。

(現住) 東京市外杉並町高圓寺三九

原 阿佐緒

明治二十一年六月、宮城縣黒川郡宮床村に生れる。歌集「涙痕」「白木蓮」「死をみつめて」等の著がある。

(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷成宗田端六七戸村方

原 久一郎

曾て白光と號してゐた。明治二十三年四月十日、新潟縣北蒲原郡水原町に生れる。縣立新發田中學校卒業、大正三年早大英文科卒業。東京外國語學校その他にて露語を學んだ。大正十年四月より同十四年十月まで、早大露文科及び早稻田高等學院の講師をした。「アンナ・カレリーナ」「賭博者」「貧しき人々」「永遠の良人」「生活の盃」「ランデの死」「どん底」「大トルストイ傳」等多くの翻譯がある。

(現住) 東京市外長崎町五郎窪三八八五

[七]

久坂 榮二郎

明治三十一年七月三日、宮城縣岩沼町に生れる。工業學校中途退學、後、第二高等學校を経て、東京帝大法科卒業。「犧牲者」戦闘は繼續する「復興記念祭」命令「下」等の戯曲の作がある。

(現住) 東京市外浅橋町角管八六全日本

東京市外上荻窪六四八

日高 只一

明治十三年六月、廣島に生れる。早大英文科卒業。曾て英國に留學したことがある。翻譯「ナナ」のほかに「英米文藝印象記」の著及び研究、紹介などがある。早大教授。

(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷一

日夏 耿之介

本名は樋口國登。明治二十三年二月二十二日、長野縣飯田町に生れる。大正三年早大英文科を卒業。雑誌「假面」「詩人」の同人だつたことがある。「定本日夏耿之介全詩集」「明治大正詩史」「明治大正文學樞考」「ワイルド詩集」「英國神祕詩抄」近代神祕主義」その他の譯著がある。早大文學部助教授。

(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷八七二

平田 禿木

本名は喜一。明治七年二月、東京市日本橋區伊勢崎町に生れる。舊共立學校、第一高等學校に學び、後渡歐、英國牛津大學にて英文學言語學を専攻した。歸朝後、永く東京高等師範學校、學習院等に教鞭

平塚 らいてう

本名は明子。明治十九年二月、東京麹町に生れる。お茶水高等女學校卒業、日本女子大學家政科卒業。雑誌「青踏」を興して、わが國の婦人問題に一つのエポックをつくつた。後、新婦人協會を創立して實際運動を試みたことがある。「圓窓より」現代の婦人と生活「現代の男女」婦人と子供の權利等の著のほかに翻譯「母性の復興」(エレンケイ)などがある。

(現住) 東京市外杉並町成城學園前

平林 たい子*

明治三十八年十月、長野縣に生れる。縣立諏訪高等女學校卒業。事務員、店員等をした經驗を持つてゐる。短編集「施療室にて」の外に小説及び評論などがある。

平林 初之輔*

(現住) 東京市外杉並町高圓寺六六七

平山 蘆江*

本名は壯太郎。明治十五年十一月十五日、兵庫縣兵庫湊川に生れる。長崎市立商業學校、東京府立第四中學校を何れも中途退學。滿洲營口に二年ほど流浪してゐたことがある。明治四十年歸京後、都新聞社に入り今日に至つてゐる。大衆文藝方面の著作多く、「今様源氏抄」「唐人船」「西南戦争」平山蘆江集(現代大衆文學全集第二二卷)その他がある。

(現住) 東京市牛込區富久町一三三

廣瀬 操吉*

明治二十八年、兵庫縣印南郡志方村西中に生れる。姫路師範學校を経て關西美術

院、本郷洋書研究所等に洋書を學び、後、文筆業に轉じた。詩集「雲雀」「桃色の使者」「空色の國」其他の著作がある。
(現住) 東京市外下練馬村羽根澤三四四

廣瀬哲士

明治十六年二月、岡山縣津山町に生れる。東京帝大文科卒業。佛蘭西に留學したことがある。「笑の研究」「西洋史論」等の著のほかに、ルナンの「基督」テームの「藝術論」等多くの佛蘭西文學の紹介、翻譯などがある。慶應義塾大學教授。
(現住) 東京市外下荻窪五〇四

廣津和郎

明治二十四年十二月、東京市牛込區矢來町に生れる。故廣津柳浪氏の息。大正二年早大英文科卒業。曾て出版業「藝術社」を経営したことがある。小説集「神經病時代」「二人の不幸者」「明るみへ」「握手」「朝の影」「二人の女」長篇小説「薄暮の都會」評論集「作者の感想」「翻譯」「女の一生」「六號室」等のほかに、小説、戯曲、隨筆などがある。
(現住) 東京市牛込區北山伏町四八

[7]

福士幸次郎

明治二十二年十一月五日、弘前市本町に生れる。青森中學校、開成中學校を何れも中途退學、國民英學會卒業。明治四十二年初めて詩壇に現はれ、後、文藝思想の批評をも發表するに至り、傳統主義地方主義を高唱して今日に至る。先ごろまで郷里弘前にあつて地方主義社を主宰してゐた。詩集「太陽の子」「展覧論集」「地方主義運動」などの著及び翻譯「イワシイリツチの死」のほかに詩作評論がある。
(現住) 東京市外野方町上高田二三六

福田正夫

明治二十六年三月、神奈川縣小田原町に生れる。鎌倉師範學校卒業、東京高等師範學校中途退學。大正十年まで小學校教師をしてゐた。雑誌「民衆」を主宰してゐたことがある。長篇小説「未熟地」(二卷)「詩劇集」「哀樂兒」「詩集」「世界の魂」「船出の唄」長篇叙事詩「高原の處女」「戀の彷徨者」「嘆きの孔雀」「筑波の日

福永渙

かつて挽歌の號を用ひた。明治十九年三月、福井市に生れる。早大英文科卒業、二六新報、東京毎日新聞、名古屋新聞等を経て、永く萬朝報記者をしてゐた。散文詩集「習作」短篇集「夜の海」のほかに翻譯などがある。
(現住) 東京市外杉並町阿佐ヶ谷小山六五

藤井眞澄

明治二十二年二月五日、岡山縣御津郡馬屋下村に生れる。早大政治經濟科出身。雑誌「黒煙」を主宰し、「演劇映畫講義録」を發刊し、續いて京都大將軍にあつて映畫事業に關係してゐた。戯曲集「妖怪時代」「最初の奇蹟」「新魔王」長篇戯曲「民本主義者」長篇小説「超人日蓮」同「精神醫學者」等の著作がある。イブセン會「演劇研究」同人。「祖國」編輯。
(現住) 東京市外千駄谷五六二學苑社

藤澤清造

明治二十二年十月、石川縣七尾町に生れる。小學校卒業後、専ら獨學。永く「演藝新報」記者をしてゐたことがある。小説「根津權現裏」の著のほかに、小説、戯曲などがある。
(現住) 東京市外上荻窪六〇六

藤澤桓夫

明治三十七年七月十二日、大阪市に生れる。大阪府立今宮中學校卒業。大阪高等學校を経て、東京帝大英文科在學中。短篇數種がある。舊「辻馬車」同人。「戦旗」同人。
(現住) 神奈川縣鎌倉町海岸通、魚才館

藤森淳三

明治三十年一月、三重縣阿山郡上野町に生れる。中學校中途退學。雑誌「サンエス」「中央美術」等の編輯をしてゐたことがある。舊「不同調」同人。「文壇は動く」の著のほかに、小説、評論、童話などがある。
(現住) 東京市外長崎町西向二五一九

藤森成吉

明治二十五年八月二十八日、長野縣上諏訪に生れる。縣立諏訪中學校卒業、第一高等學校を経て、東京帝大獨文科卒業。一年間、第六高等學校講師をしてゐたことがある。短篇集「新しい地」「研究室で」「寂しき群」「煉獄」その頃の追憶「東京へ」「長篇」「若き日の悩み」「煩惱」「妹の結婚」「舊先生」感想集「藝術を生む心」「大地の匂ひ」「狼へ」「悩み笑ふ」戯曲「相戀記」「何が彼女をさうさせたか」、又「新選藤森成吉集」「藤森成吉集(現代日本文學全集第四七卷)」「光と闇」の著あり、目下外遊中。「戦旗」同人。
(留守宅) 東京市小石川區雜司ヶ谷一一五

舟木重信

明治二十六年七月、廣島縣江田島に生れる。東京帝大獨文科卒業。二年ほど外遊して大正十三年歸朝。短篇集「樂園の外」のほかに小説、研究翻譯などがある。早大講師。
(現住) 東京市外駒澤上馬引澤九一八

舟橋聖一

明治三十七年、東京に生れる。東京帝大

[ホ]

保篠龍緒

國文科卒業。舊「朱門」同人である。戯曲「痲疾者」「白い腕」その他の作がある。「心座」同人。
(現住) 東京市外下落合四三五

細田源吉

明治二十四年六月一日、川越市南町に生れる。大正四年早大英文科卒業。雑誌「文藝行動」を主宰したことがある。長篇罪に立つ「こゝろさげぶ」「存在」(中篇)「短篇集」「はたち前」「未亡人」「死を待つ女」等は主なる著作である。「文藝戦線」同人。

「白痴」「戦争と平和」「神々の死」「アルタモーンフ一家」などはその主なるものである。陸軍大学教授。

(現住) 東京市外中高井戸町三五

米澤 順子

明治二十七年十一月二十二日、書家渡邊沙鷗長女として東京市神田区小川町に生れる。三輪高女卒業。幼にして日本書を故馬杉青琴、熊谷直彦、荒木寛政に學び、更に近年は洋書を小寺謙吉に學び、光風會白日會朱葉會等に出品したことがある。大正六年商科醫米澤理藏に嫁した。詩集「翠水盤」長篇小説「雪花」等がある。

(現住) 東京市外中野町一〇八九

[リ]

龍膽寺 雄

明治三十五年四月、千葉縣佐倉町に生れる。幼少年時代を茨城縣下妻町にて過す。慶大醫學部に學んだが中途退學。「放浪時代」「アパートの女達と僕と」「事務所」「十九の夏」等の小説がある。

(現住) 東京市外目白文化村目白會館内

[ワ]

若山喜志子

明治二十一年、長野縣東筑摩郡廣丘村に生れる。故若山牧水の夫人だつた。太田水穂氏に師事し、後、故牧水氏に嫁した。多くの短歌の作がある。

(現住) 沼津市市道町

和氣律次郎

明治二十三年一月、松山市に生れる。慶應義塾大學中途退學。大阪毎日新聞記者となり先頃外遊を試みた。「オスカア・ワイルド」「エビキュラスの園」「畫僧フラ・アンヂエリユ」「マダダラのマリア」「七つの燈火」等の翻譯のほかに、小説、紹介などがある。

(現住) 大阪市大阪毎日新聞社氣付。

和田 傳

明治三十三年一月十七日、神奈川縣厚木町在恩名に生れる。厚木中學校を経て大正十二年早大佛文科卒業。同十四年まで「早稻田文學」編輯に従事した。處女作「山の奥へ」のほかに短篇小説の作があり、ほ

かに「日本田園文學」「世界田園文學」の編著がある。

(現住) 東京市外目白上り屋敷三五九一

渡邊 均

明治二十七年八月六日、播州龍野に生れる。京都帝大文科卒業。「一茶の癖み」「蜘蛛」「祇園十二夜」「祇園風景」等の著の他に長篇小説「京都」を始め小説、隨筆などがある。大阪毎日新聞記者。

(現住) 大阪市北區堂島北町三五

綿貫 六助

明治十六年四月八日、群馬縣利根郡久呂保村に生れる。陸軍教導團を経て、明治三十五年陸軍士官學校卒業、更に大正三年早大英文科卒業。十五年間の軍隊生活の體験あり、日露戦役にも從軍した。陸軍歩兵大尉である。後、中學校教師をしたことがある。大正十年以來、作家生活に入つた。長篇小説「戦争」短篇集「蠶肉を凝めて」等のほかに小説、讀みものなどの作がある。

(現住) 東京市外長崎町三八四六

定價壹圓七拾錢
郵送料拾貳錢



文藝年鑑
昭和五年一版

昭和五年二月廿八日印刷
昭和五年三月十日發行

編輯者 文藝家協會

發行者 佐藤 義 亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

振替(東京)

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

東京市小石川區江西戶川町
富士印刷株式會社印刷

文藝家協會編纂・四大年刊集

毎年一ケ年間の主要なる作品を輯めて一卷となす。文壇人を始め網羅し盡せる文藝家協會の厳選にかゝる權威ある選集にして、昨年より新たに「詩と隨筆集」及び「大衆文學集」を創刊し、以て文壇全部の代表作を網羅することとなつた。

日本小説集・日本戯曲集は、大正十四年版より全部取揃へあり。

日本小説集

昭和四年版 價壹圓七拾錢 郵送料拾錢

大衆文學集

昭和四年版 價壹圓五拾錢 郵送料拾錢

日本戯曲集

昭和四年版 價壹圓七拾錢 郵送料拾錢

詩と隨筆集

昭和四年版 價壹圓五拾錢 郵送料拾錢

各集の昭和五年版は三月刊行の豫定(新潮社出版)

眞鍮の眞の操切符

暴露されたる米國の正體

米國作家 アプトン・シンクレア著 早坂二郎氏譯

女性の眞操を買ふ爲の眞鍮の札！ 此の書は新聞を智的賣淫と叫んで、米國ジャーナリズムに對し打放てる最初の巨彈である。
世界の王でもあり、悪魔でもあり、結局また、世界の謎でもあるアメリカ！ 而してその資本主義の中に棲息し、パチルス傳播者の役割を演ずるジャーナリズムを生きながらに解剖し、掴み出した五臟六腑を血の滴りと共に讀者の前に投げつけたのが即ち本書である。その内容は、手に汗握らする、戦慄すべき事實を以て掩はるゝも、一毫の誇張なく、一筋の虚偽だも無い。著者は斷然、神明に誓つて、一切は眞實であると絶叫する。此の恐ろしき暴露實話の刊行せられんとするや、果然、全米の新聞雜誌社、出版社、印刷所、紙屋等の激烈なるボイコットを受けたので、著者は、自ら勞働者となつて、粗悪なるハトロン紙に印刷し、自費出版するの已むなきに至つた。而もそれが如何に迎へられた乎？ 一ヶ月の中に四萬三千五百部！ 年餘にして十五萬部！
暴風的センセーションの裡に、出版界の記録を破る驚異的數字を示し、更に獨、佛、伊は勿論、和、丁、匈、諸、瑞典等の十數ヶ國に翻譯され、百萬の大讀者網を完全に世界の讀書階層の間に敷き、磨げられた「眞實の書」の最後の勝利を示した。今、日本の讀書階層に、「世界に通ずる現代の呼吸」を贈るべく、初めて此の譯書は生れた。鮮血生ましくしきアメリカの解剖圖は、今日本の一切の人の前に在る。

忽ち三十二版！

暴風の賣行
きを見よ

▼四六判紙装 ▼定價壹圓九拾錢
▼六百三十頁 ▼郵送料拾貳錢

アプトン・シンクレア著
早坂二郎氏新譯

新刊—第十二版出來

定價壹圓八拾錢
郵送料拾錢

現代人の生活戦術

新潮社
出版

第一部 精神讀本 ■ 第三部 戀愛讀本
第二部 人體讀本 ■ 第四部 社會讀本

ウルトラ現代的教養の

最高峯遂に現はる！

時代は急テンポを以て進む。

不斷の進展、俄然急旋回する展望。——端倪すべからざる眼まぐるしさの裡に、現代人の思想生活、經濟生活は、無限に複雑化して行く。

この轉變の萬華鏡を前にして、現代人の教養は、先づ自己の視角を正常に維持し、現象に掻き亂された場合に、その誤差を發見すべき尺度を把握しなければならない。

本書は實にその時代的急需に應ぜんがために生れたのである。

著者はエチ・ジ・ウェルズと比肩する米國隨一の文明批評家、偉大なるジャーナリストにして世界的なプロレタリア作家である。

その四十年に亙る體驗、——失敗は失敗として卒直に告白し、失敗によつて一層妥當性を増したその身心兩方面に於ける體驗を傾倒して、現代生活の羅針盤を大成した。

生活の現實に即したるが故に説く所剴切的確、思想の練磨を基礎としたるが故に展望開闊、新社會の建設に志す學徒、より高きものを欣求する進歩的な現代人すべてにとつて、他に替ふるべき何物をも見出だす能はざる絶好の指導者であり、行届いた同伴者である。

篇を分つこと四、精神、人體、戀愛、社會の別個の讀本を成してゐるが、最後の社會讀本が前三篇の總括的結論として、現代人の持つべき最大の關心事を組織的に配列批判してゐる。

資本主義文化の嚴正なる價值批判、進歩的現代人の高等常識として、現代社會組織の謳歌者たると排撃者たるとを問はず、齊しく謙抑に味讀すべき「生命の書」であることを聲明する。

新しき人生觀、世界觀の確立へ！

「現代」の呼吸に觸れ、脈搏に聽け！

勝本清一郎氏著

第六版出來!!

前衛の文學

四六判紙裝三百九十頁
定價壹圓八拾錢
郵送料拾錢

第一 本格批評への道 外六篇 第二 正宗白鳥論 外二篇 第三 前衛戰に於ける作家達
藝術的價値の正體 徳富蘆花論 外二篇 一九二九年度の文藝

第四 小林たい子の夜風 外二篇 第五 チェーホフの頂點 外二篇
蟹工船の勝利 戯曲の社會的改作

新興藝術の爲めの新興藝術論を論じる人として、勝本清一郎氏は、今、萬人環視の中に居る。その深い洞察と、深い認識とを以て微塵の間隙も見せざる論旨と、軍厚にして熱意に充ちたる態度とは、氏をしてマルキシズム文學の陣營に、半として抜く可からざる力強い存在たらしめた。今、論集「前衛の文學」出づ。こゝに取上げられた問題の殆どすべては、所謂「ブルジョワ藝術」に對する挑戦である。崩壞の過程に在る「過去の藝術」を排撃し去ると共に、「新しく建設される藝術」に就いて、其の尖鋭な思想と其の把握する深い眞理とを以てプロレタリア文學の方向を明かに指示し、プロレタリア文學の爲めに長虹の氣を吐いてゐる。

プロレタリア文學は如何に進むべきか?

中河與一氏著 (佐伯祐三氏デッサン裝幀) 増版出來!!

形式主義藝術論

四六判二百八十頁
定價壹圓七拾錢
郵送料拾錢

著者疾呼して曰く、從來のフルジョア文學論、殊にプロレタリア文學論に飽きたらぬ者は須らく來つて此の新理論に就けと。

形式主義藝術論は、昨年の文壇に大なる衝動を與へた題目であつた。併し、これは決して年度的に終始するやうな一時的の問題ではなく、こゝに新時代の新美學の出發があるといふ見地から、中河氏は奮然として此の一著を公にされたのである。この一巻を草するにあつて、著者は數ヶ月間机に向つたまゝ一瞬の休息をさへ惜んだと云はれる。いかにそれが天來的な情熱によつて書かれたものかを知る可きであらう。見よ! 過去一切の文學論は、この新理論によつて根柢から訂正せられねばならぬ。この明快にして強力なる科學的新美學の上に立脚しない限り、一切は無意味であらうとは、著者の揚言するところだ。實に著者が心血をかたむけ盡して編みなした劃期的の一大評論である。

尖端的機械その他の寫眞十六枚を別刷り口繪として掲ぐ。

ずらあに版出約豫・了完册三全

集全プツリィフ

錢二十料送・錢拾七圓壹册一・本美製特・頁十七百四册各

▼この全集の譯者達はフイリツプを深く愛する人々の集りである。彼々が石川啄木を愛する心は、啄木よりも一層複雑な多面的なシャルル・ルイ・フイリツプを愛好する心と全く同じであるからだ。

吉江喬松

第一卷

■小 さ な 町 小牧近江譯
■短 篇 物 語 集 堀口大學譯
■若き日の手紙 神部 孝譯
■ペルドリ爺さん 井上 勇譯

第二卷

■シャルル・ブランシヤアル 吉江喬松譯
■母 へ の 手 紙 山内義雄譯
■野 鴨 雜 記 林 柁木譯
■マリ・ドナディユ 土井逸雄譯

第三卷

■母 と 子 山内義雄譯
■哀れ 四つの戀物語 前田鐵之助譯
■ク ロ キ ニ ョ ル 内田傳一譯
■ビュビュ・ド・モンバルナス 小牧近江譯
■二十歳の日記 神部 孝譯
■シャルル・ルイ・フイリツプ アンドレ・ジイド 小牧近江譯

▼彼が取り上げたものは、金持ちがそれを樂しむ爲に弄んだ美ではなくて、貧しいものがお互ひを感じ合ふために、發見し、藝術化した美である。これは流弊であり、それ故に眞實である。

片岡 鐵 兵

▼貧乏はやめよう！ 乞食は悪だ！ 富んで、奢れる者どもも、いつかは我々の辛抱強い憎みから、自滅する時が来る！ と。その力強い教訓を、彼は身の上話として語る。

前田河廣一郎

14.4
989

終